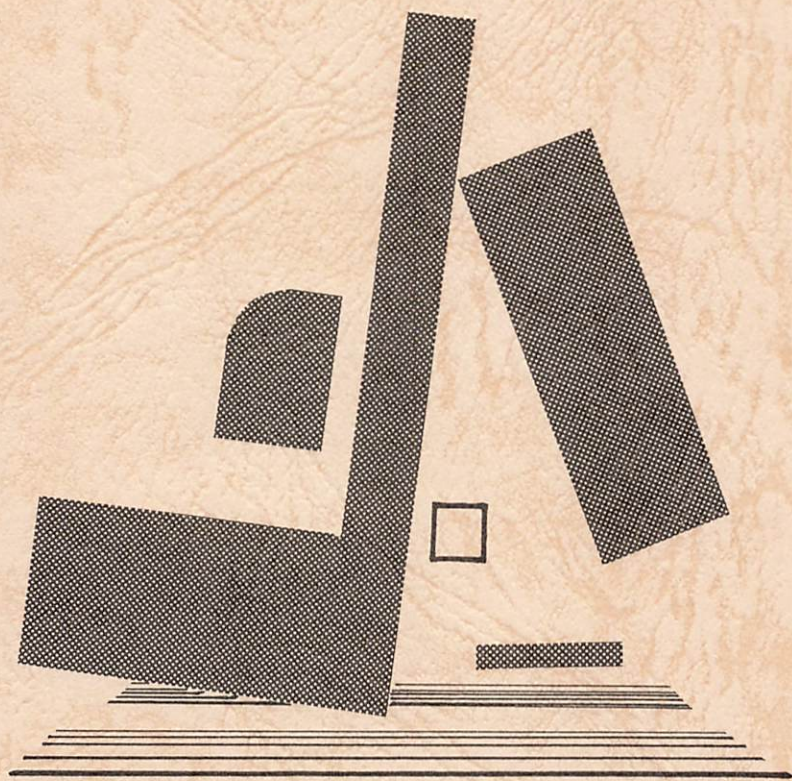


KYOBUNKEN

所報

1995



神奈川県教育文化研究所

と き 新たな時代をめざして

理事長 繁 里 昭



神教組は教文研の金原研究評議会議長はじめ関係者のみなさんのご尽力に対しまして心より敬意を表し感謝を申し上げます。

さて、教育の充実・発展は国民に信頼される政治の展開が極めて重要です。いま政治は自民党単独政権が崩壊し連立政権の時代となりましたが先行き不透明・不安定な政局が続いています。経済もバブル経済の崩壊の後遺症や急激な円高等により景気の低迷が続き、雇用不安、企業の海外転移等厳しい状況が続いています。さらに、1月17日に襲った阪神・淡路大震災や「地下鉄サリン事件」の発生が国民を不安に陥らせています。教育は月2回の土曜日を休日とする学校週五日制が95年度より実施されましたが「いじめ」等教育課題は山積されています。こうした中で、第13回統一自治体選挙が行われ、神奈川知事に私たち連合神奈川の推せんする岡崎洋候補者が当選しましたが、23万票の無効票等は東京、大阪で顕著に示された「オール与党相乗り」等に対する県民の声と受けとり、神奈川においても謙虚に耳を傾けなければならないと思います。また、教育についても、21世紀に向けて国際化、情報化等激動する時代において文部省は第15期中央教育審議会を設置し「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」を諮問しました。私たちはこれに対して従来の反対・粉砕を叫ぶのではなく、子どもと直接ふれあう教育現場での「21世紀の教育の創造」を積極的に取りくみ、いろいろな機会 で提言していくことが大切だと思います。そのために、神教組及び教文研は教育の重要性がますます高まる時代を確信して各界各層の多くの人々の意見を聞き、今までの教育研究の成果を大切にして教職員の専門職としての資質をも高めながら日頃の教育実践を通して具体的な教育改革を提起し実現したいと思います。それは完全学校週五日制を前提にした「学習指導要領」の改訂等を中心に大胆に教育を改革し、教育の創造を具体的に提起されることを期待します。また、学校は子ども・教職員・校長等の人と人との信頼関係が重んじられる人間性豊かな教育の場であります。

いま、学校での人と人との信頼感を持ち合うことの障害になっていることを的確にとらえ、その障害を取り除くことを強く求めたいと思います。

長洲前知事は神奈川の教育の発展のためにある時は先頭に立って、また、私たち教育関係者を温かく叱咤激励され、県民の間に「騒然たる教育論議」を巻き起し「個性・共生・共育」を理念とした「ふれあい教育」の実践を大きく前進させました。私たちは長洲前知事のご功績とご苦勞に対しまして敬意と感謝を申し上げます。そして、岡崎知事の県政の中でこの教育運動を更に前進させたいと思います。この役割の一斑を担う教文研に強く期待したいと思います。

最後に、2期4年の任期を務め教文研の更なる前進に貢献された倉持巳佐男所長が退任されます。倉持巳佐男所長のご功績とご尽力に対しまして神教組のみなさまと共に敬意を表し感謝を申し上げます。

時代の風と「知」の漂流の中で



研究評議会議長 金 原 左 門

「戦後50年」の掛け声のもとで幕をあけた今年は、そうそうから阪神大震災、東京二信組問題、そして地下鉄サリン事件、さらに、オウム真理教団の恐るべき組織と活動の底深さがあばかれていくなかで、日本のもろさを、いやというほどみせつけられた。とくに、かつてない無差別テロを狙ったサリンとオウムの二つの事件は、誰も予測できなかったことではなかったか。

この間、国松警察庁長官の狙撃、オウム幹部の謎めいた刺殺問題がからみ、この一連のさいげんのない奇怪現象は、わたしには、「戦後50年」の検証への取り組みをあざけり笑っているかのように受けとれる。オウムの教祖や幹部らの仕掛けた信者獲得から「国家転覆」を狙うかのような“ハルマゲドン”にいたるまでの現代技術を悪用しての攪乱暴力行為は、日本と世界の「戦後50年」に対する悪辣な挑戦である。その所業は、ファシストの手口とよく似ているといっても過言ではない。

こうのべておいて、この数か月間、日本が大きく揺さぶられるなかで、ふと不安に駆られるのは、多くの日本人のオウム問題への態度である。昨今、人びとの間でこれほど大きな反響を呼んだ話題も珍しい。どこへいっても、「オウム」「オウム」である。しかし、話の焦点は事態の推移に関する興味本位に終始することが多く、どうしてこういうものが現われたのか、「こと」の本質は、といった関心度の高い話はみあたらない。

いまの日本には、ファシストまがいの行為を許し、人権を軽んじ、殺戮をへとも思わないような風潮が流れている。これらの諸問題を排除する力量も「知」も弱い。戦後50年の「つけ」が、もしこういうかたちで示されているとすると、時代のせいにするだけではことは済ませられない。

不条理、不合理がまかりとおることにたいし、これを徹底的に否定していく新風をどのようにつくりだしていくべきかが、いまの日本人にとって緊急な課題となってきた。どうやら50年の経過のなかで、非を非とし、是を是とする日本人の抵抗力和創造力が、世代交替もあるとはいえ、失われていった事実、否定できない。

今日の事態をみて、わたしは、かつて国際関係論の故江口朴郎さんと対談したときのその江口さんのつぶやきを思いだす。13年前の話である。これまで、日本は運がよく、日本人はたいへん無理を重ねて資本主義の原則を貫き辛うじてここまできた反面、その「空しさ」と「自信」の無さそうな空気が支配していると。どうやら「多忙」と「空しさ」の意識が経済の減速と失速のなかで社会の表層にあぶりだされると同時に、一般に目にふれなかったカルト意識症候群が表出してきたのが昨今の空気である。オウム真理教の「狂信」は、「知」を欠いた上記のような社会状況を縫ってたちあらわれたといつてよい。

こんなことを思いめぐらしていると、いまや、とにかく「知」の再生が不可欠となる。そのためには、平凡なことがらであるが、新しい学校づくりに本気に取り組んでいくことがなによりも重要になってこよう。

(中央大学教授)



誰でも自分の姿を否定的に見ることはいやだし できにくいし そういうことはしたがらないし進んではしない 自分の状態を冷静に冷静にと 辛抱強くみつめることは大変難しい 現状は順調であるかのように 多くのヒトヒトは振舞っているが 我が国の公教育の態勢は 内側から変質が進行してきた 小学校から大学までの少青年子女の教育環境は敗戦後最低の劣悪さにまで落ちこんでいる これからの先行きは暗い

危険な情報技術文明に乗った根なし草の経済バブルと一国平和ボケの日常とも深く結びついてきた 各方面の教育費は増大しているが 現状に対して どんなに金を注ぎこんでも 我が国の公教育の希望の持てる姿は 何も生れ出るものはない

○

我が国は 昭和20年に見る影もなく敗北した 激しい米軍の空襲の連続で 列島の都市は瓦礫と化し 文字どおり国破れて山河は残り その当時の人々は廃墟から立ち直ろうと決意に燃えた 青年の私もその一人だった それから今平成7年の4月までの長い年月我が国は どういう理想を掲げて生きてきたのであろうか 誰か 我が国が国家として持った理想は コレ! だったのです と力説または説明できますか 政治家の一過性の野心や 時の政権の野望などというものは勿論我が国の理想に価するものとはちがう “経済大国” “一国平和主義”とかいうが それは世界史的に言えば 過渡的政治現象に過ぎない

○

デンマークにコペンハーゲンという首都がある 私も古い過去に二度ほど訪れたが 当時は静かな雰囲気のある街だった 去る3月の中旬 世界中から114ヶ国が参加した今世紀最大規模のサミットが コペンハーゲンで開かれ 数千人の出席者となった 7人か8人の特殊なサミットと違って さまざまな国の首脳者が閣僚や専門パートナーを伴って会議が進行した 「Social developmentのためのサミット」 が名称であった 「社会発展」のこのサミットを 日本国内では経済協力による「開発」問題のように受けとめたふしがある マス・メディアも経済開発問題に局限したかのように狭小な枠でニュースにした 村山政権も「発展」を「開発」と誤謬を以って受けとめたのではないか 我が国には 社会発展に関する哲学も思考も長いこと姿を消している

○

列島改造・開発の政官財の経済（カネ儲け）第一主義の政治的発想は奔流となり癒着・談合・開発の道行きは止まらない 開発を社会的善であるかのように政治家は叫んで自然を破壊し支配する人間の傲慢さを恥じる風潮もない 「愚公山を移す」図柄は国会議事堂に飾るがよい 理想なく哲学する力もない社会で 公教育はますます衰弱する

目 次

新たな時代をめざして	理事長	繁 里 昭	
時代の風と「知」の漂流の中で	研究評議会議長	金 原 左 門	
馬馬 虎虎	顧問	三 好 新 次	

I 教育文化研究所活動報告

●第一研究部「子どもの生活研究委員会」	市 川 博	1
●第二研究部「教育改革研究委員会」	富 山 和 夫	4
●事業部	金 原 左 門	6
●調査委員会	宮 島 喬	7
●教育相談部	菅 龍 一	8

II 地区教育文化研究所活動報告

横 浜	15
川 崎	24
三浦半島	33
湘 南	40
湘 北	45
中	51
西 湘	59

III 研 究 論 稿

日本社会のあり方を問う外国人参政権問題	宮 島 喬	67
高校改革の論理と現実	黒 沢 惟 昭	74
教育とこころの健康 II		
—教師のこころの健康を中心として—	林 洋 一	82
神奈川の高校改革をめぐる	広 瀬 隆 雄	90
教文研の相談活動を考える	内 山 淳	96

IV エッセイ

阪神淡路大震災から何を学ぶか		
—防災についての聞き書きから—	木 谷 要 治	104
情報整理という強迫	府 川 源一郎	109

古い家と新しい家	高 橋 和 子	114
都心の過疎化と公立高校	富 山 和 夫	118

V 1994年度の歩み

一年をふりかえって	所長 倉 持 巳佐男	121
活動日誌		126
教文研だより・資料等の発行		127
フィルム・ライブラリーの貸出状況と所蔵フィルム		127
県教育文化研究所各種名簿		133

I

教育文化研究所活動報告

第一研究部 子どもの生活研究委員会

研究評議員 市 川 博

1. 子どもの生活意識調査とその検討

本年度における研究会の主要な活動は、前年度の継続で、子どものひと・自然・ものとのふれあいについての意識調査をまとめることであった。1992年9月、その調査活動に着手し、10月に予備調査(小学校2校、4・6年生、各2クラス283名、中学校1校、1・3年生、各4クラス281名)、94年6月に本調査(7地区の小・中学校の各学年2クラス3,996名)を実施し、その成果を分析・検討して、95年2月に『生活意識調査報告 子どもたちのふれあい—ひと・自然・もの—』のタイトルで発行した。

その目次は、「はじめに 第Ⅰ部 調査の目的と方法 第Ⅱ部 調査結果 1.予備調査結果 2.本調査結果 3.自由記述にみる子どもたちの姿 第Ⅲ部 総合的考察 1.自然や動物とのふれあい 2.人間とのふれあい 3.コミュニケーションとしての長電話 4.気になる子どもたちに関する追跡 5.ふれあいの疑似性・人工性 第Ⅳ部 要約コラム(1) 保健室から見える“人とのふれあい” コラム(2) なぜ大人になりたくないか <資料> 質問紙及び集計表」である。この調査・分析結果については、上記報告書をご覧ください。

2. 自分自身の生活の見直し・対象化へ

上記の調査に関する検討と平行して、現在の自分たちの生活そのものを見直す作業を行った。それは、激動の時代に突入して、人類の存亡にかかわる重大な問題状況に突入し、人間の在り方、それに積極的にかかわる学校教育の在り方が大きく問われてきているのに、私たちは旧態依然の学校観・教育観で問題をとらえ、処理しようとしてまいいか。日常性に埋没して、また島国の閉鎖性の故に、時代の大きな変容・問題状況の厳しさに気がつかなかったり、解決困難として手をこまぬいてまいいか。それらを反省して、私たちの視野・視座を検討し直してゆく必要性を感じたからである。

その問題意識で本年度に研究・討議したものを次のようにまとめることができよう。

その第一は、今日の学校・子どもの現状・問題点について把握・分析する作業である。

①5月に、林 洋一氏の「新しいコミュニケーション—高度情報社会の到来—」の報告を基に、急速に発展しつつあるパソコンを通してのひと・もの・自然との新しいかわり方の実態・意義・問題点について検討、②7月に、小山雄二氏の「今、学校で Part 1—教育現場からの声—」の報告を基に、小学校の研究・教育活動の現状と直面している問題点について検討、③9月に、鈴木 浩氏の「今、学校で Part 2—教育現場からの声—」の報告を基に、自分の“非”を認めない生徒、問題の解決方法が見出だせない生徒親子、

罪悪感なしに性非行に走る女生徒の事例を手がかりとして、中学生の問題行動の変質（よくわからない問題行動）について検討、④11月に、田中正司氏から「大学と社会と学校教育の課題をめぐって」のテーマで、古代から今日までの大学の性格の変遷と今日における特徴と問題点について報告を聞き、検討した。

第二の柱は、自分自身及び子どもの世界を凝視・問い直しつつ、自己の感性を高める作業である。①6月は、高橋和子氏から「からだの教育『卵は立つ』—実習を通して—」の報告を聞いた後に、生卵を縦にして立たせる作業を15分間行ない、そこで感じたことを絵に描いて報告し合うことで、人と人がかかわり合う感性を高める意義・問題点について検討、②本年1月は、菅 龍一氏から「子どもの発達段階と親のかかわりかた—ダメ親父の子育て記—」のテーマで、氏がご自分の子どもさんと、変身して（演技して）、遊んだ（かかわった）体験談などを聞き、子どもの世界を理解すること、かかわること、かかわり方について検討した。

第三の柱が、諸外国の活動を手がかりとした日本の教育への見直しである。①12月は、ニューヨークの近郊のヘイスティングスという小さな村の公立学校に、91年12月から94年6月まで小学校4年生の男の子と6年生の女の子を通わせた福田悦子氏から、「日本の学校、アメリカの学校—子どもの留学経験と帰国子女の悩み—」というテーマで報告を聞いた。②2月は、浅見 聡氏から「東西ドイツの統一と教育改革」のテーマで、東西ドイツの統合を事例を中心に据えながら、欧州統合宇宙船・地球号における新しいアイデンティティの可能性・在り方などについての報告を聞き、検討した。③3月は、木版画家の夫と小学校3年と幼稚園年長組の女の子とともに、1993年11月から約1年間、スペインのバルセロナで生活して、私立の現地校に通わせた高垣真理氏から「バルセロナの学校生活」についての報告を聞いた。3報告とも、日本の今日の教育をとらえ直す多くの示唆を含んでいるが、紙数の関係で、①について項を新たに紹介したい。

3. ヘイスティングスの公立学校

国土が狭く、全国一律の傾向の強いわが国においても、地域・学校差はかなりあるが、特にアメリカは州・市・町・村の教育委員会ごとに異なり、地域による違いが大きい。これから紹介するのも、ある特定の地域・学校の個人的な体験に基づく報告にすぎないことをあらかじめお断りしておきたい。

福田氏のお子さんが通ったのは、ニューヨークの郊外の小・中・高校各1校しかない穏やかな小さな村の公立学校である。そこに入学させた理由は、普通、子どもづれでニューヨークのマンハッタンに住むと、公立だと、越境入学者の比率の高い、いわゆる“良い学校”といわれる2つの小学校に入ることが多い。だが、中学になると麻薬・酒の誘惑の少ない国連高校などの私立に入れることが多い。そこは、費用が高く、しかも通学途上に誘惑が多く危険なため送り迎えを必要とする。有名大学への進学率の高いスカッテルという公立高校もあるが、大規模校で学力差が大きく、英語のハンディキャップのある子にはついて行けない。せっかくの短い外国生活なのでゆったりと就学させたいということで、郊外の公立校に入学させることにしたとのことだった。その学校で興味深かった点として次のことが挙げられる。

1)開かれた入学体制（手続き）

入学希望者は、学校に直接連絡してアポイントメントを取り、校長・事務担当者・入学する学年の教師と面接して手続きをする。親が外国語が不自由な場合、ESL（英語を第二外国語としている生徒が受けられる授業）の教師が付き添ってくれて、必要な手続きをすべてやってくれる。「困った時には、いつでも学校にきて、何でも相談して欲しい。子どもが心配なら、一日中教室にいて見守っていてもよい」と、万事に閉鎖的な日本の学校と異なり、学校が開放的で、子どもが不安なく就学できるように木目細かく配慮され、誰でも積極的に受け入れようとする姿勢を強く感じた。

2)フレキシブルな時間割

小学校は8時45分から3時5分まで授業。時間割はあるが、教師の自由な裁量に任せられている。但し、専門の教師が担当する音楽・体育・第二外国語（5年生より開始）・美術・コンピュータの時間と、10時のスナックタイム（軽いおやつを食べる）だけは時間が決められている。なお、小・中学校とも教師の担当する学年が専門化していて、原則として同一の教師が毎年、同一の学年を担当する。

3)多様なサービス

小学校の1クラスの児童数は20名以下とされており、教師の目も行き届きやすいが、次のような多様なサービスが準備されている。①心理カウンセラー（不登校など子どものことで困った時に相談）、②ラーニング・リソースクラス<チーム>（学習についていくのがちょっと難しい時、ある時間、クラスを抜けて、計算・読み・書きなどについて一対一で教師の丁寧な指導を受ける）、③ガイダンス・カウンセラー（跳び級または学年を落としたクラスに所属することを希望するなど学業に関連した相談）、④ESL(前述。英語の特別な補習授業)、⑤スピーチ・ラーニング・セラピー（表現したいことがうまく他の人に伝えられない子の訓練）、⑥コミュニティ・オブ・スペシャル・エジュケーション（クラスに配属されているが、多動児などを、特定の時間または長期間、特別に指導）

中学校では、①ガイダンス・オフィス（生徒のことでトラブルが起こった場合、ガイダンス・カウンセラーが学年担当の教師から事情を聴取したり、会議を開き、教師に問題がある場合にはその教師を指導する。また、カウンセラーは、校長に進言することによって問題のある教師を退職させることもできる）、②心理相談室 ③保健室がある。

4)奉仕活動を重視

例えば、授業の一環としてベビーシッターの練習（幼稚園の終園後、帰宅のバス待ちをしている子に対して、本を読んだり、トイレに連れていったり、靴の紐を結んでやったりする活動など）をしたり、ボランティア活動が校内外で積極的に奨励されている。

5)中学では自立・責任感の育成を重視—厳しく鍛えることを重視—

小学生に対しては、社会生活に慣れる、心地よく勉強することを重視するが、中学生に対しては、きちっと知的な学習をしたり、テーマを設定して調べ、レポートを書いたりすることを重視すると共に、自立して判断・行動できる力を鍛えることに力点がおかれる。そのために、小学校の最終学年の5年生になると、その準備のための教育が始まる。

学校の入学手続きは、親は介在させず、入学を希望する中学生本人と教師で手続きを行なう。生徒が英語が不自由な場合、ESLの教師がその教え子（3年前にアメリカにきた日本人生徒）を訓練のために連れてきて、その子に通訳させながら手続きを行う。

（横浜国立大学教育学部教授）

第二研究部 教育改革研究委員会

研究評議員 富 山 和 夫

教育改革検討委員会では、先ず4月に1年間の検討課題、研究計画等について自由討議を行った。そこでは、基本的に従来のように当面の教育課題、具体的には高校改革問題、生涯学習、新しい教育観、教育情報の公開、人権問題等々を適宜採り上げて検討していくことを確認した。

この方針に基づいて、5月には赤尾さんから「生涯学習について」の報告をしていただいた。赤尾報告は、生涯教育が生涯学習へと変化していく過程を明らかにし、そこでの臨教審や文部省の意図を探り、関連の諸政策にも論及したものであった。

6月には、1993年末の高課研の報告をうけて発足した県の協議会が「大綱」を発表したことを受け、この問題についての神教組の考え方について、小中さんから報告をしていただいた。この報告の行われた時点では、「大綱」と高課研の報告では幾つかの点で内容的にかなり異なった部分があったが（普通高校での推薦制の導入など）、その後の折衝の過程で、これらの諸点についての改善を求めていくことが報告された。

7月には、黒沢さんが「教育における『個人主義』の背景」について報告された。この報告は、1.「新しい学力観」をめぐる、2.教育における「競争」をめぐる、に大別され、非常に広範囲にわたる論点について言及された。1.では、(1)「新しい学力観」でその基本的な内容を要約、(2)「新しい学力」の諸見解では、梶田勲一氏、高岡浩二氏、有園格氏等の見解を紹介、整理され、(3)「新しい学力観」と生涯学習では、「46答申」との関係、生涯「教育」が生涯「学習」へと変容する過程（「臨教審」）を、「市民社会の成熟術」と「国家のヘゲモニー」との関連でとらえ、企業社会の変貌と教育要求とについて言及された。さらに、(4)90年代の企業の変質では、財界トップの現状認識と提言、技術立国の「光と影」、クリントン政権のロバート・ライシュの教育への提言等を採用し、(5)終身雇用の解体では、「20%の幹部要員」という日経連会長の見解を紹介された。(6)残された課題では、財界と「一周遅れのランナー」（文部省）、「生涯学習」の完成、「日米」の教育・風土の比較検討、「二極分化」への対応、「公立校」の再生（アメリカの「学校選択」の実験）、等について触れられた。2.では、(1)旧社会主義圏の大変動、でその意味を吟味され、(2)学校選択と学校参加、で①私学ブーム、②公教育の危機、③公立学校関係者の見解、④私学選択の理由、等の要因を多角的に検討され、(3)総合選抜制と学校評議会、では伊奈学園総合高校、ネットワーク化、地域教育会議等に言及された。

この報告に対して、9月に討論だけの日を設けて議論をした。その中では、伊奈学園や筑波大学付属坂戸高校等の総合高校の評価、等々を巡って活発な討議が行われた。

1993年春から発足していた高校改革作業部会が、報告書を取りまとめた。作業部会では、1993年10月に「中間報告」を取りまとめているが、この「中間報告」は資料を提供することに重点が置かれていた。これに対して、本報告では、高校改革についての具体的な提案を念頭において、取りまとめ作業を行った。報告書は、中間報告の場合と同様に、外部か

ら作業部会に参加していただいた方々にも全面的に協力していただいた。

『高校教育改革の方向と課題』（県教文研資料シリーズⅢ）は、全体は4章からなり、それぞれに分担執筆したが、原稿の段階で討論をおこなって、意見の調整を行った結果をまとめたものである。その内容を詳述することは割愛し、以下にその目次だけを紹介する。

第1章、高校改革の基本視点—格差是正の実現と個性化への対応—（黒沢惟昭）、第2章、高校教育改革の動きをどうみるか、第1節 文部省の高校改革政策（広瀬隆雄）、第2節 入試「改善の全国状況と神奈川（本間正吾）、第3章、格差の是正と選択の自由をめぐる、第1節 格差の実態と問題点（中野和巳）、第2節 選択の自由は、1.学校選択の自由（赤尾勝巳）、2.神奈川の場合（浅井良雄）、第4章、高校教育改革の方向と課題、第1節 改革のための具体的プラン（永田裕之）、第2節 残された課題（山岸隆夫）。

11月には、地域教育会議について川崎の内田委員長から報告をして頂いた。川崎教育文化研究所は、1994年7月に『地域教育会議—いま、新たに提言する—』という地域教育会議についての最終報告をまとめた。川崎では、1987年に「地域に根ざした教育を探る専門委員会」が「校区教育協議会」の構想を打ち出しているが、それを受けて1992年から発足した「地域教育会議専門委員会」が、2年間にわたって検討した結果をまとめたのである。内田さんの報告は、川崎市が進めている「川崎新時代2010プラン」や「川崎市生涯学習推進基本計画」に盛り込まれている地域教育会議構想との関連等にもふれ、現在の様々な教育環境の変化の中での報告書の問題意識を関連の資料も紹介されながら行われた。

12月は、学校5日制についての日教組の提案について、執筆者の一人である赤尾さんに報告をしていただいた（日教組「子どもにゆとりと真の学力を」）。赤尾さんは、「月2回の学校5日制にどう対処するか」と題して、緊急提言を踏まえて、次のような報告をされた。

1 5日制における学校のあり方、2 教育課程編成のあり方、3 学校行事・部活動等のあり方、4 5日制に関する動向・課題。

1では、学校5日制を支える教育的基礎として①新学力観・生涯学習論との関連、②家庭・学校・地域の連携の構築、について述べ、2では、1つの進路（ゆとり・精選）・4つの弾力化として、①授業時数の弾力化、②1単位時間の弾力化、③授業内容の弾力化、④教育課程届け出の弾力化、を挙げ、また休日とならない土曜日のあり方についても一定の方向を示された。3では、精選の順序に触れた後で、①学校行事の精選・縮小・削減、②学校行事と教科の連携・合科、③各教科の内容の重点化と精選、④教科間の連携および合科、のそれぞれについて検討された。また、部活動のあり方についても言及された。4では、文部省の対応を紹介され、完全学校5日制へ向けた今後の課題として以下の4点を列挙された。①子どもの学力に対する不安、②地域で子どもを受け入れる態勢への不安、③過密な学習内容に対する不安、④私立学校が学校5日制に消極的。

3月には、広瀬さんから『「子どもの権利条約」をどう受けとめるか』と題する報告をしていただいた。広瀬さんの報告は、1「子どもの権利条約」をめぐる動き、2「子どもの権利条約」の特徴、3「子どもの権利条約」をどう受けとめるか、の3つの部分からなるものであった。1では、権利条約の批准と文部省の対応について、2では、条約の4つの特徴について、3では、権利条約と子どもの人権、権利条約と新しい教育問題、権利条約の実効性について論じている。詳細は、『教文研だより』（95年3月）に掲載されている。

（関東学院大学教授）

事業部会

研究評議員 金 原 左 門

1991年（平成3）春に、県教文研の組織機構と活動を見直し、研究部、教育相談部とともに事業部を設置し、まるまる3年間が経過した。この間、県教文研は、県内各地区の教文研等の協力と助言を受け「県民合意の教育改革」運動、長洲前県知事提唱の「ふれあい教育」運動の前進を目指して活動を進め、それなりの要請に応えてきた。

この間の事業部が取り組んできた仕事の内容については、各年度の『所報』をみていただくとして、そのうちの二つの主要な事業、すなわち、「教育シンポジウム」と、在日外国人の児童・生徒の教育状況にかんする「実態調査」は今年度で区切りをつけることができた。「教育シンポ」は、周知のように「不登校」問題と「高校入試・高校改革」の二つの柱を掲げて3年にわたり県内各地で開催してきた。本年度は、94年10月29日に「高校改革」をめぐる藤沢市で、そして、95年2月25日に「不登校」について小田原市でおこない、これで7回におよぶシンポを終了することができた。この二つのシンポの内容については、いずれ、これまでのシンポと同様にブックレットにまとめるので、その内容については省略するが、この二つのシンポも湘南、西湘両地区の地区教文研、教組の協力のもとで、いずれも大きな成果をあげることができた。

3年余にわたるシンポは、わたしたち事業部の当初の予想をはるかに越えてすべて大成功であった。というのは、「不登校」の問題は、教育現場の緊急課題であり、「高校入試・高校改革」は、県での神奈川方式の見直し作業の時期にからんで、「ポスト神奈川方式」をめぐる課題にも論点が波及していたからである。なお、わたしたちは、教育県民運動、県民の教育文化の向上に資するために、このシンポの経験を今後、どう生かしていくか、目下検討中である。

また「実態調査」の委員会活動も、この3月で3か年計画の調査を終わることができた。今年度の調査の経過とか実情については、宮島氏の別稿にゆずるとして、『教文研だより』（第70号）の中間報告でもあきらかなように、他に類をみないほどのできばえである。それも、関係市町の教育委員会、学校、指導者、担任、協力指導員、地区教文研等の支えがあったからである。いま、本報告をまとめる準備にとりかかっている。

事業部としては、このほか恒常的な業務として『教文研だより』の発行、研究の計画性、組織強化の方策等をめぐって討議を重ねてきた。しかし、3年周期というわけではないが県教文研として事業部が中心になり、設立当初からの11年間にわたる研究所の基礎固めを前提に、この3年間での活動成果を採り入れて、新しい脱皮をはかろうと検討中である。もちろん、そこでも、研究部、事業部、教育相談部の三部制を基本に、研究の計画性・教育現場との関わり強化、即応性を重視し、時代の要請に積極的に応えていく組織形態と活動内容が議論の的になっている。いずれ決定をみてから報告したい。（中央大学教授）

調 査 委 員 会

研究評議員 宮 島 香

1993年度に実施した「外国人児童・生徒の指導に携わっている方々へのアンケート」の集計、分析の結果をまとめ、『教文研だより』70号（94年10月）に「外国人の子どもたちとともに」と題して報告することができた。とりあえず一つの課題を果たすことができて、ホッとしている。

この報告では、全体で440名の回答者の声をもとにして、教材不足の実態、学校と保護者のコミュニケーションの難しさ、非教諭の協力者たちの果している役割の大きさなどを指摘することができた。また、外国人の子どもの悩みとして「学習についていけない」「進学が不安」「校則になじめない」「友達ができない」などが大きいこと、子どもたちへのいじめやかからかもあること、カリキュラムや入試方法への見直しの必要が指導者の側で認識されていること、なども報告することができた。おそらく全国でも初の調査として、これから県内はじめ各界で色々と参考にされていくものと自負している。

最終年度である本年度には、9月にインドシナ三国の子どもたちと保護者の学校体験を聞く座談会（相模原市）、11月に南米出身の日系人の子どもたちと保護者を招いての同様の座談会（平塚市）、さらに本年2月には指導者たちの体験や出会っている問題を聞く座談会（横浜市）をそれぞれ開催した。いずれ劣らず興味ふかい内容で、生の声を通して外国人の子どもたちの教育の現在を知ることができたのは、まことに貴重な機会であった。これに今一つ企画中の外国人生徒座談会「進学について語る」を5月中には実施し、全体のしめくくりとしたいと考えている。

プロジェクト発足から三年、この間に状況もかなり変わり、子どもたちの様子にも変化がうかがえる。日常の日本語会話にはほとんど不自由しない子どもが増えたのもその一つである。それでいて、教科の学力でまだまだ課題をかかえている子が少なくない。反面、母語であるベトナム語、ポルトガル語、スペイン語などの保持がむずかしくなってしまったケースも増えている。また、かれらの高校進学がいつそう身近で差し迫った問題となってきたのもここ1、2年のことである。課題の質は変わりながら、しかし外国人の子どもたちをどう指導すべきかという課題は依然重要で、むしろ多岐にわたるようになっている。

本年は、これまでの調査や聞き取りの総決算として、報告書をまとめなければならない。そこには、豊富なデータとともに、委員たちの掘り下げた考察と教育界への具体的な諸提言を是非とも盛りこみたいと思っている。秋には完成の予定である。どうか期待していたきたい。

（立教大学教授）

教育相談部

研究評議員 菅 龍 一

1 教育相談の状況とその傾向

1994年度(1994年4月5日～1995年3月24日)の相談件数は手紙3件、電話519件、面談50件、合計572件であった。別表で明らかなように、相談内容として多いのは不登校と性格・生活である。この傾向はここ何年か変わっていない。そのつぎに多いのが学校・教師問題と進路・進学であるが、これもここ数年来の傾向である。以下、月例の相談委員会で論議されたものの中から、印象に残った事例について簡単に述べておきたい。

2 相談内容とその特徴

a) 3組の母娘の間のトラブル

4月は顔合わせで、今後の方針について話し合い、とくに相談委員会で取り上げたケースはなかった。

5月の相談委員会での手紙相談は、小学校3年生の娘を持つ母親からのものだが、いまの若い母親の心情があらわれているものだった。

舞台は神奈川県南部の新興住宅地。相談者の家はまずこの地に建てられた。そこへ同学年の娘の家族が家を建てる。2人は仲良く学校へ通った。そこへもう一軒、同学年の娘を持つ家が建った。女子3人のあつれきが始まる。2人が1人を仲間外れにするのである。組合わせが変動したあと、最終的には相談者の娘が仲間外れになる。相談者としてはやり切れない思いである。他の2組の母娘にどんな対応をしたらよいかという相談であった。

プライバシーの問題があるので、相談者の手紙の引用はできないが、私が書いた返事を読んでいただいて、内容を想像していただきたい。

お便り拝見いたしました。御長女Aさんのことを心配なさるお母さんの気持ちは良く判りました。母親としてはいたたまれないお気持ちでしょうが、このていどのことは、子どもの成長期に一度や二度は訪れる、つぎのステップのための試練だと思います。

私なども小学校の高学年までは気の弱い泣き虫のいじめられっ子でしたが、中学、高校、大学へと進むにつれて、学校が楽しくなっていました。Aさんも、きっとそのように成長していかれると思います。

今すぐBさんCさん、およびそのお母さんたちに何か働きかければ、状況が良くなるとは思えません。まして、彼女たちのことを批判しても、状況は変わらないと思います。場合によっては、もっと悪くなるかも知れません。

一般に人間というものは批判や非難によっては変えられないものです。私の長い教師生活の中で生徒たちや、自分の子どもと接していて、そのことを痛感しています。他人を変えることができるとすれば、共感をベースにしたとき、はじめて可能です。Bさん、Cさん、そのお母さんたちとさりげない会話を交わす中で、いままで自分の子どもに敵

対していたと思った彼女たちの中にも、こんな悩みや人間的な暖かさがあったのかと感
じることがあれば、そのとき心が交い合い、相手も変わると思います。

お嬢さんが、外で友だちのことで困っているということは、家庭の中で親と子が心を
通わせるための、絶好のチャンスであるとも言えます。まして新しいクラスが前年より
楽しいと言っているのですから、そのクラスの中の出来事を話題にすればいいのではな
いでしょうか。また、下の子どもさんの面倒を見てもらったり、家事の手伝いなどもし
てもらって、うんとほめてあげれば、家の中に楽しい居場所が作れます。子どもはいつ
も外で遊ぶとは限りません。家の中で役割を果したり、本を読んだりすることも、成長
のためにプラスになることです。

同封のコピー（拙著「子どもの愛し方」の一章）は、私の下の娘が、精神的に不安を
抱いていたとき、ちょっとした私の計らいで元気をとり戻し、わが家のマネージャー的
存在になっていったエピソードを書いたものです。災い転じて福となす。そんな発想も
親にとっては大切なことです。

Bさん、Cさんとの関係だけに悩まないで、もっとAさん自身の興味や喜びを見つけ
てあげてください。

また、なにかありましたら、遠りよなさらず相談して下さい。

〇〇様

菅 龍一

b) LD（学習障害）児の相談

6月はLD児の相談が2件議論された。そのうちの1件をとり上げてみたい。

今年の2月、4年生（男子）のときからの継続相談のケースで、相談者は母親である。
まず小学校入学前から学習障害児と診断されてきた。その頃から「ことばの相談室」に
通い、大学病院の小児神経科にも通院してきた。だが「ことばの相談室」は10歳までと
言われ、児童相談所に切りかえたが、本人も母親もしっくりいかない。大学病院も担当
が変わってなじめなくなった。

学校へは毎日母親がつきそい、まず廊下にて、タイミングがよければ教室に入り、
授業が受けられることもある。しかし先生や友だちに声をかけられると、逃げ出すこと
もある。

このような相談を受け、相談委員林先生がかかわる白百合女子大、発達臨床センター
を紹介する。同センターでの検査の結果、IQは100、つまり普通であることが判った。
ただし精神年齢は6歳ぐらい（実際は11歳）だった。

5年生になったいま、新しい担任になり、家庭訪問をしてチェスをしてくれたり、な
じんでいるのだが、学校に連れていっても下級生にからかわれて逃げて帰ったりする。
いま不登校状態が続いている。

電話相談を受けた担当者は、学校、担任もよくやってくれているので、連絡をとりな
がら、具体的なプログラムを組んで体験を重ねるしかないだろう。今後も継続して相談
して欲しいと言う。

相談委員会での議論では、IQ100ということもありLD児ではないのではないかと。む
しろ自閉症傾向ではないかとの専門的指摘があった。また、不登校が続くようなら、普
通学級にこだわらず、人数も少なく目がとどく特殊、養護などを考えてもいいのではな

いかという現場サイドからの意見も出された。

c) 子どもの遊びの世界への共感

7月の相談委員会では、教師からの相談が3件あったこと、また珍しく県外からの相談も3件あったことが報告された。さらに、継続した相談が半数を占め、性格・生活がトップだったことも報告された。性格・生活についての相談の例として、手紙による小学校1年生の女子の相談をとり上げたい。相談者は母親である。

家族構成は両親と夫の父母、そして夫の妹、その中での1人娘である。母親の訴えによると自己中心的で、友だちとの関係がうまくいかないとのことである。これもプライバシーがあるので、手紙そのものの引用はできない。私が書いた以下の返事から、母と娘の状況を想像していただきたい。

拝復 お嬢さんの相談の件、拝見いたしました。心配しておられる気持ちはよく判ります。しかし、結論としては、担任の先生の「友だち同志のわがままは、小学校では通用しない。自然にもまれ、鍛えられていくから心配はない」という言葉に私も同感です。

一人っ子というのは、大人たちの中で甘やかされ、自己中心的になるものです。かといって、それが悪いということではありません。私も長男で、弟が6歳下でしたから、お嬢さんとそっくりの性格がしばらく続いていました。母にそのことを指摘され、叱られたこともあります。

しかし子どもというのは、成長とともに、まわりにもまれ、鍛えられて、性格も行動も変わるものです。心配することはありません。むしろ、お母さんが取り越し苦労をして不安になると、その気持ちがお嬢さんに反映して、お嬢さんの方もイライラしたり反抗的になるものです。子どもの成長段階での特徴をそのまま受け容れて、それがわが子の個性なのだと思う方が、親も子も精神的に安定すると思います。お嬢さんが幼児のころ、母親にベッタリであったのが、友だちを連れてきて遊ぶようになったのですから、それ自体が立派な成長だと思います。

友だちに乱暴な口をきいているとき、その友だちの前で叱ると、子どもにもメンツがあって反抗します。友だちが帰ったあと、やんわりと「そんなにいばっていると、そのうち嫌われるかも知れないよ」とアドバイスするくらいが良いでしょう。

その上で、お嬢さんの遊びの世界に共感し、できたら一度か二度、その輪の中に入ってみられると、親としても楽しくなります。同封のコピー（前掲書「子どもの愛し方」の他の一章）は、私の子どもがお嬢さんと同じ年令のころ、私と子どものごっこ遊びの世界を書いたものです。参考にしてみてください。

△△様

菅 龍一

d) 面談の増加

ここ1、2年、面談のケースがふえている。8月の相談委員会では2件の面談が報告されたので、それを書いておきたい。

まず小学3年生男子の暴力行為について、担任の先生からの相談がきっかけになったケースである。教室でA君がB君のテストの成績を「45点」と言ったのが原因でケンカ

になる。A君がB君を殴ったようであるが、大したケガではないと思っていたのに、数日後骨折していたことが判る。A君の両親がB君のところに謝りに行ったが、言葉の行き違いでB君の両親が立腹、「これは、いじめによる傷害事件だ。このようになったのはあなたたちの対応が悪いからだ。ちゃんとカウンセリングを受けて子育てをして欲しい」と言われた。A君の両親から相談を受けた担任が、当相談室に電話をしてきた。

永田先生がA君親子と面談し、その結果A君は子どもらしい子どもで問題はないことを担任に報告。担任からは礼状がきた。それによると、B君の両親も納得したとのことだった。

つぎに小学校6年生の女子の母親からの相談である。まず電話があり、父親が蒸発して不在であること。娘は5年のとき一時不登校になったこと。見えすいたウソをついたり、友だちとトラブルを起こすこと。精神科でカウンセリングを受けた方がよいだろうか。どこか紹介してくれないか。そんな相談であった。

面談の希望があったので、内山先生が会った。だが、精神科に行かせるほどの状況ではないと判断。担任とよく話すように説得した。母親も担任には信頼感を持っている様子だったとのことである。

e) 高校生の不登校

9月は、その前の1ヶ月が夏休みであるため、相談委員会は開かれなかった。

10月は高校生の不登校が3件報告され、議論された。そのうちの1つについて述べておきたい。これは県外（埼玉）からの電話による継続相談である。東京シューレ奥地圭子さんの本の、相談機関のリストを調べて、この相談室を探し当てた由。

最初の電話では高校1年生の男子が中学時代から不登校。高校には合格したがやめる。再受験して入学したが、また休みはじめた。この子の姉も不登校だったが大検を受けて合格。現在、短大福祉科1年生である。担当者は家庭の中で本人を受容すること。姉と同じように大検という道もあるのではないかと答えた。

だが2度、3度と電話が重なるにつれて夫婦の問題が浮び上がってきた。この夫は姉をうとんじているが、弟は溺愛。日常のすべて（フトンを敷くことまで）をしてやっている。姉の不登校の原因も父が作ったようだ。相談者である母は離婚を考えており、子どもたちの前でも、それを口にして夫婦ゲンカが続いている。

さらに相談が続く中で、弟は自殺を口にする。また姉も休学したいと言い出した。直接的理由としては、試験が受けられず、レポートが書けないとのことだが、間接的理由は、短大で5年ぶりに友人ができた喜んでいたので、友人の家庭と自分の家が余りに違いすぎるのでショックを受けたことだった。両親の不和、弟の不登校や家庭内暴力に自分は苦しんでいるのに、友人にはそれが全くなく、話をあわせることができないというのだ。

担当者は姉については学生相談室のカウンセリングを受けるようにとアドバイスした。また、遠方ではあるが、一度来所して面談をした方がいいのではないかとすすめている。

f) 教師による体罰

このところ、体罰についての訴えが毎年1件ぐらい続いている。11月の相談委員会でも、この件が話し合われたので、それについて触れておきたい。

小学校6年生の男子の母からの相談である。担任の40歳代の男性教師から毎日のように体罰を受けているとのこと。体罰の内容としては身体に傷はついていない。洋服を強く引っぱったり、言葉でののしったりするとのこと。

もっとも子どもの方にも問題があることを母親も認めている。授業のノートを取らない。ノートにはテレビゲームの絵を書いている。忘れ物が多いなどである。しかし母親の教師への不信感は強い。テストをしない。時間割り通りに授業をしない。出張が多いなどである。

母親はこれまでに校長に2度電話をし、教育委員会へも電話をしている。さらに担任とも面談したが、子どもの訴えと担任の認識が違うので困っているとのことである。

恐らく担任と母親の相互が不信感をつのらせているのであろう。こうしたケースは最近とみに多くなってきた。子どもそのものが不在のまま、互いに憎悪しているのである。このような場合、管理職や学年主任が間をとりもって、子どものために良い解決法を見出して欲しいものである。

g) 中学生女子の男女問題

12月には中学3年生の女子の、男との関係が2件報告され、論議された。その1つについて記しておきたい。

これも県外からの相談であり、しかも遠路両親が面談に訪れたというケースである。両親は共に公務員だった。

高校を中退し、コンビニエンスストアでアルバイトをしている男子が好きになり、その家に入りびたりになった。両親が強く叱ったところ、手首を切るなど3回自殺未遂をする。相手の男は兄と一緒にマンションに住んでおり、ここへ出かけていたようだ。だが、その兄にも叱られ、また手の甲をナイフで切った。救急車で病院へ運ばれ、5針ぬう傷であった。

その病院の担当医が、この教育相談室を紹介したという。父母によれば、父は姉を、母は弟をかわいがり、中学3年生の女子は愛に飢えていたようだ。その後、両親と担任の3者面談をし、担任にあまり叱るのはよくないと言われる。幸いこの担任は良い人で、家に電話をしてくれ、娘さんもそれを喜んでいる。男友達とのつき合いも、少し遠の退いたようだ。

事態が好転してきてからの相談なのだが、恐らく自分たちの考えや娘への対応を再確認するために来所したのではなかろうか。

h) 中学生女子の不登校

1月とはくに深刻なケースはなかった。

2月には学校・教師問題（中学3年男子が教師に、あらぬ疑いをかけられ、父母が学校を批判）と、中学生女子の不登校が議論された。後者について述べておきたい。

不登校になる原因には、子どもの転居・転校、父親の単身赴任などによる不在などがある。このケースは、その典型である。

中学2年生の女子であるが、四国から転居。1ヶ月ぐらいして不登校となる。父親は九州へ単身赴任中である。母親が悩み、あれこれ考えるのだが、少々の外れなところが

ある。

母親がまず考えたのは、この中学2年生の姉を、祖母と叔母がいる四国へ戻すことだった。だが、それを実行してみると、四国でも不登校となる。これ以来、電話が4回、面談2回、ついには中川先生のカウンセリングも受ける。

父は九州、母と妹は神奈川、姉は四国という一家の離散状態が、そもそも不自然である。しかし父は「娘を甘やかすな」というばかりで協力が得られず、母は夫や娘たちを説得できず、頭痛、肩こり、不眠などで悩んでいる。単身赴任という企業の論理が、家庭を崩壊に追い込んでいるとも言えよう。父親と面談し、仕事よりも家族を大切にしよう説得し、父親の考えが変わらなければ解決できないのではなかろうか。

i) いじめが解決できない教師

3月には小学校3年男子のいじめが母親から相談された。クラスの大柄な子どもが、毎日ぶったり、暴言を吐いたりする。そのため子どもが泣いて帰ってくる。

担任は50代の女性であるが、相談したところ、いじめっ子を「そんなに悪いことをする子ではない」と弁護した。父も怒っているが、担任と話し合うと、興奮して何をするか判らない人なので、担任に合わせたくないという。

また、この子の姉は服飾系の短大1年生だが、履修届を出してなくて、単位がとれず、近く退学予定だと言う。

相談委員としては、担任と相手の親と三者で話し合うよう。また、姉もすぐ退学するのではなく、通信課程に転籍の相談をしてはどうかとすすめるのが精一杯であった。学校、教師、父、母、姉と、いづれも頼りなく、現代の縮図ではないかとの相談委員の発言があった。

3. 相談室の今後の課題

とり上げたケースを見ても継続相談、そして面談が多くなってきた。その主な理由の一つは、問題の原因が家族、とりわけ両親の夫婦問題にあるからだ。とくに父親が問題である。相談委員の中には、どのタイミングで父親を引き出し、面談するかが解決への決め手であると発言した人もいた。以前から出されていることだが、ぜひ面談室が欲しいものである。教育会館の中でなくてもよい。ぜひ確保して欲しいものである。

もう一つの問題は、体罰、いじめ、事実と反する疑いなどをめぐって、父母と教師が対立するケースが増えたことである。教職員組合とかかわる機関でもあるから、組合のルートを通しての解決も必要ではなかろうか。すでに行なわれた例も過去にあったのだが。

学校・教師問題の解決には、教師のレベルアップのための研修も必要である。昨年に引き続き、相談委員が講師になって「教育相談セミナー」が開かれ、私もその一回を担当した。だが集る人数が余りにも少ない。組合がもっとサポートして、参加者が多くなるよう計画を練り直す必要があるのではなかろうか。

また、相模原に始まり、平塚、川崎と続いたシンポジウム「不登校について」のpart 4が小田原で開かれた。4回のシンポジウムで、不登校については、ほぼ議論が尽くされたと言っていいだろう。新たなテーマを決めて、取り組むべき節目にきていると思う。

(児童文学作家)

教育相談状況 対象別・相談者別集計

神奈川県教育文化研究所教育相談室

1994年度 1年分
(4月5日～3月25日)

電話対応

519ケース

面談対応

50ケース

手紙対応

3ケース

総対応数

572ケース

対象		相 談 対 象 者														相 談 者																
		○数字は手紙														○数字は手紙(1回に複数の相談者の場合があるので相談数と異なる)																
		小 学 生			中 学 生			高 校 生			そ の 他			総 合 計				母親		父親		祖父母		本人		教師		その他		合計		
相談種別		面談	電話	合計	面談	電話	合計	面談	電話	合計	面談	電話	合計	手紙	面談	電話	総計	%	面談	電話	面談	電話	面談	電話	面談	電話	面談	電話	面談	電話		
① 性格・生活		② 2	64	68	3	34	37	3	29	32		10	10	2	8	137	147	25.7%	② 4	131	1			3	5	1	1		1	② 9	137	
② 不 登 校		① 1	38	40	18	107	125	13	41	54		1	1	1	32	187	220	38.5%	① 19	171	4	6		1	11	4	1	5		① 35	187	
③ 非 行					2	12	14		1	1					2	13	15	2.6%	1	10	1	1				2			2	13		
④ 学業・成績			3	3		4	4		1	1		2	2			10	10	1.7%		10										10		
⑤ 健康・発達			4	4								1	1			5	5	0.9%		2				1		2				5		
⑥ 障 害	精神的					1	1		1	1		12	12			14	14	2.4%		1					10		3			14		
	身体的		1	1					1	1						2	2	0.3%		2										2		
	その他		2	2								2	2			4	4	0.7%		4										4		
⑦ 進路・進学			6	6		26	26		7	7	1	13	14		1	52	53	9.3%		46				1	4			2	1	52		
⑧ 学校・教師問題			20	20	1	38	39		9	9					1	67	68	11.9%	1	66					1				1	68		
⑨ 家庭内問題			1	1		2	2									3	3	0.5%		3										3		
⑩ 生活・生徒指導		1	1	2		1	1								1	2	3	0.5%								1	2		1	2		
⑪ そ の 他		4	4	8	1	4	5		2	2		13	13		5	23	28	4.9%	3	11	1				3	8	1	4		8	23	
総 計		③ 8	144	155	25	229	254	16	92	108	1	54	55	3	50	519	572	100.0%	③ 28	457	7	7		1	18	33	4	19		3	③ 57	520
%				27.1			44.4			18.9			9.6				100%		84.1%	2.4%		0.2%		8.8%	4.0%		0.5%			100%		

II

地区教育文化研究所活動報告

横浜市教育文化研究所のとりくみ

1. 活動の基本方針

はじめに

横浜教文研は1992年9月1日発足以来、つねに“子どもたちひとりひとりを大切にした教育環境をつくる”よう努力してきました。

それには“市民とともに歩む”ことを基本方針として現在に至っています。

更に我々は、地域に開かれた広い視野の中で市民の教育文化の向上に寄与することに心がけてきました。

1994年5月18日をもって設立以来短期間ではあるが質の高い諸活動が高く評価され、神奈川県教育委員会より「財団法人 横浜市教育文化研究所」として認可され、新たな出発をすることになりました。

2. 事業の概要（1994年度）

＝具体的活動内容＝

(1) 教育文化に関する調査研究

ア 環境教育に関わる研究

(ア) 自然環境に関する研究

(イ) 社会環境に関する研究

イ 研究成果の提供

ウ 教育調査

エ 資料の収集と活用

(2) 教育相談並びに教育相談に関する事業

ア 教育相談

内容・不登校等学校不適応児童・生徒

・学習上の問題等

対象・子ども、保護者、教職員、市民他

方法・面談、面接、電話、手紙等

イ 教育相談委員会

目的・教育相談に関する事業

内容・事例研究、情宣に関すること

構成・教職員、学識経験者、教育相談員

(3) 講演会・音楽会等教育文化の向上に関すること

ア・内容 教育文化に関すること

- ・会場 横浜市教育会館
- ・講師 永 六輔氏 吉川美代子氏とのトークショー
- ・対象 教職員、保護者、市民

イ 親子映画会

- ・内容 親子共に観賞できる映画
- ・会場 16地区で上映、会場は各地区で
- ・対象 保護者、子ども、教職員

ウ 研修会、講習会等の開催

- ・学級づくりを考える研修会
- ・不登校を考える研修会
- ・親子関係を考える研修会
- ・教育を考える研究会

エ 講師派遣、紹介事業

- ・学校、PTA等諸団体の要請に随時派遣

オ 後援事業

- ・横浜サケっ子の会主催「—やさしくサケの卵を育てよう—」
- ・横浜市教職員組合主催 市民と教職員のふれあいクリスマスフェスティバル

(4) 出版事業

ア 定期刊行物

(ア) 研究誌 JANの発行

内 容 教育課程に対しての提言
教育実践報告、随筆文芸等

編 集 現場の教師の協力を得て取材編集

発 行 VOL.6「学校はもっとスリムに」
VOL.7「横浜の教育」ゆめはま2010プランから
VOL.8「子どもの権利条約」

発行部数 各1,9000部

配 布 先 市内公立学校善教職員他、教育文化諸機関、PTA、市民他

(イ) 所報 VITAL.Eの発行

内 容 研究所の事業報告、研究論文 他

編 集 JANに同じ

発 行 VOL.6 VOL.7 VOL.8の発行

(ウ) 研究成果の出版

内 容・学校が楽しくない37%の中学生
・エイズの知識 確かですか

3. 今後に向けて

1994年5月18日、財団法人 横浜市教育文化研究所と認可されて以来、市民・保護者・教育関係等に多大な支援をいただき、今日に至っています。

そして、“市民とともに歩む”ことを基本理念をもとに更に発展すべき努力をしていきたいと思っています。

具体的には

(1) 教育文化に関する調査研究については環境教育を中心に更に昨年来からの研究を深めていきます。

○環境教育に関わる研究

(ア) 自然環境に関する研究

(イ) 社会環境に関する研究

その他、研究成果の提供等の事業

(2) 教育相談に関する事業については、

ア 教育相談を中心に、教育相談委員会を中心にイジメ等の研究を深めていきます。

(3) 講演会・音楽会等、教育文化向上に関する事業については、

(ア) 横浜市PTA連絡協議会、横浜市ボランティア協会等の協力にて多くの市民参加の事業に取り組んでいきます。

(イ) 親子映画会については10年来の実績の上に立って、更に市民参加の映画会を計画しています。

(ウ) 研修会、講習会は数多くの計画の中で“子どもにとって”を中心に進めていく計画でいます。

(4) 出版事業に関する事業については、

(ア) 定期刊行物

○研究誌 JANの発行

VOL.9、VOL.10、VOL.11の年3回の発行を予定しています。

(イ) 所報 VITAL.Eの発行

VOL.9、VOL.10、VOL.11の年3回の発行を予定し、更に学校教育のみならず他教育諸機関との連携を保ち、具体例等を中心に研究発表の役割を進めていきます。

(ウ) 研究成果の出版についての事業について

当研究所内の他、学校現場の貴重な研究成果を積極的に発表支援をしていきます。

以上、1995年に向け研究所員一同がんばっていききたいと思います。

4. 1994年度教文研事業実施 資料からの紹介

1994年5月 財団法人として さらなる発展へ

子供たちひとりひとりを 大切にした教育環境をつくる



所長 小畑 義夫

私たちは、新しい時代を担う子どもたちの夢や願いを実現するために、また子どもたちが、人間らしく、心豊かに、生きがいのある人生を送るために広い視野に立って一層立ちたいと思います。



理事長 福寿 弘明

財団法人設立を機に、今問われている教育課題の解決に向けてさらに真摯に取り組めます。なぜなら我々大人は、すばらしい横浜の文化を子どもたちに残す責任があるからです。

「新しい教育を創る核」とは従来の縦型組織でなく、子どもや教職員、市民や民間団体、教育諸機関等のネットワーク組織のいわば有機的な核となることです。たとえば、教育相談を例にとれば、同じ悩みで苦しんでいる子ども同士の話し合いの場、を設けたり、登校拒否、不登校の子どもを抱える母親が、安心して話し合える、場を提供したりする「自らが学ぶ」教育環境の整備を目指し、教育の諸問題を解決するためのネットワーク型組織をつくることです。

設立以来、短期間ではあるが質の高い活動実績が高く評価され横浜市教育文化研究所（教文研）は五月十八日をもって、神奈川県教育委員会より「財団法人 横浜市教育文化研究所」に認可されました。ここに、新たな出発に際し、現在抱えている教育の諸問題への対応のみならず、これからの時代の堂々と対応している新しい形の活動体をめざして、設立の理念目的を見つめ直し、再スタートします。そのために、教文研は、「新しい教育を創る核」となるべき組織として、活動理念の再構築を図ります。賛助会員による運営等、組織の確立を含め、これからの発展に努めます。

教 文 研 小 史	
1992年	<p>9月 横浜市教育文化研究所 設立 石井民也委員長「子どもの心、子どもの心」発行</p> <p>10月 所報「VITAL-E」創刊</p> <p>12月 第1回教文研記念講演会（佐藤 隆）開催 教育相談部「ミニ講座」3回開催</p>
1993年	<p>1月 研究部「JAN」創刊：読書 環境教育</p> <p>2月 環境教育研究委員会・学校5日制検討委員会設置</p> <p>3月 「JAN」2号発行：読書 進路指導 「VITAL-E」2号発行</p> <p>4月 第1回教文研ファミリーコンサート（高岡良規）開催 ※1 レインボーランドによる読書研究予備調査開始</p> <p>5月 「VITAL-E」3号発行 事業部「今日の課題研究」調査開始</p> <p>7月 「JAN」3号発行：読書 国際理解教育 親子で平和を考える映画の会、16会場にて開催 「ネイチャーワールド」開催 講演：吉川英代子（TBS）※2 演劇：三沢まど（未来Club）※3 他</p> <p>8月 教育相談部 長野県にてワークショップ開催</p> <p>9月 第2回教文研記念講演会（山田 洋次）開催 ※4</p> <p>10月 研究部 学校づくり研修講座開催（月1回）</p> <p>11月 「VITAL-E」4号発行 「サケ人工受精会及び配付会」後援</p> <p>12月 事業部調査報告書「中学生に学校が楽しくないわけ」発行 教育相談部「ミニ講座」6回開催</p>
1994年	<p>1月 事業部調査（教師によるエイズの意識調査）実施 「JAN」4号発行：読書 福祉教育</p> <p>2月 「VITAL-E」5号発行 研究部 学校週5日制検討委員会報告書発行 「サケ放流会」後援</p> <p>3月 「JAN」5号発行：読書 性教育 研究部 環境教育「ECO-UP」 JAN 5号にて発表 研究部 学校づくり研修講座終了 教育相談部「ミニ講座」1回開催</p> <p>5月 横浜市教育文化研究所 財団法人認可 事業部調査報告書 「教師によるエイズ意識調査」発行</p>

設立から財団法人化まで
横浜市教育文化研究所は一九九二年九月、横浜市教職員組合（浜組）によって設立され、発足以来一年七月が経過しました。振り返れば、横浜における教育文化活動の今日までの発展は、浜組が推進してきた「市民とともに歩む教育文化活動」の成果や、役割が非常に大きいと思います。

教文研は、これらの運動の成果を背景に、さらに、発展を願い、「この横浜から新しい教育を」を合言葉に、自主・独立の機関として設立され、「子どもを大切に」する教育の推進をテーマに、教職員や保護者と手をたずさえ、市民と広く、深く連携し、教育課題の解決に向け、努力を続けてまいりました。

念願の財団法人化の叶った今、研究部、事業部、教育相談部の各部署、より一層の努力を決定しています。



平成6年5月18日 神奈川県教育委員会にて



研究部

「環境教育を考える」

「環境教育」を考える研究活動を、

二つの研究委員会ですすめています。

主として自然環境面から 研究を行う委員会

今年度のテーマは「環境を調べる調査活動」についての研究です。
子どもたちが、身近にある自然環境を手軽に調べられる具体的な方法を報告します。

次号あたりで中間報告を行う予定ですが、その一部を紹介しておきます。

内容例

一、水を調べる

(指標生物やバクテスタで)

二、透明度を調べる

三、学校のプールで調べる

(プールでシンコが採れる)

(水生昆虫やプランクトン調べなど)

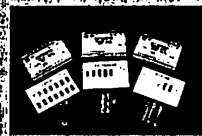
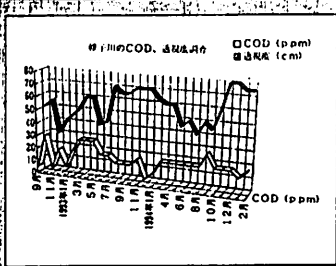
主として社会環境面から 研究を行う委員会

今年度猪足した委員会ですが、各学校

- 四、校庭の花壇などに来る昆虫調べ
- 五、校内の土壌動物調べ
- 六、空気を調べる
- 七、雨(酸性雨)を調べる

その他、昨年報告した「学校に自然を呼び戻そう」の追加分もあわせて報告を行います。

また、昨年提案した「プールのヤゴ救出作戦」に、小学校では一四六校の協力があつたことから、プールの水抜きが行われる時間に合わせて、リーフレットを作成して配付することも考えています。



帽子川の水をウォッチングクラブの子どもたちが、土曜日の朝に調べている。

透明度……目で見る水の汚れ方
白い器に澄いた十字線がどれくらい見えるまで見るかを調べる。数字 (cm) が大きいほど水が濁っていることになる。

COD……化学的に調べた水の汚れ方
バクテリウムを使用
CODは数字では、ほとんど臭いがないとされている。数字 (cm) が少ないほどきれい。

帽子川の月ごとの調査結果を見るとCODは、20ppmのことが多く、透明度は月によっての変化が大きい。参考としては、水がきれいということから。

資料提供

帽子小学校、5年、平本隆介、柏木孝介

調査例			
あなたの学校での環境問題や環境教育について、先生たちの関心度はどうですか。			
1. 多くの先生が関心をもっている	小学校41.2%	中学校	30.6%
2. 一部の先生が関心をもっている	52.9		59.2
3. 殆どの先生に関心がない	5.1		8.2
4. 無回答	0.8		2.0
※回収率 小学校70.2% 中学校67.6%			

先生たちの環境教育に 対する関心度は

昨年度の研究委員会が報告した「学校に自然を呼び戻そう」が、どの程度読んでもらえたかの調査とあわせて、先生たちの環境教育への関心度などを、全市の小・中学校を対象に、昨年九月中旬に調査してみました。

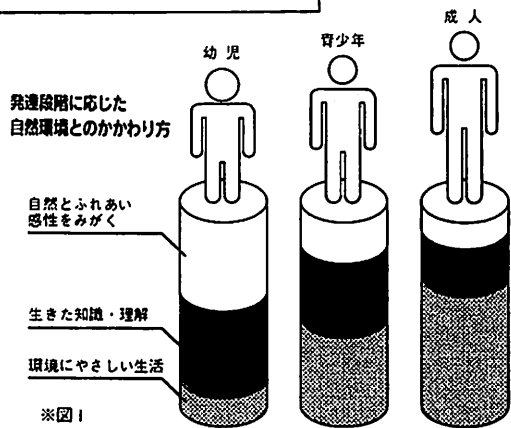
結果として、一部の先生が関心を持ってしていると答えた学校が、小・中学校共に半数を超えている実状がわかりました。

研修活動報告

昨年に引き続き開催した「学校づくり研修講座」ですが、今年度は「あす、すぐ役立つ教育相談の技術を身に付けてみませんか」をキャッチフレーズに、各小学校によりかけて開催しました。

当初予定した十六名の募集人員を上回る応募があり、計六回の日程を去る二月に終えることができました。

体験を交えた研修内容が好評のようでした。



※図1

横浜市 未来の教育を語る。

事業部

高秀 秀信
Takahide Hidenobu

「問題を描くばかりでなく、もう少し彼等を積極的に認知してほしい」
「学校難いの中学生を生み出したのは、大人でもあるし、学校という社会でもあるから」
「学校が楽しくない、中学生70%の本音から」
市立瀬谷中学校 関根一夫教諭

一九九三年より事業部では、二つの調査を実施。本年五月に以下のような研究報告書を発表しました。報告書は、研究誌「J・A・N」編集部に取材の中で収集した資料をもとにまとめ、市立小・中学校、養護学校、教育諸機関に配付させていただきました。なお、各学校で活用していただくために多少の余部を残しております。ご希望の方は事業部担当者までお申し出下さい。

また、今回の報告書作成にあたっては、市立大学の諸先生方、横浜市教育局、横浜市教職員組合等の多くの方々のご支援、ご協力を得たことを付記し、ここに感謝の意を表します。

あるからです」
「生徒と教師、生徒と保護者の考え方のギャップがとてつもない」
「学校が楽しくない、中学生70%の本音から」
横浜市立大学医学部付属病院 小児精神神経科部長 飯塚幸子氏

研究報告(二)
「エイズの知識 確かですか？」
横浜市立小・中学校、養護学校教員八〇〇人にききました!!
エイズに対する知識や校園の乏しい書に、はたしてエイズを語れるかと人は言。教師がエイズ教育を語るとき、身をもつてエイズを学ぶ姿勢を示すことができるのか? 「エイズの知識がどう?」
市立大学医学部付属病院 臨床検査部長 伊藤章氏



小関 彰



加藤 弘明



越前 邦雄



加藤 哲



飯島 毅彦

ヨコハマの教育を「ゆめはま2010プラン」に託す――

教育の代表5人が語る

第3回 教文研講演会 財団法人設立記念

永六輔 & 吉川美代子
トークショー

<10月17日2時~4時 教育会館ホール>

CHRISTMAS FESTIVAL
'94.12.23

コンサート報告

御出演並びに、多数の御来場、ありがとうございました。

市民と教職員のふれあい
クリスマスフェスティバル

ゲストバンドアフリカ音楽「ピタシカ」



■当日入場料を含め10万円を神奈川県新聞・厚生文化事業団へは寄附したため寄付いたしましたことを報告いたします。





教育相談部

活動状況の報告

1. 教育相談について

○相談件数

一九九四年度相談件数は、電話相談を含めて二七件でした。(五月まで)

○相談内容

「不登校」が最も多く、全体の五〇％近く。その他多かったのは、親子・兄弟・友人・教師との対人関係、万引・暴力問題等の順。

○相談者

中学生四〇％。次いで小学校低学年、同高学年、高校生、その他

2. 「子育て親の会」について

○四〇名の会員でスタート

「子育てを考え、その実践をめざす」ことをねらいとする会で、愛称は「げんきかい」。

○「不登校」をテーマにした本づくり
不登校の理解のために、「母親からみた二三の不思議」を川柳風に表し、それにコメントをつけてまとめようとするもの。

(例)二六「部屋に閉じこもる」に対して「春知らず 冬眠続ける 子供部屋」

○リース作りやはがき絵を描く集い
趣味や特技を生かし、親睦を深め合いました。

3. ミニ講座解説あれこれ

開所以来十二回目の講座が本年度の四月から開設されました。



いずれの講座も、回数として三回、四十名程度までを限度と考えてます。

●お申し込みはお早めに

電話〇四五(二五三) 四一四〇

相談部まで

教育相談部



「いじめを考える」

今、いじめの相談件数が増えています。友だち関係や学習の問題、進路の選択や親子のぎくしゃくした関係など子どもを取りまく環境は厳しい。そこで編集部では教育相談員・飯塚幸子氏の協力を得て、ご意見をいただきました。

(編集部)

子どもの言葉にじつと耳を傾け、

子どもが心を開くような大人でありたい。

三、ミニ講座について

○第十一回「母親のストレスの付き合い方」定員二〇名の所選にオーバー二十六名でスタートしました。このことは同時に子育ての在り方についての関心の高さを示すバロメーターでもあると受けとめ、開講しました。

○ストレスの因子と思われるものは色々だが「母親を取り巻く人間関係から起こるもの」が大部分であらうと捉え、課題に取り組みました。

○たった、三回六時間の講座でしたが、講座参加者が得たものは非常に大きな、前向きな姿勢やエネルギーだったと思われまます。

○参加者の感想文(一部)

- ・ストレスをバネに向上して行きたい。
- ・自分なりに解消の法則でリフレッシュする
- ・ストレスをプラス指向で考え付き合いたい
- ・ストレスを別な角度から注視したい。
- ・自分の思い込みで、子供にストレスを与えているのかと思うと反省の日々です。



親子で平和を考える映画の会

横浜市教育文化研究所 主催

とどけ

平和の願い

■保護者・市民のみなさまへ

今回の映画を主催する「横浜市教育文化研究所」は、この「親子で平和を考える映画の会」の他に、教育相談や保護者・市民の皆さんに対する教育講演会も行っており、みなさんとともに、民主教育と、よりよい文化を築くため日々努力をしております。

本研究所も設立され15年を経過しました。今回の映画も15年目を迎え、「ぞう列車がやってきた」を上映することになりました。戦後50年を目前にし、戦争体験の風化が目立つ今日、より多くの皆さんに鑑賞いただきたくご案内申し上げます。



「ぞう列車がやってきた」を見て

- ぼくたちも、ぞうやそのほかのどうぶつをまもってみたいです。(小3)
- きょう、ぞうれっしゃというかわいそうなえいがをみました。せんそうでおおくのひとやどう物がころされてかわいそうになってしまいました。わたしはなんでせんそうなんかするのかなあと思った。大人たちは、なにをやっているのかなあと思った。(小3 女子)
- わたしは、このえいがを見てせんそうはいやだなとおもいました。どうぶつたちのいのちをうばって、たべるものもなくなって、しんでしまった2頭のゾウがかわいそうでした。でも、のこった2頭のゾウをこどもたちがみることができてよかったです。あとともだちの男の子が、あしをなくしてまでゾウにあいにきてくれたのがよかったです。(小2 女子)
- 人間が無理やり連れてきた動物たちなのに今度は戦争をするのできけんだから殺すなんて人間はなんて自分勝手なんだろうと思いました。(小5 女子)
- どんなに頑張っても戦争になったらどうにもならないことがあると思います。今、日本には戦争がなくて私たちもぞうさんも幸せだと思いました。(小5 女子)
- 戦争中(有事の時)は、国や軍の命令一つで物ごとが決まってしまうので、とても怖いことだと思います。どんな時にも一般市民を中心になんでも意見や発言ができるようにして、それに対して聞く耳を国側が持つということをしないと、弱い者が必ず泣く結果になります。

しみじみと、今の平和を噛み締めています。人間は楽にしているときは、あまり物ごとを深く考えないので、この映画を見たことで、いろいろなことを考えられました。ありがとうございました。(保護者)

●戦争は平和なときに準備される。戦争について、または平和なときに平和について、子どもたちを交えて語り、考える機会のあったことに意味深いものがあると思います。

(保護者)

●子どもに「戦争って何？」と聞かれました。

私はまだ自分の親から聞いていましたが、自分が体験していないせいか自分の子どもに話したことがありませんでした。今日映画を通して平和の良さ、戦争のことなどいろいろと話していこうと思いました。(保護者)

●とても良い映画でした。人間だけでなく、動物たちまで犠牲になった戦争の恐ろしさを子どもも知ってくれたと思います。(保護者)

●日本では、平和教育が決して十分とは言えません。戦争が恐ろしいということを子ども達に伝えていくことは大人たちの責任だと思います。(保護者)

94年度「親子で平和を考える映画の会」実施状況

支 部	日 程	会 場	時 間	参加者数
鶴 見	5/21(土)	鶴見公会堂	14:00～	680
港 北	5/21(土)	港北公会堂	①13:30～ ②15:15～	760
青 葉 都 筑	5/22(日)	緑公会堂	①10:00～ ②13:00～ ③15:00～	920
西 中	5/28(土)	横浜市教育会館	14:30～	210
神 奈 川	5/28(土)	神奈川公会堂	13:30～	420
南	5/28(土)	南公会堂	①14:00～ ②15:30～	673
栄	5/28(土)	栄公会堂	14:00～	500
泉	5/28(土)	泉公会堂	①13:30～ ②15:00～	837
保土ヶ谷	6/ 4(土)	保土ヶ谷公会堂	①13:30～ ②15:00～	650
旭	6/ 4(土)	旭公会堂	①13:30～ ②15:00～	800
磯 子	6/ 4(土)	磯子公会堂	①13:30～ ②15:00～	760
金 沢	6/ 5(日)	金沢公会堂	①10:00～ ②11:45～ ③13:30～ ④15:15～	1,090
瀬 谷	6/18(土)	瀬谷公会堂	14:00～	400
港 南	6/18(土)	港南公会堂	14:00～	500
緑	6/18(土)	緑公会堂	①13:30～ ②15:00～	800
戸 塚	6/25(土)	戸塚公会堂	①13:30～ ②15:00～	750
				10,750

川崎教育文化研究所のとりくみ

県民・市民の立場に立って、教育とは何かを常に考え、そのためには何をなすべきかを模索しながら、川崎市民の教育・文化の向上・活動の充実・発展をめざし「川崎教育文化研究所」の活動を推進してきた。

以下、1994年度の事業について報告する。

1. 事業内容

(1) 出版事業（形成並びに双書）

① 教育総合誌「形成」の発行

第11号 7月1日発行

第12号 3月20日発行予定

② 教文研双書（単行本）の発行

No.31 手作り布の教材・教具 大河原春美

No.32 古墳時代の相模 遠藤秀樹著

No.33 国際理解のための教育

新しい時代の子どもを育てる

伊藤和彦著

No.34 生物教材の管理と活用 安藤秀俊著



(2) 夏休み親子映画会の開催

7月21日から8月2日までにわたり、市内8ヶ所で「お星さまのレール」を上映し、入場者総数8,729名。

(3) ふれあいサマーキャンプの後援

① 宮崎県日向市方面（日向市、門川街、東郷町、西郷町、南郷町、北郷町、諸塚村、椎葉村）

7月21日（木）～26日（火） 5泊6日 小学5・6年 中学1・2年

募集定員 100名 参加費 小学生28,000円、中学生35,000円

② 岩手県和賀郡東和町

7月28日（木）～31日（日） 3泊4日 小学校5・6年

募集定員 80名 参加費 小学生27,000円

③ 長野県富士見町

8月6日（土）～11日（木） 5泊6日 小学校5・6年 中学1・2年

募集定員 50名 参加費 小・中学生共に19,000円

④ 北海道中標津町

8月18日(木)～21日(日) 3泊4日 小学校5・6年 中学1・2年
募集定員 40名 参加費 小学生42,000円 中学生58,000円

①～④まで多数の応募者あり、抽選にて参加者を決定した。

(4) 少年の祭典「歌おう ボレロ」

12月18日(日) 午後4時開演 川崎教育文化会館
市制70周年記念特別企画 スラブ舞曲(ピアノ速弾)

1. モーツァルト アレルヤ (ソプラノ独唱)
2. ヴィヴァルディ 「四季」～冬“第2楽章”(弦楽合奏)
3. アレン 虹の彼方に(女声合唱)
4. 黒岩吉徳 大空讃歌 (全員合唱)
5. 橋本祥路 遠い日の歌 (全員合唱)
6. ラヴェル ハバネラ (ヴァイオリン独奏とスペイン舞踊)
7. ラヴェル ボレロ (1,000人による大合奏・大合唱)
8. ビショップ 埴生の宿 (全員合唱)

会場は、子ども・父母・市民2,000名余でうめつくし、1,000人の市民の大合奏・大合唱で盛会裡に終了した。

(5) 市民教育文化講演会の開催

本年度で5回目、会場・講師の都合で10月24日(月)より11月28日(月)市内7会場で講演会を開き、市民の教養・文化の向上に努めた。

(6) 教育文化事業

① 川崎子どもニュースの発行

小学校5・6年生、中学校1年生を対象とし、長期休暇に入る前に、市内の催物や文化について、子ども向けに紹介し、自主活動の促進をはかるため、全員(4万人)に配布した。6月 11号 7月 12号 12月 13号 3月 14号

② 「子どもの権利条約」子ども向け冊子の作成

上記条約の趣旨や内容について、子ども自身を知るための手がかりとなる冊子を作成し、市内の全児童・生徒に配布した。

小学校低学年用、小学校高学年用、中・高校生用、各4万部

③ 教育文化事業の補助

演劇や映画等の各種の公演に対し、入場割引券の発行、ならびに紹介活動を行う。

(7) 人材センター事業充実のための助成

現・退教職員を対象とした生涯学習の指導者ならびにボランティア人材情報の収

集と、その提供及び相談・指導・供給先の開拓に関する事業を行う。

2. 事業の概要について

(1) 出版事業のとりくみ

「研究や実践の交流を通じて、創造・実践・意欲の一層の向上、主体的な努力により確かな教育への貢献」をねらいとした教育総合雑誌「形成」700部の発行。

個人の研究や実践の記録等を教文研双書(単行本)は、毎年公募し、出版審査会(学識経験者10名で構成)の審査に合格したものに70万円を補助金として交付している。

本年度は4人で、2冊は印刷中、2冊は原稿整理中。

(2) 夏休み親子映画会について

戦争の悲惨さと平和の尊さを学ぶとともに、映画を通じて親子のふれあいを深め、豊かな子どもの成長をはぐくむ趣旨で開催。本年度は、小林千登勢さんの実体験を描いた「お星さまのレール」を上映、入場者は昨年度を上まわった。



教文研親子映画会入場者総数の変化1994年

会場名	年度	観覧券	当日券	招待券	総入場者	主催者会費
川崎教育文化会館 労働会館	91	1106	24	28	1158	
	92	948	56	25	1027	71,400
	93	817	80	44	941	102,900
	94	1239	38	70	1347	24,459
幸文化センター	91	1117	58	31	1265	
	92	1232	82	21	1314	25,430
	93	817	62	64	943	26,850
	94	1123	85	51	1259	26,150
エポック中原	91	1212	78	35	1325	
	92	1174	77	28	1279	27,600
	93	1076	100	42	1218	49,000
	94	1574	151	88	1813	32,800
葛津市民館	91	727	52	14	793	
	92	485	52	21	533	26,110
	93	625	95	37	757	26,390
	94	676	51	50	777	25,870
宮前文化センター	91	1492	87	36	1615	
	92	979	82	31	1092	25,910
	93	966	64	29	1059	25,670
	94	1010	201	56	1266	25,510
市民プラザ	91	684	126	20	830	
	92	579	91	18	689	40,900
	93	531	59	15	605	40,300
	94	768	117	14	899	33,600
多摩市民館(麻生) 21ビル	91	909	37	37	974	
	92	771	47	28	846	25,790
	93	583	70	47	700	28,310
	94	886	73	55	1014	37,700
麻生文化センター	91	1001	95	30	1126	
	92	889	182	55	1126	28,270
	93	592	160	58	810	28,350
	94	997	230	92	1319	28,310
合 計	91	8250	557	231	9038	
	92	7057	669	227	7953	274,110
	93	6007	690	336	7033	327,770
	94	8273	895	456	9624	208,889

映画を観賞後、熱心に感想文を書いている子どもたち



(3) 地域間交流ふれあいサマーキャンプの後援

都会では味わうことのできない体験をさせるために、青少年地域間交流事業として、豊かな自然や文化・産業にふれたり、農作業などを直接体験するとともに、地元の子
どもたちとの交流をとoshi、子どもたちの創造性や協調性、自主性を育む等、健全育
成及び都市と農村の交流ネットワークの促進をはかることを目的として実施、いずれ
の地域とも好評で、台風の影響で1日延びた九州を除き、好天に恵まれ成功裡に終了
した。

昨年度より、参加者全員が書いた体験記感想文を地域毎にまとめた報告書を作成し
た。

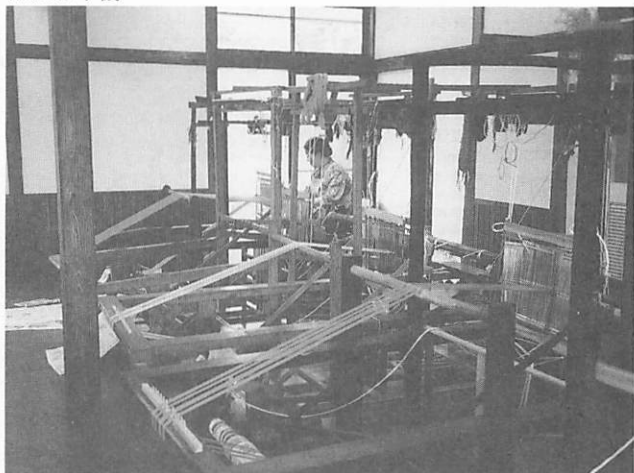
東
和
町



感想文集



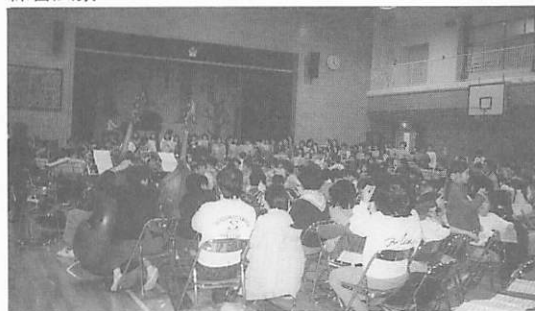
はたおり機



(4) 少年の祭典「歌おう ポレロ」の後援

本年は、市制70周年記念行事の一担を任うことになり、「芸術村あすなろ」を中心とし、夏休み前から練習場を確保したり、お互いに道具の運搬やら、協力し合いながら練習を重ね、12月18日(日)川崎教育文化会館で開催、あふれるばかりの人々で埋めつくし、好評裡に終了した。

練習風景



会場の様子



(5) 市民教育文化講演会の開催

みんなで学ぼう考えよう川崎の教育を

1994年度

市民教育文化講演会

主催/川崎教育文化研究所 ☎433-9101 後援/川崎地方自治研究センター

働いている方にも、参加しやすいよう、午後6時過ぎからの開催としました。
誘い合わせて、お聞き下さい。

①

10月24日(月) 午後6時
中小企業婦人会館 3階 ミーティングルーム
定員140名
「今を生きる子ども」
講師 東京大学助教授
沙見 稔 幸



②

10月25日(火) 午後6時
麻生市民館第1会議室 定員50名
「今スポーツに
求められていること」
講師
東洋大学 教授
川崎市スポ
ーツ振興審
議会委員
元マラソン
ランナー
宇佐美
彰 朗



③

10月26日(水) 午後6時15分
産業振興会館9階第3研修室定員99名
「空を飛ぶために！」
講師 東京大学教授
川崎市教育委員 東 昭



④~⑦、参加希望の方は、定員の都合上電話または、ハガキで下記
にご連絡下さい。当日直接会場にいられても結構です。

〒211 川崎市中原区下沼部1709-4 新教職員会館内 川崎教育文化研究所

④

10月27日(木) 午後6時
高津市民館 第1・第2会議室定員60名
「川崎の街道について」
講師 日本民衆国学会員
三 輪 修 三



⑤

11月2日(水) 午後6時
宮前市民館第4会議室 定員50名
「これからの夫婦は」
講師 元東京弁護士会副会長
テレビ東京・テレビ日本法律相
談担当
法制審議会
民法部委員
神 谷
威 吉 郎



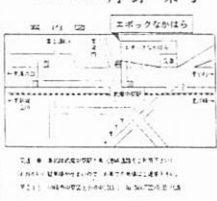
⑥

11月9日(水) 午後6時
多摩市民館第3会議室 定員45名
「子どもの心が見える」
講師 和光大学講師
神奈川県教育文化研究所研究
評議員・児童文学作家
菅 龍一



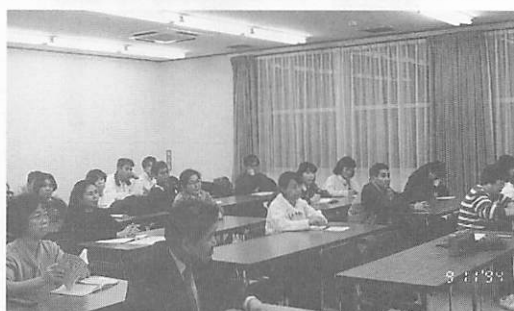
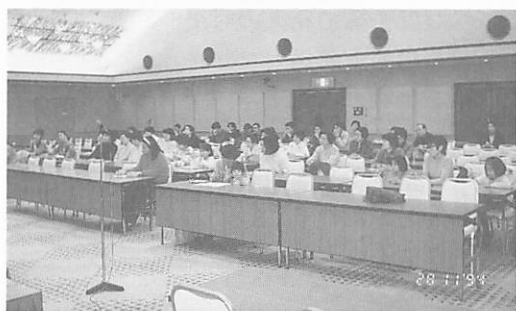
⑦

11月28日(月) 午後6時15分
エポック中野下町大会議室 定員50名
「魔女の住む世界」
講師 作家 角 野 栄 子



川崎市民の教養を深め、教育と文化の向上に寄与するため、90年度より7区で実施し、時々の教育問題、文化を取りまく問題や情勢を適格に把握し、選択する能力を身につけることを目的として開催している。

子どもを取りまく問題や倫理感の変化、生涯教育の中での課題の捉え方等、親や市民も子どもの成長に合わせて進歩していかなければならない問題等多くの講師から示唆を与えられ、参加した市民や教師たちに喜ばれている。



(6) 川崎こどもニュースの発行

学校が長期休業に入る前に、小学校5・6年、中学校1・2年（約4万部）を対象に、地域にある文化施設の案内や企画、地域で行われる各種の行事や催物、地域に伝わる話や文化等を紹介し、子どもが休業中に自分で計画を立てて参加したり、自分の研究テーマを作って取組むことが出来るよう配慮しながら取材・編集した、子ども向けの教育や文化に関するニュースである。

第11号 サマーキャンプ特集号

- 日向市 カブトムシがいた
- 東和町 リンゴ園に小鳥の巣
- 富士見町 おいしかった水
- 中標津町 牛の乳しぼり
- ログハウスの夜



第12号

- 二子橋で花火の対決
- 川崎市防災センター
- 動物の赤ちゃん続々誕生
- 市民のアイドルだった市電
- 全校で果樹栽培

第13号

- こども議会ひらく
- 川崎をつらぬく大トンネル
- むかし話が見える。民家園
- 世界一小さいエスカレーター
- ファンタジー かわさき
- 国際交流協会

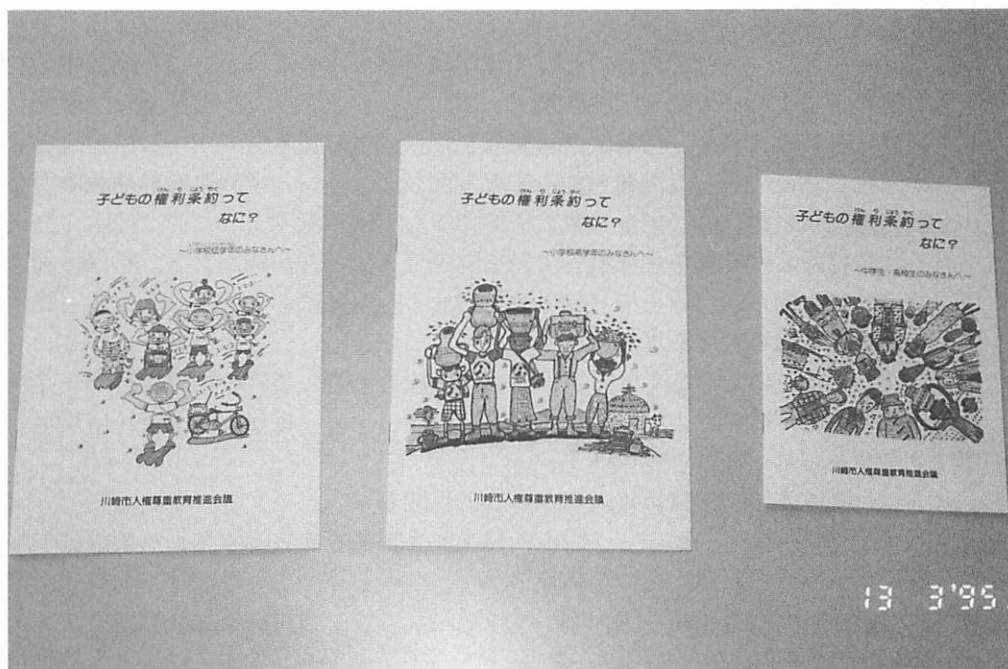


第14号

- 川崎大空襲から50年
- 阪神被災地での川崎の救援活動
- 枳形山と展望台
- 新川崎三井ビルディング
- 自然調査員の募集
- 川崎あっちこっち
- 浮島サッカー場 日吉小巣箱かけ

- ② 「子どもの権利条約」の趣旨や内容を知る手がかりとなる冊子を作成し、全児童生徒に配布した。

新聞でも採りあげられたためか、北海道から九州の地から、資料を送って欲しいとの要望がよせられた。子どもに、どう指導していったらよいか戸惑いを感じている親が多く、また関心の高さに驚いた。



(7) 人材センター事業補助

現・退教員の特技を生かし、地域の文化の向上に役立つ、ボランティア人材を発掘登録し、要請に応じて人材の派遣ができる組織の確立と供給先の開拓に関する事業を補助し、協力した。

3. 今後のとりくみ

各種事業は全市的に定着しつつあり、市民の理解・協力の環が着実に広がってきた。更に事業の充実と発展、提言を生かし、子どもや市民・教職員を励まし、元気づける文化の創造に努力していきたい。

資料 85年～94年度までの既刊「教文研双書」一覧

1. 新しい教育の創造にむけて 教育実践講座講演集
2. 川崎の地学的な自然を探索 科学部八ヶ年の歩み 宮崎中学校著
3. あかべこ 学級通信のあゆみ 松原 博著
4. あゆむ 川崎障害児教育部著
5. こんぺいとう脚本集 II 演劇教育ゼミナール編
6. 子どもが輝く 自己教育力を育てる体験学習を求めて 高津中学校著
7. 教室から生まれた川崎の学校劇集 小学校学校劇研究会著
8. 高校日本史教科書 検定教科書18冊を比較・検討する 中村 文雄著
9. 異文化を越えて 21世紀を創る子どもたち 海外教育経験教師の会著
10. 観音崎からの便り 先生と教え子で作った五編の童話 鈴木 桂子著
11. 英語教育における異文化理解へのアプローチ 子どもが翔んだ 新保 利幸著
12. 心にひびく歌声 輝く中学校生活を支える合唱活動 上田 真生編著
13. 自然を見る目を育てる理科指導
生活上にも対応できる観察能力の育成をめざして 川崎理科サークル著
14. うさぎの国ができたよ 富川智恵子著、宇田川弘子絵
15. ラクダからロールスロイスへ
日本人学校派遣教員のクウェート見聞録 福島宣充・澤本基治・横坂訓一 共著
16. 青いくるみ 毎週1回の学級通信から 北村 清著
17. しょうほう 教育相談 (1)、(2) 川崎市総合教育センター編
18. 「ん」は障害児的!! 坂本 隆夫著・笠見哲也絵
19. 湧水 白菊の会合同歌集
20. 知り合い認め合う教育 出口 雅一著
21. テイダ アパアパ
ジャカルタ日本人学校派遣教員とその家族の1095日 荒井 正勝著
22. アメリカ公教育の課題と展望 吉浜精一郎編著
23. 担任教師のひとりごと 5分間スピーチ集 岡村 修著
24. 高校生は今 yes, you, can 新保 利幸著
25. 学年通信「希望」 高田美智子著
26. 共に生きるために 環境教育への模索 川上 秀洋著
27. 生涯学習と地域教育会議 森山 定雄著
28. 南の島の日本人学校 ジャカルタの日本人学校の教育実践 三ッ橋敏幸著
29. 表現構想論で展開する道徳授業 田沼 茂紀著
30. 体験の翼 中学生生活と学年だよりと体験のちから 加藤 樹編
31. 手作り布の教材教具 大河原春美
32. 古墳時代の相模 遠藤 秀樹著
33. 国際理解のための教育 新しい時代の子どもを育てる 伊藤 和彦編
34. 生物教材の管理と活用 安藤 秀俊著
35. 学校だより ―愛― 迎 スミ子編

三浦半島地区教育文化研究所のとりくみ

—— 地域からの教育改革を ——

1994年度、三浦半島地区教文研事業計画は下記の通りでした。

(1) 基本方針

本研究所は、地域・保護者・教職員の要望する教育・文化の課題にとりくみ、その成果を地域の保護者や市民に還元します。

同時に主任制度反対の運動を、広く父母・保護者に訴えます。

(2) 事業内容

① 教育懇談会

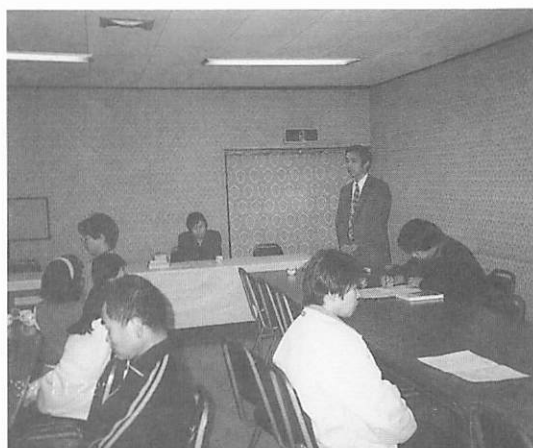
- イ 小学校区単位教育懇談会
(小学校区に在住する組合員と分会との共催による懇談会運動)

② 教育研究活動

- イ 教育相談
- ロ 所報「風知草」の発行
- ハ 年報の発行

③ 教育文化事業

- イ 平和と文化の発展を願い
一親と子のためのコンサート
- ロ 市民教養講座
- ハ 平和作品展



〈北下浦小学区教育懇談会〉

(3) 事業実施内容

① 教育懇談会活動

「臨教審」答申による「上からの教育改革」に対し、「地域からの教育改革」をすすめるために、地域居住者組織による小学校区単位の教育懇談会活動は、11年目を迎えました。

＊ 今年度はのべ6回開催され、子どもをとりまく状況や、さまざまな教育の問題、高校教育改革、入試制度、また、平和、地域課題等について保護者・市民・教職員がひざをまじえて話し合いました。

10年間経過したなかで、地域居住者組織の体制がしっかりと根づいている地域もあり、継続的に行なわれる地域もでてきています。

1994年度 教育懇談会開催一覧表

	地 区	開催月日	会 場	テ ー マ (内 容)	参加人数
1	山 崎 小	94. 6. 16	春日神社	放課後の子どもたち―学童保育を知ろう―	50
2	豊 島 小	94. 7. 2	東中里町内会館	どうなる？ これからの高校入試！	50
3	大 楠 小 荻 野 小	94. 9. 17	西部公民館	どうなる？ これからの高校入試！	60
4	沼 間 小	94. 11. 15	沼間公民館	池子米軍住宅建設に伴う教育課題	20
5	野 比 小	94. 12. 17	野比地区フィールドワーク	野比の寺社めぐり	30
6	北 下 浦 小	95. 2. 25	北下浦小屋上	目でみる北下浦(星座観察)	80

1995・2・16

— 北下瀬小字区教育委員会 —

目でみる北下瀬


— 1994年度 —

本は1年中で一番星の多い季節です。南の空にはオリオン座、北の空にはカシオペ
ア座、・・・。

その星は、星を忘れさせてくれるほど、輝やかです。

みなさん、ごいっしょに外に出て星空をながめてみませんか。また、星の長沢原公園
等の星雲スライドもあります。

ぜひ、お出かけください。



日時：2月25日（土）午後7時～8時30分 （雨天決行）

会場：北下瀬小学校長教室・屋上 □ 48-0037

講師：大古啓先生（専工高南校教諭） 福田弘光先生（北下瀬小学校教諭）

持ち物：上着

主催 北下瀬小字区教育委員の会
三瀬半島地区教育文化研究所
三瀬半島地区教育委員会

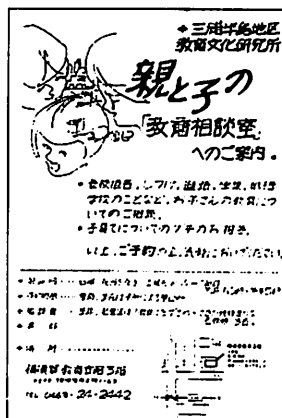
あたたい設計の用意もありますので、ふつてご参加ください。

[illegible]

＜教育相談＞

教職員、保護者、子どもたちが幅広く訪れ、好評を博しています。

「子どもから学んだこと」をテーマにした現場からの寄稿を中心に、毎号、専任所員による教育現場への提言を行ってきました。月2回（毎月1日、15日）の発行を目途に、94年度は20号を発行しました。通算192号を数えました。教育関係諸機関を含め、広く配布をしています。



15.01.2023

私は、小学校の教員士として日々を送つてい
ます。学校では本心に色々が事と子供にら
に教えられたように思ひます。

[illegible]

先年三月に、養生の教皇（行）へ、
 丹心丹心丹心丹心丹心丹心丹心

阪神大震災の発生から半月と過りまゝに、
れ馳せながら多くの犠牲者の、哀極を祈り

それにしてゐる。一度クと推定される。あの地
震か、むしろこの三浦半島で、子ども

なら、学校に在る時間帯に発生してい
たら……と考えた方は少なくはない。

おそろく、ひとりの安全対策を、進
行させる。放送による指示も、一切は
休む。

にまはらないが、目の前にいるま
もいらの命を、自合ひとてする。

教
 師

の判断と、それに基づいた決断・行動で、子どもたちをまわすことに力なれ

そう考へると、佃々の救済員が、自今で放逐を判断し、自今で決断し、自今で指示して、子

どもならも訂正せよといふからと憚る以外に、子どもたちの生命を守ることはできない

生の食糧」という内容で、米倉種子とさせてゐ
らうとした。馬場小に來て、その第一等と、いう
つたのです。彼の種を見るつて初めて、この
いう子ゝがなりて、自己紹介から始められた
この時に、二枚ある紙を裏の一枚と馬場小の爲
にけし書いてある事、特にと此に驚くべき事
だ。米倉種子と始めるとどの子熱心に聞

入、てくれ。自今、お井当のおおす組合せら
所では、私の話に事、おまえて、本当に、来
そうにや、ていまして、これは、黒板に、字を、

り、それに付く年当の梅の中に、色々なおすの
絵も貼りつけてお年当を完成させる作業です。
みんなの前で考へながら、少し遅れく

そうでしたか、何人の子が本当に染まっていたのか、
分知してくれました。後いふ届けてくれた感謝状

に為せし。此事やお丹多のおいすを考えて入
れたといふ。子といふにうゑへる事に間に合
てゐる事はよくわかりました。

飲食をより良い食事として作、ていく事と同様に、栄養士が子どもたちの中にとにかく入。

てゐる事を發見し、身進に内じてもらう上と
てゐる大切な事だと改めて教えられた思ひでし
た。

(馬場小学校 左藤 勉子)

いよいよです。

わらふ、こゝろなことをいふすくにすへて
の教職に要求されたら大変なことです。少
なくとも、日後的に、こうしたらかゝる所へ

いふことの大切さ——みじみと考へて
せられさした。

要するに、これの極みや、マニエ
アルに拘つていられるのは、主事の
きで、ア、ガと、うと、い、そん

な資格で生きていくことはできないといふことである。

待たせり。毎日のように、子どもたちの姿の回
 子に起る。子どもたちの姿に、いつて

やマニアルに頼りたり。前例

は、さうしたら、ちやうど研いでいくゝと
はでまないてしよう。

する私たちの決意と、個々の教職員の判断に基づいた実践を認めあい、そして生じてくる多数

③ 教育文化事業

〈親と子のためのコンサート〉

平和と文化の発展を願い、毎年春休みに地域在住の音楽家によるコンサートを開催してきました。94年度は、杉山智恵子氏他3名によるマリンバコンサートを3月30日、横須賀市内2ヶ所で開催し、計200名もの参加者がありました。マリンバによる生の演奏を初めて聞いたという方も多く好評でした。

参加者からはこれからもずっと続けてほしいという感想が数多く寄せられました。

[illegible]

〈平和作品展〉

8月14日～17日、横須賀市文化会館展示室において平和作品展を開催しました。

子ども、保護者、市民より千数百点の作品が寄せられました。この催しも94年度で7回目となりました。

年々、市民の方に浸透していき、入場者も94年度は4日間で800名にのびりました。

寄せられた作品はすべて展示するというユニークな作品展となっています。



第七回 平和作品展

子どもの幸せと
永遠の平和を願う
児童・生徒・教職員・一般の作品を公開します



会 期 8月14日(日)～8月17日(水)
午前9時30分～午後5時まで ただし8月17日は午後1時まで

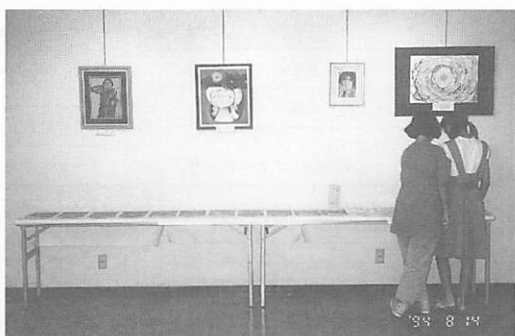
会 場 横須賀市文化会館 展示室、中ホール

8月14日(日)午後2時より中ホールに於いて、
平和に関するアニメ映画を上映します。

児童・生徒・教職員・保護者のみなさん！
平和の願いをこめて作品をお寄せください。

専 用 作 品 絵画・写真・彫刻などの作品
提 出 先 横須賀市文化会館/横須賀市上町1-63/TEL. 0462-21-2442
募集締め切り 1994年7月30日
※ 応募作品はすべて展示します。作品展終了後全作品を返却します

主 催 三浦半島地区教育文化研究所
後 援 横須賀市・三浦市・葉山町・逗子市教育委員会



三浦半島地区教育文化研究所ビデオライブラリー

№	タ イ ト ル	№	タ イ ト ル	№	タ イ ト ル
1	「ピカドン」 アニメ (9分)	35	「映像でつづる昭和史 1925～45」	66	「守れ三浦 小網代の森を」 (5分)
2	「侵略」語られなかった戦争 (60分)	36	「実録太平洋戦争史 チュエと空襲」	67	報道特集「徹底検証ODA」 「①文書が語る援助大国ニッポン」 「②開発援助が生む利子地獄と公害汚染」
3	「生きる」その証のために	37	「危険な話'88 広瀬 隆 トークライブ」(90分)	68	「アガテガニの産卵(放仔)」
4	「にんげんをかえせ」 (20分)	38	「朝鮮戦争」	69	「全国教研第31次広島大会」
5	「予言」 (41分)	39	「沖縄戦 未来への予言」 (55分)	70	「火垂るの墓」
6	「明日への伝言」 (7分)	40	「対馬丸・さよなら沖縄」 アニメ (75分)	71	「白旗を持った少女」
7	「おこりじぞう」 アニメ (27分)	41	「1.水俣 2.川崎」	72	「とびうおのぼうやは病気です」 アニメ (19分)
8	「核戦争後の地球」2部構成 (各30分)	42	「La Revoltion Francaise」	73	「日本の歴史と部落問題」 前近代編
9	「アメリカの反核運動」	43	「1.街が消える時 2.もし原発事故がおきたら」	74	「日本の歴史と部落問題」 近代編
10	「カメラマン・サワダの戦争」	44	「1.伊方原発出力調整実験 2.君は戦争を知っていますか 日本兵フィリピン人虐殺」	75	「日本の歴史と部落問題」 現代編
11	「恐るべき体験」	45	「語られなかった戦争 侵略パートII」 (60分)	76	「三原色の絵の具箱」
12	「カールビンソンのすべて」	46	「生存者が語る 南京大虐殺」	77	「アドルフ・ヒトラー」 (54分)
13	「アトミックカフェ」 アメリカと原爆 (45分)	47	「侵略 中国侵略 南京大虐殺 上海租界」 (60分)	78	「暴力中学」
14	「今、海の底で何かが」 原子力潜水艦	48	「ゆんたんざ沖縄」 (110分)	79	「スーパーTV ③ ④」
15	「森の中から 軍靴の響きかきこえる」	49	「遅すぎた聖談 「日の丸」と沖縄」 (42分)	80	「教育スペシャル 1」
16	「核軍拡の中の日本」	50	「海 いまトマホークが」 (13分)	81	「教育スペシャル 2」
17	「平和と模索」核戦争と人類	51	「ナチ絶滅収容列島」	82	「教育スペシャル 第4日目」
18	「いくさ世の両端」	52	「鉄路の闘い」	83	「教育スペシャル 第5日目」
19	「核基地ヨコスカ」 不入斗中3年	53	「キューボラのある街」 (100分)	84	「戦争を知っていますか 1」
20	「首都の海」	54	「哀愁」 (109分)	85	「戦争を知っていますか 2」
21	「怒りの三宅島」 (25分)	55	「白い道 親鸞」	86	「巨摩中教育の理想と現実」
22	「これがヒロシマだ 原爆の絵アメリカに行く」	56	「ザ・デイ・アフター」	87	「20世紀の激動 ヒトラー・ムッソリーニ スペイン戦争」
23	「日の丸」君が代 (32分)	57	「茗荷村見聞記」	88	「マタギ」
24	「東京裁判」	58	「やがて春」 (105分)	89	NHK特集 「教育の条件」
25	「西部戦線異状なし」	59	NHK NEWS TODAY 「インフルエンザ予防接種効果に疑問」	90	NHK特集 「密室の攻防・ 男女雇用機会均等法の裏舞台」
26	「ゆきゆきて神軍」 (122分)	60	サイエンスQ 予防は可能か 「検証 インフルエンザ ワクチンの効果」	91	NHK特集 「もう一人の私 カードがあなたを管理する」
27	「ヒキニ実験はこうして行われた」 (45分)	61	「小平の給食」	92	林 竹二「授業巡礼」
28	「せんすい艦に恋したクジラの話」 アニメ (15分)	62	「フッソを考える I」	93	「差別と人権 地域改善対策措置法の一年」
29	「チェルノブイリクライシス」 (58分)	63	「フッソを考える II」	94	「同封審 13年のあゆみ」
30	「核燃料輸送追跡の記録」	64	「2年あい組 羊のあいちゃんと 11人の一生懸命奮闘記」	95	「手～hand,新日本丸進水」
31	「13階段への道 ヒトラー・ナチスの犯罪」	65	「中学生日記・翼をください」	96	「はたらく人々 II」
32	「デートリッヒ・ボンヘッファー 服従と十字架・抵抗と処刑 ―闇に逃れたユダヤ人―」				
33	「風が吹くとき」 アニメ (85分)				
34	「ジョニーは戦場へ行った」 (112分)				

№	タ イ ト ル	№	タ イ ト ル	№	タ イ ト ル
97	「二十四の瞳」	122	「深海6000メートルの驚異 ～初めてみた巨大地層の泉～」 (50分)	142	「湾岸危機 (TVプロジェクトより) 1～4」 (120分)
98	「核燃料サイクル」 (60分)			143	「湾岸危機 (TVプロジェクトより) 5～6」 (60分)
99	「飛鳥と渡来人」 (22分)	123	「調査報告 チェルノブイリ原発事故」 (50分)	144	「情報新秩序 (湾岸報道批判) (ペーパータイガーより)」 (30分)
100	「河内と渡来人」 (22分)	124	「黒い雨 ～広島・長崎原爆の謎～」 (50分)	145	「空爆中のイラクを歩く ラムゼークラーク調査団」 (60分)
101	「阪神教育闘争」 (23分)	125	「地球汚染 第1部 大気に変化が起きている」	146	「今日 私はリンゴの木を植える 劇版・日本国憲法」 (60分)
102	「海峡を越えて」 朝鮮通信使 (26分)	126	「第2部 海はひそやかに警告する」 (50分)	147	「先生のあかちゃん」 (16分)
103	「トンネルは語る 朝鮮人強制連行」 (20分)	127	「これがヒロシマだ ～「原爆の絵」アメリカをゆく～」 (50分)	148	「あしたが消える ～どうして原爆～」 (55分)
104	「生駒トンネルと朝鮮人労働者」 (20分)	128	「夏服の少女たち ～ヒロシマ・昭和20年8月6日～」 (50分)	149	「いじめと人権」 (20分)
105	「元「朝鮮人従軍慰安婦」 の証言を聞く集い」	129	「掘り起こされた歴史 ～千葉と朝鮮人強制連行～」 (50分)	150	「横田基地は今」 (22分)
106	「ハルモニ」 (20分)	130	「消えた日の丸」 (25分)	151	「はくしのいる街」 (23分)
107	「子どもたちの生きる卒業式を」	131	「誰なの主役は ～1991年中間市卒業式・ 入学式の記録～」 (25分)	152	「放射能そこが知りたい」 (60分)
108	「ボロロッカ・アマゾンの大逆流」 (50分)	132	「返子・強制連行の傷跡 ～地下壕事前調査～」 (30分)	153	「原爆 そこが知りたい」 (60分)
109	「東京大空襲」 (50分)	133	「100ばんめのサル」 (17分)	154	「かよこ桜の咲く日」 (60分)
110	「ドラマ教員室」 (50分)	134	「君知ってる首都炎上」 (18分)	155	「なっちゃんの赤い手袋」 (20分)
111	「追跡 核燃料輸送船」 (50分)	135	「火の海大阪」 (20分)	156	「鷹取小学校卒業式 (1992.3.18)」 (60分)
112	「農民兵士の声がきこえる ～7000通の軍事郵便から～」 (50分)	136	「ヒロシマ ナガサキ」 (46分)	157	「武山小学校卒業式 1988」 (60分)
113	「カメラマン・サワダの戦争 ～5万カットのネガは何を語るか～」 (50分)	137	「教えられなかった戦争」 (1時間50分)	158	「神明小卒業式」 (1時間40分)
114	「散華の世代からの問い ～元学徒兵、吉田満の生と死～」 (50分)	138	「大阪と朝鮮人強制連行」 (40分)	159	「不人斗中卒業式」 (45分)
115	「土佐・四万十川 ～清流と魚と人と～」 (50分)	139	「象のいない動物園」 (80分)	160	「一色小卒業式 60分 1989」 (1時間50分)
116	「あなたはこんな水を飲んでいる」 (50分)	140	「おかあさんの木」 (25分)	161	「高槻教組卒業式」 (60分)
117	「撃墜 大韓航空機事件 ～情報戦争の9日間～」 (50分)	141	「忘れられた人々」 (20分)	162	「小坪小卒業式 1989」 (27分)
118	「ユウカラ 沈黙の80年 ～樺太アイヌ保管秘話～」 (50分)			163	「イフガオへの旅」 (30分)
119	「そしてトンキーもしんだ ～子が父からきくせんそう話～」 (50分)			164	「猿島を自然教育園に」 (45分)
120	「遠野物語をゆく 柳田泉男の風景～ (第1部) (第2部) (50分)」			165	「公立高校へ (障害児教育)」 (35分)
121				166	「AIDS (エイズ) 本当にこわいのは何か？」 (30分)

(三浦半島地区教育文化研究所担当 浅井 良雄)

湘南教育文化研究所のとりくみ

1. 活動の基本方針

湘南教育文化研究所は発足以来、地域に根ざした教育文化を父母・地域住民とともに創造することを目的に、映画会・講演会の開催、出版活動、フィルムライブラリーの整備・拡充などの活動を続けてきました。

1990年4月、運営規定が定められ、所長に山田宗睦氏（関東学院大学教授）をむかえました。現在、学校と地域とを名実ともにつなぐ場として機構整備を行い、さまざまな教育文化活動を推進しています。

2. 事業の内容

(1) 親子映画会

① 春の親子映画会（94年2月）

94年の所報と一部重なりますが、“心のゆたかさ、親子・人のふれあい”を願って、春の親子映画会を開催しました。

宮澤賢治の童話『グスコーブドリの伝記』を下記の6会場で上映しました。いくつかの会場では大雪に見舞われるというあいにくの天候となってしまうしましたが、多くの親子の参加がみられ、好評のうちに終了することができました。賢治の持つ、独特のヒューマニズムとロマンあふれる世界にふれることができた、大人からも子どもからも感想をもらいました。

2月11日（金）	湘南台市民シアター
2月12日（土）	藤沢労働会館
2月12日（土）	茅ヶ崎市民文化会館
2月13日（日）	寒川町民センター
2月20日（日）	鎌倉市中央公民館
2月20日（日）	レイ・ウェル鎌倉



② 夏の親子映画会（94年7月～8月）

戦争の悲惨さ、平和の尊さを、親子であるいは友達どうしで考える場として、毎年、「7月平和教育月間」にあわせて、“平和”をテーマとした親子映画会を実施しています。94

年度は満蒙開拓団をテーマとした「蒼い記憶」を上映しました。軍国少年の意気に燃えて満州に渡っていった少年と、国内に残り師範学校に進んだ少年との友情、そして満蒙開拓青少年義勇軍の実態を描いた作品に会場の親子は真剣な眼差しをむけていました。

上映会場は、以下の通りです。

7月21日	鎌倉中央公民館本館
7月26日	藤沢労働会館
7月27日	レイ・ウェル鎌倉
7月29日	大庭市民センター
8月2日	湘南台文化センター
8月6日	寒川町民センター
8月9日	茅ヶ崎文化会館小ホール



(2) 教育懇談会

子どもを中心として、父母とともに教育改革をすすめるために、小学校区・中学校区の教育懇談会を通年的に開催してきました。94年度は、学校5日制・子どもの権利条約を中心として、性教育・高校入試制度改革など今日的なテーマが取り上げられ、湘南の各地で活発に開催されました。

(3) 教育文化講座

教育文化講座は、教育をとりまく情勢や課題に即し、各界から講師を招いて開催されました。内容については、以下の通りです。

① 映画「蒼い記憶」について 94年6月24日

講師 出崎 哲氏（「蒼い記憶」監督）

94年度の夏の親子映画会上映作品の同映画を観賞するとともに、監督の話を聞き、満蒙開拓青少年義勇軍とはどういうものだったか、当時の満州の様子を含めて有意義な話を聞くことができました。



② アジアから見た日本Ⅲ 94年7月7日

講 師 崔 容徳（チェ・ヨンドク）氏（太平出版社長）

シリーズ講演の最終回。今回は戦後の朝鮮・韓国と日本の関係について論じてもらいました。現在の民族差別の実態を、戦前からの歴史的経緯を追いながら解きあかしてくれた氏の3回の講演は、組合員に深い感銘をあたえました。

③ 「子どもの権利条約」学校現場にどう活かす 94年12月13日

講 師 喜多明人氏（立正大学教授）

「子どもの権利条約」について、現在第一線で活躍されている講師からの話を聞きました。いわゆる「いじめ」問題がマスコミを賑わしているときであり、「いじめ」の問題と「子どもの権利条約」についての関係も聞くことができました。私たちが今後「子どもの権利条約」の精神を子どもたちにどう伝え、学校現場にどのように活かしていくのか、示唆に富んだ講演会となりました。

(4) 地域振興事業——教育講演会——

地域住民と広く連帯し、地域の教育・文化の振興に寄与することを目的として行われているこの事業は、93年度に引き続き、湘南退職教職員の会の後援と藤沢市職労の後援を得て、下記のとおり教育講演会を開催しました。

日時・場所 95年2月1日 藤沢市職員会館

講 師 山田宗陸氏（湘南教文研所長・関東学院大教授）

演 題 「日本書紀をどう読むか」

日本書紀について造詣の深い氏の話に参加者全員、興味深く聞くことができました。日本書紀の記述の中の矛盾を追究することから、天皇家の系譜に対する矛盾がみえてくるとい話など、日本書紀という最古の書物から現代を見つめ直してみようという視点には多くの学ぶものがありました。

(5) 教育実践講座

「楽しい授業」を創造するために、各地から実践家を招いて学習を深めるための教育実践講座も第6期を迎え、ますます充実してきました。いずれも参加者から好評で、講師を囲んでの教育論議が熱心に続けられ、大変参考になりました。今年度は、4講座を次の通りに開催しました。

① 日韓授業交流を探る

講師 善元幸夫氏（東京・中川小教諭）

これまでの授業交流が国と国、組織と組織という、「上」の立場で行われてきたので長続きをしなかったことをふまえて、一教員・一市民という立場にベースをおいて、地道に交流をしていこうという姿勢を熱っぽく語られていました。「授業で子どもを退屈させるのは罪悪である」という氏の持論から講座はただ話すだけでなく、スライドを入れたり、質問の時間を多くとったりと受講者を飽きさせない心配りがみられました。

② 生命と^{イオシ}〇〇〇

講師 平林 浩氏 (元 和光学園小学校教諭)

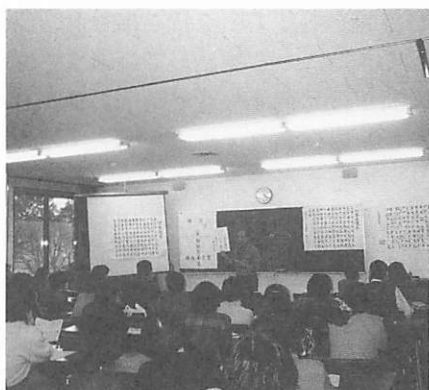
「水道水は電気を通すか?」「ポカリスエットは?」「ミカンは?」「肉は?」「牛乳は?」「じゃあ、おしっこは?」

お得意のQ&A方式で、多くの中学生が理科を嫌いになるという「^{イオシ}〇〇〇」の授業を楽しんでくださいました。そしてそれにとどまることなく、話は食物連鎖から環境問題にまで発展します。身近な興味から大きな問題に拡げていく素晴らしい授業に、参加者一同「脱帽!」の実践講座でした。

③ 楽しい漢字指導 Part V

講師 伊藤信夫氏 (元 自由の森学園教諭)

普段何気なく使っている漢字について、再発見させられる5回目の講座でした。101の基本漢字が部首を構成しているお話など、漢字が私たちの文化が作り上げた素晴らしい文字であることをあらためて確認することができました。また、漢字に興味を持って子どもとともに楽しく学ぶ視点から、98の部首カルタを使っのゲームや部首を使っのパンノラマ作り、神経衰弱カルタなど、数多くの有益なヒントが与えられました。



④ 算数学力の基本 ―量の楽しい指導と定着化―

講師 相原 昭氏 (元 東京・町田第一小学校教諭)

小学校で学習する量は、以外に忘れられやすいものです。「てんびん」、「速さのすごろく」、「メートル法換算器」等を使って、視覚に訴えることによって、楽しみながら量の概念を定着させていく教材や指導法が、次々と紹介されました。子どもを夢中にさせる前に、教師を夢中にさせ、新たな工夫をするヒントを数多く与えてくれました。

(6) パソコン研修講座

教育現場への導入が着実に進んでいるパソコンについて、その光と影の部分について学ぼうという趣旨で開催しました。6月に茅ヶ崎、11月に藤沢・鎌倉地区で開催しました。初心者を対象に行い、パソコン全体の機能について余裕を持って学ぶことができ、参加者には好評のうちに終了しました。

(7) 出版事業

93年12月に行った、「子どもの権利条約」についての学習会の様子を冊子にし、全組合員等に配布しました。今後にも必要に応じて随時出版事業を拡大していきたいと思ひます。

(8) 教文研ライブラリー

平和教育・人権教育を中心にライブラリーの充実をはかりました。また「視聴覚ライブラリー目録'94」を発行するとともに、ビデオコーナーの拡大、ビデオ等の分類を行い利用しやすい方法を工夫しました。加えて、写真集・書籍などの充実にも努めました。

「7.5全県平和教育の日」を中心とした7月平和教育月間には、多くのフィルムやビデオが貸し出されています。この数年は、人権・性・環境教育関係のビデオが年間を通じて広く貸し出され、ライブラリーが定着してきたことを物語っています。

94年はビデオの新規購入の他に、「ぞう列車がやってきた」の16mmフィルムを購入するなどビデオライブラリーのさらなる充実にも努めました。



3. 今後に向けて

95年4月より月2回の学校5日制が制度化されます。学校現場での教育活動の重要性に加え、子どもたちが、地域・家庭で過ごす割合も必然的に多くなっていきます。地域とともに育っていく教文研活動のあり方が、今後ますます問われていくことと思います。

学校現場と、地域・家庭がともに歩み、育ち合っていく「開かれた学校づくり」を推進していくサポート役としての教文研活動であり続けたいと思います。

同時に、戦後50年の節目にあたる今年は、平和の大切さを学ぶための教文研活動となるよう、引き続き努力をしていきたいと考えています。

’94 湘南教文研ビデオ等新規購入リスト

ビデオ	「子どもの権利条約」を子どもへ
ビデオ	沖縄戦 未来への証言
ビデオ	太陽の帝国
ビデオ	イマジン
ビデオ	レインマン
16mm	ぞう列車がやってきた
写真集	沖縄・沖縄戦

湘北教育文化研究所のとりくみ

1. はじめに

湘北教育文化研究所は、下記3点を基本方針として94年度も様々な活動を展開してきました。

- (1) 主任制反対闘争の一環として教文研活動があることを確認し、教育現場からの国民合意による教育改革をめざし、民主教育と望ましい文化を確立するための研究活動を行う。
また、教育現場・保護者・県民・子どもたちにその成果を還元する。
- (2) 教文研活動と教組運動の一体化を図る。
- (3) 今日的な社会問題にも対応していく。

2. 1994年度事業の概要

1994年度、湘北教文研事業は、下記の通りでした。

- (1) 教育実践講座の開催
- (2) 親と子の映画会の開催
- (3) 「湘北教文研だより」と「教育文化」の発行
- (4) 国際交流教育事業として、日韓親善ユースバスケットボール相模原大会の後援、タイ国へ教育振興費援助の継続
- (5) 保護者・教職員の教育資料の充実

(1) 教育実践講座の開催

「明日の教育実践に役立つ講座」として、毎年夏休みに行っています。湘北教文研の活動としてすっかり定着してきた感のあるこの講座ですが、恒例となっている講座に加え、毎年新しい講座を設けて活動してきました。第7回を迎えた今年度も、一昨年度よりの外国語「入門講座」（今年度についてはスペイン語・ポルトガル語・ハングル・中国語）を継続開講しました。外国籍児童・生徒の増加という今日の状況から、受講者のニーズに応えるため、語学講座の通年の開催に向けて検討も行っています。

どの講座も「わかる授業」「楽しい授業」の実現に向けたもので、各講座とも熱心な参加者で盛り上がりを見せました。

第7回 明日の授業に役立つ...

教文研教育実践講座



A 8月28日/29日/30日 「レクイエーション入門」 講師：山本 浩二	E 7月26日/28日/29日 「ポルトガル語入門」 講師：山本 浩二
B 7月26日 「三原色で宇宙を描く」 講師：山本 浩二	F 7月27日/28日/29日 「ハングル入門」 講師：山本 浩二
C 7月25日/26日 「瑞士の地蔵に学ぶ」 講師：山本 浩二	G 8月1日/2日/3日 「中国語入門」 講師：山本 浩二
D 7月28日/29日/30日 「スペイン語入門」 講師：山本 浩二	参加費無料 申し込みは下記まで

共 催 相模原教育会館・湘北教育文化研究所
【連絡先】 TEL.0427-53-3092 FAX.0427-56-5649

◎Aコース 「レクリエーション入門」(8月2日、3日、4日)

講師 波多野 良子 氏 (県レクリエーション協会理事)

井上 桂 氏 (県レクリエーション協会専門委員)

日本レク協会公認インストラクター資格取得の対象となる講座が3日間にわたり開かれました。レクの理論からゲーム、キャンプソング、演劇に加え、ニュースポーツのインディアカ、ペタンクなどの実技まで、レクリエーション協会の方々の指導のもとで楽しく有意義に行われました。

◎Bコース 「三原色で宇宙を描く」(7月26日)

講師 松本 キミ子 氏

(仮設実験授業研究会会員)

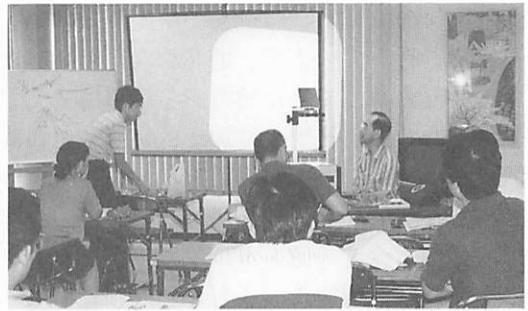
「キミ子方式」による絵画の実技指導を受講しました。参加者全員が筆を持ち、午前中は三原色を使った「色づくり」をマフラーや幾何学模様で作品を仕上げ、午後はボールペンを使った「似顔絵」を楽しみながら描きました。講師の先生の楽しい話を聞きながら時間の経つのも忘れ、参加者全員が夢中になって作品を仕上げていました。



◎Cコース 「郷土の地層に学ぶ」(7月25日、26日)

講師 町田 洋 氏 (東京都立大教授)

1日目は、講師の先生の興味深い話をうかがいながら、富士山方面に出かけ、実際に地層のでき方を巡検してきました。翌日は、前日の実地見学をもとにしての講義があり、大地の動きという面から改めて富士山を見直した二日間でした。



◎Dコース 「スペイン語入門」(7月28日、29日、30日)

講師 末原 ヌビア 氏

あいさつを中心に、基礎的な発音など実践に即した研修を行いました。会話中心だったため、充実した内容の講義となりました。

◎Eコース 「ポルトガル語入門」(7月26日、28日、29日)

講師 マリア 石垣 氏

基本的なポルトガル語の発音を中心に語学研修を行いました。ブラジルの羊羹をいただきながら、日常の児童生徒との会話を想定した内容も取り入れ、充実した講座になりました。

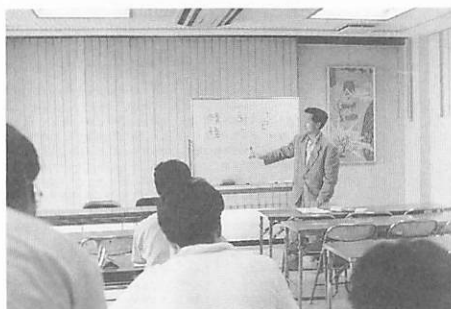
◎Fコース 「ハングル入門」

(7月27日、28日、29日)

講師 全 泰郁 氏

(大韓民国教育部派遣神奈川韓国総合教育院)

日常よく使われる会話の発音を中心に語学研修を行いました。語学研修にとどまらず、韓国の歴史、教育事情や韓国民謡等の韓国の文化にも触れることができ、有意義な講座となりました。



◎Gコース 「中国語入門」(8月1日、2日、3日)

講師 エン ジョウエイ 氏

発音を中心に、中国語の基礎的な会話と中国の最近の教育状況についての研究を行いました。参加者の意欲的な姿勢で短時間でしたが、充実した講座となりました。

(2) 親と子の映画会の開催

湘北教育文化研究所は、相模原教育会館との共催事業として、毎年「親と子の映画会」を開催しています。今年度は、厚愛地区、相模原地区、高和地区において「がんばれ! エドモンド」「パンダ・コパンダ」の2本(高和地区は1本)を上映し、多くの参加を得て盛大に行われました。

1994年12月10日(土) 厚愛地区(愛川町文化会館)

1994年12月17日(土) 相模原地区(相模原教育会館)

1994年12月24日(土) 高和地区(大和桜ヶ丘文化会館)

(3) 湘北教文研だより・教育文化の発行

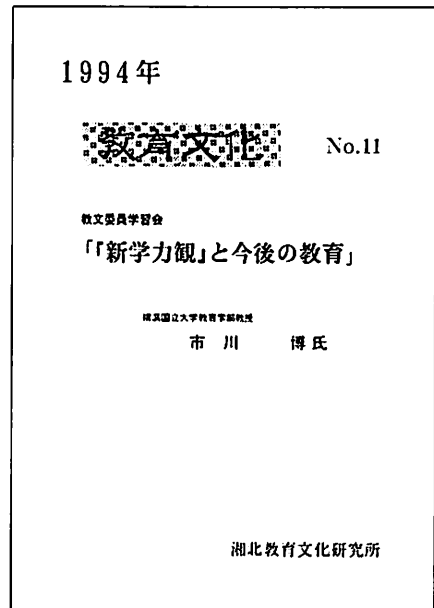
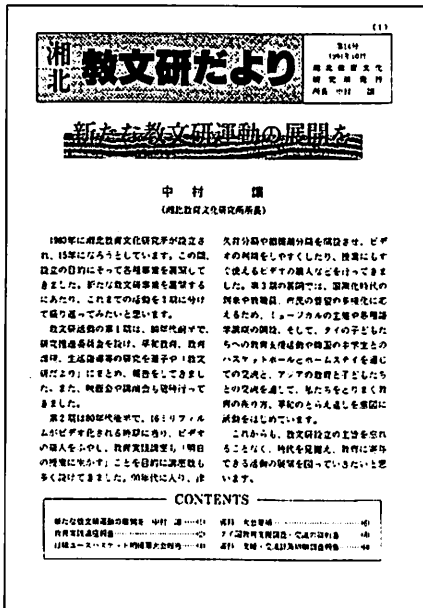
◎教文研だより

第14号 「教育実践講座報告・国際交流教育事業報告 他」

◎教育文化

第11号 「『新学力観』と今後の教育」

市川 博 氏(横浜国立大学教育学部教授)の講演記録



(4) 国際交流教育事業として、日韓親善ユースバスケットボール相模原大会の後援、タイ国へ教育振興費援助の継続

◎日韓親善ユースバスケットボール相模原大会報告

日韓親善ユースバスケットボール相模原大会が、8月7日(日)相模原総合体育館で開催されました。この大会は、韓国弘益(ホンイク)大学校師範大学付属中学校のバスケットボールチームと相模原市立大沢中学校のバスケットボール部・相模原市選抜バスケットボールチームによる、親善の試合を行ったものです。弘益大学付属中との親善試合は最初に藤沢市で行われ、続いて海老名市、そして今回の相模原市での大会となりました。

湖北教文研では今年度大きな行事の一つとして、民際外交の観点からこの相模原大会の推進を行ってきました。

大会当日、相模原体育館には夏休み中の日曜日でもあったため、市内の小中学生や一般市民等1,000人以上の方々が集まり、両国の選手にあつい声援を送っていました。試合は弘益大付属中チームが大沢中・相模原選抜の両チームに勝ちましたが、試合後子どもたちは、固い握手とさわやかな笑顔で友情を交わしていました。日本滞在中韓国の選手は大沢中学校の生徒の家庭にホームステイをし、身振り手振り等も交えてのコミュニケーションを深める機会もありました。

こうした子どもたちのスポーツ交流を通し、大会関係者だけでなく多くの人々の協力と理解を得て、日韓両国の親善をより深める意義深い大会となりました。



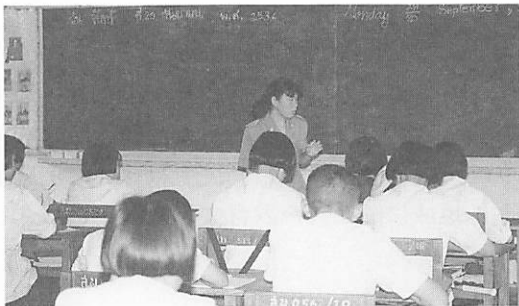


◎タイ国教育支援調査・交流の旅報告

昨年の全体的な見学に引き続いて、今年は、ニコニコ財団の理事長のマニト・ユンヤム氏にお世話になり、「タイ国教育支援調査・交流の旅」と銘打って参加者を募集し、総勢6人（女性3人含）でチェンマイ市近郊のサモン郡で行われている、財団の活動を見学してきました。

8月26日夕刻にチェンマイに到着後、さっそく街にくりだし、トムヤンクンに舌づつみを打ちました。続く27、28日とチェンマイの主要な見所を通過（？）し、両日の間に見学の打ち合わせをしました。そして29日の早朝に出発し、いよいよサモエン郡（チェンマイから約60km）に入り、サモエン中・高で一息入れさせていただいた後、裏手のパパイヤ、鶏プロジェクトを見学しました。教員住宅に並んで、学生寮が新築中で、これも学校予算と財団の補助で建設されていると聞きました。隣接の小学校では、食用魚のプロジェクトと乾燥バナナ作りを見学させていただきました。昨年の見学の際はメー・ペー小学校（サモエンから約40km）まで行ったので、成果を見たいとも思いましたが、おり悪く雨季のため道が悪く断念しました。昼食はマニト理事長の郷里の民家で、本物のカントーク料理を御馳走になりました。午後は教育事務所の会議室をお借りしてのミーティング、夕刻は理事の方々と近くのサモン・リゾートで交流会を行いました。女性教職員の御苦勞や、理事の方々の教育を少しでもよくしたいという熱意に打たれ帰路につきました。

私たちは、今回の旅行でも、ニコニコ財団の活動が、サモエン郡の教育向上に大きく貢献し、地域にしっかりと根差していることが再確認できました。活動の成果が上がることによって、新たに参加を希望する学校が徐々に増加しています。また、財団の活動が教育行政機関に影響を与えていることも事実だと思います。末筆になりましたが、お世話いただいたマニト・ユンヤム理事長、現地にまで電話をいただきお氣遣いいただいた益本仁雄氏にお礼申し上げます。





(5) 保護者・教職員の資料の充実

湘北教文研ライブラリーの教育資料として、VTR・16mmフィルム、図書等の充実をはかり、教育文化の向上をめざし取り組みました。

目 次

核問題	1	差別問題・人権問題	14
環境問題	5	児童映画	15
基地問題	7	社会問題	16
教育・教材	7	性教育	24
教育問題	12	反戦・平和	24

利用の際の注意事項

- 貸し出し時間： 午前9:00～午後5:00 (月～金)
午前9:00～午前12:00 (土) [休日は貸し出しをいたしません]
- 返却時間： 午前8:30～午後10:00 (教育会館開館中は返却できます。教育会館受付でも返却できます。)
- 利用申し込み： 一度に5本まで。予約が必要です。詳しい申し込み方法は28ページにあります。

この目録は保存版です。バージョンアップは1年後です。
予約には、カタログ番号が必要です。

教 文 研 所 蔵 視 聴 覚 資 料



分 類 目 録 (1993～1994)

1993.11.30現在



この目録は、分類版です。出力順は、核問題、環境問題、基地問題、教育・教材、教育問題、差別問題・人権問題、児童映画、社会問題、性教育、反戦・平和。項目ごとに、タイトル、カタログ番号、媒体種別、時間、抄録です。

教文研の視聴覚教材

ご利用をお待ちしています。

このリストは、核問題、環境問題、基地問題、教育・教材、教育問題、差別問題・人権問題、児童映画、社会問題、性教育、反戦・平和。項目ごとに、タイトル、カタログ番号、媒体種別、時間、抄録です。

すでに予約がある場合もあります。お急ぎの場合は、お電話ください。配送の料金は、利用者の力でお持ちします。

利用の申し込みは……
☎0427-53-3092

湘北教育文化研究所
〒229 相模原市南区6-6-13 相模原教育会館内

3. 今後に向けて

より充実した活動の展開をはかるため、今までの教文研の活動の見直しを行っています。今後も「教育文化研究所」の運動を保護者・地域住民・教職員の連帯のもと、充実・発展させていきます。また、民主教育と文化を確立するための理論ならびに実証的研究を展開し、地域に開かれた教育文化の創造をめざしています。

中地区教育文化研究所のとりくみ

I. はじめに

中地区教育文化研究所は、設立されて8年目を迎えました。この間、保護者・地域住民とともに知恵を出し合いながら、創造的な教育文化活動を行うという設立の意義をふまえ、様々な活動を推進してきました。

今年度も、基本方針のもと、「地域文化研究委員会」、「教育課程研究委員会」、「授業・行事づくり研究委員会」、「障害児教育研究委員会」の4研究委員会を組織し、神奈川県教育文化研究所とともに活動のネットワークを作りながら教育運動を展開してきました。94年度は「教育課程研究委員会」の教科部会に、2年間の活動を終了した社会科部会、保健科部会に代わって算数・数学科部会と英語科部会を設置し研究にとりくみました。さらに、在日外国人の子どもたちへの理解を深めるため、また日常会話を学ぶために国際理解教室を今年度より開講しました。

II. 事業推進の基本方針

- (1) 子どものよりよい成長と生きる力を培う文化活動の充実をはかります。
- (2) 教職員の見識を高める文化活動の充実をはかります。
- (3) 保護者・地域労働者と教職員の連携を深め、平和教育の基礎をつくります。
- (4) 講演会・学習会などを開催し、問題の共通理解と深化をはかりながら、保護者・地域との協力体制づくりをめざします。
- (5) 方針の具現化のために、各種研究委員会を設置します。

III. 事業の概要（1994年度の主な事業）

(1) 教育講演会

- | | | |
|-----|--------------------------|--------|
| 第1回 | 6月16日「子どもと社会のニーズに合った性教育」 | 山本 直英氏 |
| 第2回 | 10月28日「子どもの権利条約」 | 永井 憲一氏 |
| 第3回 | 2月15日「今こそ学校現場の自己変革を！」 | 大平 滋氏 |

(2) 教育実践学習会

- | | | |
|-----|----------------------------------|--------|
| 第1回 | 9月29日「教師は何ができるのか—新しい視点からのアドバイス—」 | 大山美根子氏 |
| 第2回 | 12月5日「ムーブメント教育」 | 永松 裕希氏 |
| 第3回 | 2月1日「子どもの権利条約」 | 名取 弘文氏 |

(3) 国際理解教室 「ポルトガル教室」「スペイン教室」（年間24回）

(4) 親と子で見る映画会

「パンダコパンダ」「ライヤンツリーーのうた」

中郡、秦野、伊勢原、平塚の各会場にて（8月1、3、4、9日）

(5) 親と子による写生会 平塚、秦野、伊勢原の各会場（7月26日～29日）

(6) 障害児教育懇談会の開催（7月7日）「ともに生きる手だてを求めて」

(7) 機関誌発行（「ひらく」15号・16号、「所報」、「障害児研だより」の発行） (8) 教育懇談会の開催（全中学校ブロック32会場）

IV. 全体事業〈国際理解教室〉

現在、中地区においても、外国人の子どもたちが「日本語を覚えよう。」「新しい環境に慣れよう。」と懸命に努力しています。私たち教職員も彼らが早く地域の学校、環境に慣れて明るく元気に生活して欲しいと願って、子どもたちに接しています。

しかし、日本の言語や文化を教えるだけでなく、彼らの心を理解するためには、彼らの言語を知り、彼らの文化を理解することも必要なことです。「外国人の子どもたちをより深く理解したい。」という教職員のニーズに応えるため、中地区教育文化研究所は、今年度「国際理解教室」を開設しました。

本年度は、南米の文化を学ぶことを目的に「スペイン教室」「ポルトガル教室」の講座をそれぞれ年間23回設定しました。（「ポルトガル教室」木曜日 5:30～「スペイン教室」土曜日 3:30～）それぞれの講座とも定員を上回る参加希望がありました。希望者全員が受講できるように会場等を設営しました。講師には、平塚市巡回指導員の井上シルビア先生、加藤レダ先生を招き、南米の国々の様子についての学習と日常会話の学習を中心に行っています。シルビア先生によると、スペイン語・ポルトガル語はわりと覚えやすいので1年間の講座で簡単な日常会話はこなせるようになるそうです。各講座とも和やかな雰囲気の中にも学習にとりくむ熱気があ



ポルトガル教室年間計画

		講 座 の 内 容	会 場
1	6月2日	ラテンアメリカの国々について	中会議室
2	16日	ブラジルの歴史、地理、気候	"
3	23日	ブラジルの人種と言語	"
4	7月7日	ブラジルの政治と教育	"
5	14日	ブラジルの主な産業と生産物	実践研究室
		ブラジルの観光ポイント	"
6	9月1日	ラテンアメリカの国々の生活について	中会議室
7	22日	主な仕事	"
8	29日	文学と音楽	"
9	10月6日	趣味や余暇の使い方	"
10	13日	教育の内容	中会議室
		服装や交通機関	"
11	27日	日系人の位置付けについて	"
12	11月17日	移民の歴史	"
13	24日	国別の人口	"
14	12月1日	社会的地位	"
		日本へのJターン現象	"
15	15日	日本の学校における問題点について	"
16	22日	子どもたちの受け入れ体制	中会議室
17	1月12日	学習内容の違い(時間制・教材・学習方法など)	"
18	19日	日本の教育への戸惑い(音楽・家庭科・体育など)	"
19	26日	子どもの教育に対する両親の姿勢	"
20	2月2日	校則への戸惑い(服装・アクセサリーなど)	中会議室
21	16日	人種差別の問題	"
22	23日	滞在期間の不確定さから起きる問題	和室
23	3月2日	年齢と学年のズレから起きる問題	"
		まとめのお話し	"

スペイン教室年間計画

		講 座 の 内 容	会 場
1	6月4日	ラテンアメリカの国々について	中会議室
2	18日	ペルーの歴史、地理、気候	"
3	25日	ペルーの人種と言語	青少年会館
4	7月2日	ペルーの政治と教育	中会議室
5	16日	ペルーの主な産業と生産物	和室
		ペルーの観光ポイント	"
6	9月3日	ラテンアメリカの国々の生活について	中会議室
7	17日	主な仕事	"
8	24日	文学と音楽	"
9	10月1日	趣味や余暇の使い方	"
10	15日	教育の内容	中会議室
		服装や交通機関	"
11	29日	日系人の位置付けについて	"
12	11月5日	移民の歴史	"
13	19日	国別の人口	"
14	26日	社会的地位	"
		日本へのJターン現象	"
15	12月3日	日本の学校における問題点について	中会議室
16	17日	子どもたちの受け入れ体制	"
17	1月21日	学習内容の違い(時間制・教材・学習方法など)	"
18	28日	日本の教育への戸惑い(音楽・家庭科・体育など)	"
19	2月4日	子どもの教育に対する両親の姿勢	中会議室
20	18日	校則への戸惑い(服装・アクセサリーなど)	"
21	25日	人種差別の問題	和室
22	3月4日	滞在期間の不確定さから起きる問題	"
23	18日	年齢と学年のズレから起きる問題	中会議室
		まとめのお話し	"

ふれています。学校で子どもたちに向かって、「ヴェナス・ターデス（こんにちは）」と声をかけている先生方の姿が目に見えてくるようです。

本来、私たちの学習は「研修」として保障され、行政は、教職員の「こんな研修がしたい。」というニーズに応えられる学習の場を設定する義務があるはずですが、予算等の問題もあり十分とは言えないのが実態です。そのようななかで、教職員のニーズに応じた研修内容を、自分たちの手で作り上げたことは、私たちの教文研活動において、大きな前進と考えています。これからも、子どもを中心に据えた地域・保護者・教職員の様々な要望に応じられるような事業にとりくみたいと思います。

V.各研究委員会でのとりくみ

1.「地域文化研究委員会」

(1) 親と子で見る映画会

今年度で21回目をむかえる「親と子で見る映画会」が、平塚、秦野、伊勢原、中郡の4会場で行われました。親子のふれあいの場として、毎年夏休みに実施されるためか、年々参加者も増え、今年も三千名近くの親子で、各会場が賑わいました。

今年上映した映画は「ライオンツリーのうた」「パンダコパンダ」という作品でした。

毎年、反戦、平和を訴える作品を上映していますので、今後も、親子で平和の尊さを話し合える機会が持てるよう、よい作品を紹介していきたいとおもいます。



(2) 親と子による写生会

第18回「親と子による写生会」を、中地区、4会場で実施する予定でしたが、伊勢原会場だけは雨で中止となり、残念でした。

各会場では、夢中になって絵筆を動かす子どもたちや、それを見守り、共に絵筆を動かす保護者の方々も多く、夏休みの思い出の一枚になる楽しい行事の一つとなってくれればと願っています。参加者も、昨年を50名ほど上まわり、また、その作品のほとんどを12月22日から12月25日まで平塚市美術館「市民アートギャラリー」に展示し、とても充実

した写生会とすることができました。

今後も、より一層の内容の充実をはかり、「親と子のふれあい」をテーマに、地域に根付いた活動にしていきたいと考えています。

(3) 地域行事と子どもたち

地域行事と子どもたちとの関わりについて調査し、考察する活動を当委員会では5年間にわたり重ねてきました。来年度からは、月二回の学校五日制となる現在、子どもたちからの地域行事への関心や要望はとても高いものがあります。しかし、地域によっては、それに対応できる施設や機会が不足していたり、また行事を知らせるチラシも、きちんと、情報として子どもたちに伝えられていない実態がつかめてきました。

今後も、子どもたちにとって、よりよい地域行事やその伝達方法のあり方等を探り、活動を深めていきたいと考えています。

2. 「教育課程研究委員会」

(1) 人権・平和教育部会

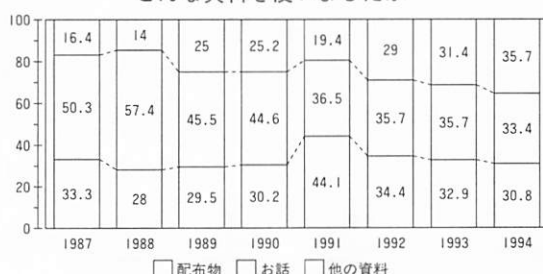
研究テーマに「人権」を謳って、4年目となる。本年度は、さらに「子どもの権利条約に学ぶ」というサブテーマを設定し、94年5月22日に発効した子どもの権利条約の学習に重点を置くことにした。その学習から得たものを地区教研の場で発表し、また、2月には本年度の学習の総括として実践学習会を開催した。

① 「7・5全県平和教育の日」の取り組み。

昨年度同様、本部会で平和教育の為に資料を作成・収集し、7月4日～8日に設定した平和教育週間での教育実践に役立てていただくため、全組合員にその資料を配付した。下のグラフは、そのときに行ったアンケートの集計結果の一部である。

週間内の平和教育に学年、あるいは全校をあげて取り組むなど、幅広い活動になってきたという実感はあるものの、アンケート回収率がここ3年で21～23%程度にとどまっているという事実から、一人ひとりの意識の高揚という面では行き詰まりを感じずにはいられない。

どんな資料を使いましたか



② 「子どもの権利条約」の学習成果を地区教研で中間報告

この条約を“どう読んでいくべきかを考える”という作業は、草の根運動のように各分会を中心に行われるべきものである。しかし、そういった取り組みを行っている分会は（少なくとも中地区では）ごく少数であるというのが現実であろう。昨年5月22日に発効したこの条約を、1条ごとの羅列ではなく理念として捉えることが、真に子どものための教育を実践していくことにつながると確信する。

そこで、問題提起という意味合いで、本部会が取り組んできた学習から得たものを、地区教研の場で発表した。

③ 教育実践学習会

2月1日に藤沢市立滝の沢小学校の名取弘文先生を招き、「子どもの権利条約」という演題で講演していただいた。



名取先生の教育実践を背景に、権利条約が何を意味しているのかを、非常に分かりやすい表現でお話いただいた。ときには我々に対する鋭い問題提起をされ、それを通し、いま我々が考え、実践していくべきことは何なのかということを教えていただいた。また、生徒の作品に現れた具体的な現象から、教師が子どもたちをどういった観点で見つめていくべきかも伺うことができた。

(2) 算数・数学科部会

今年から新設された「算数・数学科部会」は、小・中学校合わせて8名の研究員でスタートした。何もない白紙の状態からのスタートだったが、話し合いはまず、小・中学校での教科実践における、お互いの情報交換から始まった。

「算数・数学嫌いの子をなくすには?」「算数・数学という教科の意義?」など本音で意見を交わしながら、研究テーマ設定へと、向かっていった。最初は小・中の教師がいっしょに研究するので、小・中での学習内容の系統性をテーマにし、学習につまづいてしまった子の指導に役立てようと考えた。しかし、このテーマは2年間という短い期間では机上の空論だけに終わってしまい、実践にまで発展しないことに気付いたのである。

そこで、もう1度原点にもどり、子どもの「生きる方」を伸ばすこと、つまり算数・数学という教科の魅力を考え、その単元のその授業でどれだけ多くの子どもに成就感・達成感を持たせるかということに焦点をあて「子どもたちが成就感を持てる授業づくり」というテーマを設定し2つの授業実践を行った。

子どもたちひとりひとりが何らかの形で参加でき、存在感の感じられるような工夫として、グループ学習・発表会形式の授業を試みた。相互評価も取り入れることにより、さらに授業は活性化された。一方、算数・数学の楽しさを「できるようになること」ととらえ、分かりやすい授業づくりの手だてとして、子どもたちが見通しを持って取り組めるように、学習の手順を明確にした。また、全体としての到達目標と個人の到達目標の両方を設定することによって、より多くの子どもたちが満足感や、成就感を持つことができた。

今後は、分かりやすさが楽しさを生むような授業づくりをめざし、さらに工夫や手だてを考えていきたい。

(3) 英語科部会 テーマ『子どもの表現力を伸ばすには?』

国際化を本格的に迎えた現代日本社会において、英語教育が担う役割がより重要視されるようになりました。そのような中で、各英語教員がかかえている課題も多く、その解決策を見出すための場として本部会を発足しました。

今年度は、部会でのテーマ設定を目的とし活動してきました。「AETとのチームティーチングについて」や「観点別評価について」という話し合いをしてきました。

部会を重ねるにつれ、一斉授業の枠組みの中で、「生徒一人一人に会話能力をつけさせるにはどのような工夫が必要なのか」という方向性が見えてきました。

最終的に、外国語教育においては、コミュニケーション能力を高め、積極的な姿勢を養うことが今後重視されることを考慮に入れ、上記のテーマを設定することに決定しました。

今までのところ、生徒一人一人に「表現すること」への意識や興味・関心を持たせるためのプリント類や話題の投げ掛けについてや、生徒相互間の会話練習での場面設定の工夫について話し合いを進めてきました。今まで培ってきた各自の取り組みについての情報交換は、大変有意義なものであったと思います。

今後の活動内容としては、このテーマについてさらに話し合いを行い、各教員の実践を通じて、より明確な解決策を見出し、生きた英語教育の実践を目指していきたいと考えています。

3. 「授業行事づくり研究委員会」

私たち授業行事づくり研究委員会は、少人数ながら毎月集まり、各々の教育実践の中で、気づいた事、工夫した事や学んだ事を提供しあい、研究をしています。特に、五日制に絡み行事が精選と称して極端に削減されたり、おぎなりの物となっている現状。また、いじめや自殺がセンセーショナルな形で取り沙汰されているが、それらは実は、子どもたちが抱えているもっと大きな問題点が、この様な形で表面に現れたに過ぎず、真の問題点を、もっと科学的にきちんと把握し、対処すべきである事。そして、それらの事への対応を、私たちが、微力ながらも自分たちなりに図ろうとした時、小中連携を前提に現在の教育環境の中で、どう行事・授業を作り上げていったらいいか、それを探ろうとしています。

前年度までの研究実践の中から、私たちの、児童・生徒の育ちや状態について語り合う時の表現し形容する言葉が貧弱で、ニュアンスも微妙に異なる事に気づきました。そこで、今年度は、カウンセリングのロージャズ、あるいは、アイデンティティーとライフサイクルの理論のエリクソンを、勉強し「言葉の共通感覚」を作りだそうとしました。それは同時に、言葉足らずでなかなか理解して貰えなかった私たちの、現状認識や、理念、“授業や行事をなぜその様に実践していこうとするのか”を他者に述べる時の強力な道具となるだろうと考えました。

このような取り組みの中、大山美根子氏に出会いました。氏は、問題を持つ子どもたちとその親にアドバイザーとして関わられ、多くの実践経験をお持ちで、所属される神奈川県児童医療福祉財団小児療育相談センターは、市町村と提携し、子育て中の母親へのボランティアな援助をしているのです。大山氏は、その子育てアドバイザーの一人であられるわけです。教育畑以外の方のきちんとした理論に基づく豊かな経験を伺う事は、とても勉強になる事であると感じました。来年度も、ぜひ、継続したいと思っています。その席で、私たちのこれまでの考えも吟味して頂こうと考えています。そこから、授業行事づくり委員会として、みなさんの教育実践に参考にして頂ける物が、提供できそうな予感がします。

さて、難解といわれるエリクソンの理論、もとより短時間の学習しかしていない私たちでは、堂々とここに書けるほどの内容などあるはずありませんが、暗中模索と言っているような状態の中で今日まで学び、自分たちなりに考えた事を、もし、間違ったところがあるならば、広くお教え頂き、より学習が深まる事を願ってご紹介させて頂きます。

人の精神の発達、ピラミッドのように一番下の土台から順に上へ上へと積み重ねられていきます。したがって、ある時期に吹き出した問題は、それ以前の土台が補修されない限り、解決しないという事になります。という事は、その時点々々で、きちんと発達課題を成就できるように保障する事と。それ以前の未了の課題を事前に発見し補う作業が必要となります。我々は、この発達課題の成就・未成就を感じ取るセンスを掴む必要があるのではないかと思います。

特に、今問題視されている事どもの中で、自己の存在に関する感覚がおかしくなっている、更に、その上位である自他の関係がおかしくなっている事が指摘できると思います。それは、乳幼児期に自然に形成されるべき、基本的な信頼関係に躓きがある事が見えてくると思われます。それを、授業や行事の中で補える様になれば良いのですが…

4.「障害児教育研究委員会」

今年度は、「共に生きる手だてを求めて」のテーマのもと、教育懇談会・教育研究集会を通して、研究を進めてきた。

(1) 主な活動内容

A 障害児教育懇談会

7月7日、平塚市教育会館で第18回障害児教育懇談会を「共に生きる手だてを求めて」のテーマで開催した。多数の保護者・教職員・施設関係者・介助員等の参加を得ることができた。

今年度は、「学校生活での悩み」「進路の問題」の分科会の他に、今回初めて障害のある子どもが通常の学級に在籍する場合を視野にいれて「通常学級でのとりくみ」という分科会を設定してきた。参加者が、少なかった面はあるがこれからも継続していくべき分科会であると思われる。各分科会とも、保護者がよく学習されているということもあって、話し合いの質は着実にレベルアップしてきている。それだけにアンケートに記された「不満のぶつつけあいにおわるのではなく、親・教師の意見を行政に訴えて欲しい」という言葉に象徴される。具体的な解決＝実りが欲しいという機運の高まりが感じられた。

来年度からは、一地区会場開催から、さらに会場を増やして、保護者・障害児学級担任及び通常学級担任が参加しやすい体制を作り、障害児教育懇談会のさらなる発展を願っている。

B 教育実践学習会

昨年度に引き続き「創造性を育てるムーブメント教育」を12月5日に永松裕希氏を講師に迎え開催した。昨年は「ムーブメント教育」の理論を学習し、今年は、遊具を使って実際に体を動かして「ムーブメント」を体験した。

(2) 今後の課題

障害児教育研究委員会の活動が、障害児学級とその担任だけからの問題提起から、通常学級の担任が委員会に加わったことにより、通常学級で生活する障害児の問題や通常学級担任からみた障害児学級等のことが話し合われた。今後も、多くの通常学級の担任が加わり、交流していく必要がある。

VI. 教文ライブラリー

中地区教育文化研究所では、創造的な教育文化活動を推進するために、ビデオテープ・16ミリフィルム・書籍・パネル・スライド・カセットテープ・CDなどの資料の充実をはかっています。94年度は、人権教育を中心にビデオソフトを購入し、その充実がはかられました。

これらの資料は、要望に応じて貸し出され、日常の授業はもとより、学習会・教育懇談会や各種団体、地域の人々に広く活用されています。

＜中地区教文ライブラリー 所蔵フィルム・ビデオテープ（抜粋）＞

◎平和教育関係

◆ビデオテープ

- ・「子どもの人権条約」を子どもへ！
- ・中学生激論ドラマ いじめ
- ・新ちゃんがないた！
- ・友子よ晴れない霧はない
- ・ペロ出しチョンマ
- ・みんなで考える部落の歴史 全3巻

◆16ミリフィルム

- ・アパルトヘイトの子どもたち
- ・さくらんぼ坊や 2・4
- ・海のコウモリ

◎環境問題関係

◆ビデオテープ

- ・それでもあなたは食べますか
- ・自然の中の人間
- ・NHK特集 地球汚染 1・2
- ・NHK調査報告
チェルノブイリ原発事故

◆16ミリフィルム

- ・なっちゃんのケヤキ

◎平和教育関係

◆ビデオテープ

- ・ドキュメント 日中戦争
- ・黒い足跡
日本は中国で何をしたか
- ・夏服の少女たち
- ・ほたるの墓
- ・ヒロシマから子どもたちへ
- ・黒い雨にうたれて

◆16ミリフィルム

- ・トビウオのぼうやはびょうきです
- ・雨はやさしく
- ・核戦争

◎その他

◆ビデオテープ

- ・AIDS その正体と予防
- ・運動会・輝け！応援リーダー
- ・教科書裁判
- ・受胎 THE MIRACLE OF LIFE

◆16ミリフィルム

- ・子ども達へ
- ・べっかんこ鬼

西湘教育文化研究所のとりくみ

西湘地区教育文化研究所（教文研）は、『西湘の教育・文化活動を発展させると同時に、県民の立場に立って、民主教育と文化を確立するために設置された神奈川県教育文化研究所の事業を西湘地区で推進することを目的とする』としています。西湘地区教育文化研究所では91年に組織改革を行い、専任所員を置くとともに運営規定を明文化しその取り組みの活性化を図ってきました。

教文研は目的に、「地域に開かれた」ものであることを掲げています。94年度もこのことを念頭に置き、地域の方たちの多くの参加を得られることをめざして、運営に当たってきました。

1. 事業の概要

1) 親と子のよい映画を見る会

7月28日、「第21回親と子のよい映画を見る会」を小田原市民会館において開催し、共同映画製作の「蒼い記憶」と「3丁目物語 タマ&フレンズ」を上映しました。

今回の上映では、多くの人に鑑賞してもらうために情宣を強化しました。また、今回も近隣の養護施設への招待も行い、「城山学園」と「小田原ゆりかご園」から参加がありました。この結果、今回の映画会は約1100名の鑑賞者を得て盛況の中、開催することができました。

「蒼い記憶」は、敗戦による混乱で数々の悲劇をうんだ「満蒙開拓青少年義勇軍」を初めて描いた作品です。鑑賞者からは、今までにない程の感想が寄せられました。その多くは、「感動した」、「戦争について再認識した」といった内容でした。また、鑑賞者の中に、実際に「義勇軍」に参加された方がいて、「こういうようにありのままを多くの若者に見せてあげて下さい。」という感想をいただきました。

映画『蒼い記憶』を観て

西湘地区教育文化研究所 専任所員 飯田耀子

「満蒙開拓青少年義勇軍」については、余り知られていません。この映画は満州建国により、「満州に行けば十町歩の地主になれる」・「満州は日本の生命線」・「東洋平和の礎を築く」と宣伝し、1936年（昭11）に満州移民20か年で100万戸送出するという国策の決定のもとに、文部省の指示で各国民学校（小学校）に割り当てをして1945年まで約10万1千人以上の者が渡満した少年達の悲劇です。

この映画の主人公少年達の出身は長野県で最も供出の多い県でした。貧しい農家の14才の少年達（恭太・順平・勇介）は教師のすすめを信じ、自分の土地をもてる。八紘一宇（はちこういちう 天皇の政治を世界に広め全世界を一つの家族のようにする）・五族協和（満州に住む五つの民族が心を一つにして仲良くする）・王道楽土（天皇が国土・人民を

第21回 西湘地区親と子のよい映画をみる会

監修 出崎 哲
製作 西湘地区映画製作委員会
配給 共同映画全国・会館

大地の果てまで
満蒙開拓と少年たち

長編アニメーション映画
満蒙開拓と少年たち 蒼い記憶
あおいきおく

製作 山岸吉吉 出崎 哲 野原昌一郎 企画 石井雅彦

戦争を知らない子どもたちへ！ 今こそ伝えたいこの感動を！
—「なにがなんでも日本へ帰らなさい！」
なぜ日本人が中国で……少年たちが見たものは—



（長編アニメーション映画）
蒼い記憶
満蒙開拓と少年たち

ものがたり 今から50年前、日本の軍隊が中国と戦争をしてい
たころ、日本の少年たちも、軍国少年の意気に燃え、
先生たちがすすめる「満蒙開拓青少年義勇隊」として
中国へ行きました。

昭和19年（1944）、長野県小の小さな村のガキ大将・
恭太も中国へ行くことを決意します。この戦争が正
しい事とおしえられた恭太は、理想の国をつくる
希望に燃えていたのです。しかし、戦をまわっていた
のは零下40度にもなるさびしい自然。そしてつらい
労働と軍事訓練でした。やがて敵艦、恭太たちは食
べ物もなく、必死で逃げまわらざるを得ない……
「中国戦況激変の悲劇はとうとう生まれてきた。戦
争とは何だったのかを考えさせられるアニメーシ
ョンです。」

7月28日 木 夏休み
小田原市民会館 大ホール
10:00-11:50 1:30-3:20

同時上映
37歳物語
「あまつり」の夜
3丁目大運動会
もろちんのすずとあまのついでに「あまのついで」

主催 西湘地区教育文化研究所
お問い合わせ ☎ 0465 (35) 1771
共催 西湘地区教職員組合

入場整理券

当日この券を受付にお出し下さい。
この券1枚で6名様まで入場できます。

※入場料の返金は入場券の領収書にのみおこなわれます。

お名前	学年	性別
おなまえ		
ごらんになられる何人ですか？ 合計	人	

※ごらんになられる方からごらんになった方までお名前を記入して下さい。
※お名前がごらんになられる方と一致しない場合は、受付にお出し下さい。

道義をもって治められる楽しい土地にする」というスローガンを訓練所で教育され、大きな夢と希望をもって満州に渡りました。そこはソ連との国境に近い寒暑の大きい大陸性気候であり、荒漠たる原野を開墾して作物がやっと収穫できる前に少年達は鋤を剣にもちかえさせられ、北方の警備の訓練の毎日でした。関東軍の予備軍にされていました。これが本来の目的であったのです。その土地は中国人から略奪したものであると聞き、愕然とします。8月9日ソ連軍の侵攻により避難生活が始まり、15日の敗戦も知らず、更に日本軍に見捨てられて開拓民と逃亡を続けます。やがてソ連軍に包囲され、収容されます。老人は自決を選び、寒さ・飢え・伝染病で多くの女・こどもは命を落します。また、お互いに励まし合って生きのびてきた友達の順平・勇介も死にます。恭太の「必ず生きて帰る、待ってろよ」と親友健次への叫びはまだ耳に残っています。

私の友人にも満州から頭を丸狩りにし男装して逃がれ、やっと乗った船中で母を栄養失調で亡くした人もいます。

この映画の題名「蒼い記憶」は純粋で夢を持った少年達を日本が行った満州侵略行為に追いやってしまった「忘れてはならぬ記録」としてとらえたいと思います。

この映画は私に多くの思いを残しました。逃亡中、幼い子を乳や食べ物を与えられないので中国人に預けた母親の心情、その子達がいま、中国残留孤児として親族を探し求めて来日しても、再会でるのは微少です。エンディングに流れる「もずが枯れ木で」の歌はこの映画の主人公達への家族の切ない思いが伝わります。

ラストシーン共に辛苦を味わい、可愛がった少女を背負って線路を歩き続ける主人公恭太が無事帰国できたことを願うのみです。

また、教師になるために日本に残った親友の健次と再会し、戦争とこれからの生

をどう語り合うのでしょうか。教師になった親友の健次が戦時中の本土空襲・学徒勤労動員のようすや恭太達の体験をぜひ教えて欲しい。

この映画は観ていた子ども達の感情を大きくゆさぶったようでした。親子で語り合えるし、クラスで共通の話題にして欲しい内容でした。しかし、観客の中で教師が少なかったのは淋しく、非常に残念に思いました。

1月14日、「第22回親と子のよい映画を見る会」を小田原中央公民館において開催しました。につかつ配給のアニメ映画「がんばれ！エドモンド」を上映し、約300名が鑑賞しました。

映画は、悪い魔法使いによって子猫に変えられてしまった主人公が、人間にもどるために仲間といっしょに冒険の旅に出るという話です。幼児や小学校低学年が中心の鑑賞者からは、「おもしろかった」「人間にもどれてよかった」などという感想が寄せられました。今回も、西湘地区の各養護施設への招待を行い、「小田原ゆりかご園」から約30名の参加がありました。

2) 教文研講演会

＜第1回＞『日本の戦後補償を考える！』

～レイエスさん（フィリピン元「従軍慰安婦」）の話を聴く会～
10月22日、小田原尊徳記念館で開催し、68名の参加がありました。

フィリピン「従軍慰安婦」補償請求裁判弁護団の高木健一氏の講演、フィリピンの支援運動体「リラ・ピリピナ」のモンデハルさんの現状報告に続いて、レイエスさんから自分が受けた過去の体験について話がありました。

地域の方を含めて多くの方に参加してもらえるように各分会へのチラシ配布、「タウン・ニュース」「神奈川新聞」への記事掲載、地区労傘下への呼びかけ等を行いました。

参加者の感想から

◆ 半世紀も前に体験したことを、鮮明に証言して下さったレイエスさんの勇気に感動いたしました。初めて、このような体験談を聴き、もっと他国（朝鮮、旧ビルマ、シンガポール、中国、etc）の元慰安婦のお話を聴く機会があったらと思います。残念なことは、参加者が少なすぎると思います。マスコミでもPRしていましたから、中学・高校生も参加して大人と共に、戦争について考えて欲しかった。今後の希望です。レイエスさんのご多幸をお祈り致しております。

◆ 小田原での企画、ありがたく思っています。本当に私たちは戦争について、知らされていないと思います。湾岸戦争以来、学習（積極的に）と運動を展開してきましたが、勉強すればする程、知らなかったことの多さに驚きます。ベロニカ・モンデハルさんが普遍的な人権の問題とおっしゃってましたが、本当にそうだ

と思います。

まがりなりにも民主主義国家になった現在、政府を動かすのも民衆なんだろうのです。だから、私たち一人ひとりの心や行動によって動かしたいと思います。

それから、教育って、すごく大事だと思います。かくそうとする政府があっても、大衆レベルの普及教育が力をもっともっといいと思うのです。

◆ 本当の子とを常に知りたと思っていました。日本の政府が発表することではなく、何があったのか、一国民として知るべきだと思っていました。もっと多くの人がきて、聴いてほしかった。今日聴いたこと、友人に話したいと思います。

◆ 私が、S20年春、芦別のタコ部屋にいた頃、同じ職場に強制連行で連行されてきた中国人（戦後知った）は毎日数人が死んでいった。日本人も毎日死んだ。昼働いて、その夜に死ぬのである。三井芦別はこのように発掘が進み、大炭鉱になったのである。北海道は、枕木1本に人一人と言われるぐらい犠牲者を出した。

国内でも、このようなことを平気で行った支配者が、外国でどのようなことをしたか想像はつく。このような民族をつくった天皇制にメスを入れなければ、このことはなくなれないと思う。

「朝鮮時報」が届くので、従軍慰安婦のこと、強制連行のことは自分経験と合わせてよく認識しておりますので、このような会を催していただいてありがとうございます。お礼を申し上げます。唯、人が少なかったのが残念です。

☆日本軍は「天皇聖武親臨」という題目を掲げつつ、その東アジアに対する侵略戦争としての本質を有しており、補給が軍兵種以外に充分でなく現地調達を原則としたため、食糧、居住用建物その他の物資を軍需によって調達し、愚劣的略奪が横行した。↓

私たちに 大切なことは

ほんとうのことを知ること

私たちは 知ろうとしてきたか

ほんとうのことを！

戦後研究演説会 第1回

◇「平和教育ハンドブック」

◇「語り継ぐ歴史 第3巻」

『日本の戦後補償を考える！』

～レイエスさん（フィリピン元「従軍慰安婦」）の話を聞く会～

お講師 高木 健一氏（作家）

お話し フェリシタット・レイエスさん

リラ・ペリビナ（フィリピンの運動家）の方

※1994年10月22日（土） 13:30受付

※小田原市福祉記念館 講堂 14:00開会

☆そして、被爆者たる日本軍の犠牲は計り知れず、古くからのフィリピン女性の被害とそれに続く闘い込みが行われた。☆フィリピン「従軍慰安婦」が多数つくり出されたのである。☆高木健一氏「戦後補償の論議―被害者の声をどう聞くか―」より☆

◇高木先生には、昨年度も日本の「戦後補償問題」について講演をしていただきました。

今年は、「従軍慰安婦」補償請求訴訟の公開（21日東京地裁）のために日本を訪れるレイエスさんのお話を聞くことにしました。

レイエスさんは17日から27日まで滞在される予定です。その間、東京、大阪、小田原、名古屋で集会が行われます。

◇高木先生の講演（30分）

リラ・ペリビナの方のお話（30分）

レイエスさんのお話（60分）の予定です。

ぜひ、フィリピン「従軍慰安婦を支援する会」

へのご協力をお願い、高木先生の講演の紹介を

します。

ぜひこの講演会は、入場無料で自由に入場できます

が、満員（200名）になった場合は、入場を

お断りすることがあります。

※お問い合わせは、下記研究所（担当：藤原利恵）へ

西湘地区教育文化研究所 総務課 山崎 0465-35-7711



<第2回>『近くの国々の文化を知ろう！～韓国生活習慣と風俗について～』

裴 重度氏 (川崎市ふれあい館館長)

12月1日、小田原労働センターで開催し、32名の参加がありました。

近くの国でありながら、その文化や風俗について知らないことが多い点に視点をあてた講演をお願いしました。裴 重度氏は、日本生まれの在日韓国人2世で、「民族差別と闘う神奈川連絡協議会(民闘連)」の代表等を長く務めて来られた方です。夫婦の姓のこと、法事についての風習の違い、国・親に対しての「忠」「孝」の考え方の違い、食習慣についての日本人の誤解など、ユーモアも交えた分かりやすい話でした。



<第3回>『エイズ教育のすすめ方～体験的「エイズ教育」実践論～』

近藤真庸氏 (岐阜大学教育学部助教授)

1月25日、小田原市保健センターで開催し、165名の参加がありました。

数々の学校において、実際に実践してきた授業の経験を中心に講演は進みました。その中から、「ライアン＝ホワイトを主人公にした話」を実際の授業で行った通りに、講師が一人八役で話をされました。免疫について、小学校の児童にも分かりやすい説明であり、また、感動的に語られていたので、会場からは「すぐに授業に役立ちそう」「今度、授業でやってみようかな」等の声が聞かれました。

また、いまだに教師の中にエイズについて誤解があることも指摘されました。何も知らない児童に誤解したままで話をすれば、そこには必ずHIV感染者への差別が生まれること、『HIV感染者と共生してほしい』ことを話されました。

<第4回>『運動生理からみた健康法』 畑佐茂喜氏 (厚生大臣認定健康運動指導士)

2月21日、小田原労働センターで開催し、81名の参加がありました。

講師は、運動生理学、運動栄養学や温泉医学などが専門で、一般企業や学校等で数多くの講演や講義を行ってきた方です。この経験をもとにした、「健康に必須な3種類の運動」「3種類の運動の生理効果」「3種類の運動の仕方」の3つの観点から話が進みました。3種類の運動とは、「持久性運動」「筋力トレーニング」「ストレッチング」のことです。インストラクターの実演を含めた講師のわかりやすい話により、会場の参加者は熱心に聞き入っていました。



<第5回>『鳥が教えてくれること』 浜口哲一氏 (平塚市博物館学芸員)

2月28日、小田原労働センターで開催し、93名の参加がありました。

講師は、野鳥をはじめとした動植物の生態についてたいへん詳しい方です。講演の内容は、カワセミの生態を例に「鳥を守ること」が「環境を守ることにつながる」ことや、

「野鳥とのつき合いを深めること」が「地域とのつき合いを深めること」になることでした。また、学校では、先生自身が鳥と親しむ楽しさに気付いて熱中することが、子どもを熱中させることにつながることもふれました。

酒匂川などの近隣の河川や学校の周辺で見られる野鳥を例にあげての講演は理解しやすく、会場の参加者は熱心に聞き入っていました。

3) 教文研実技講座

<第1回>『つくってみよう！ 自分の飯碗（陶芸教室）』 中里浩子氏（陶芸家）

上記講座を、9月11日、18日、10月16日の3日間、中里浩子氏の工房で開催しました。20名募集のところ、42名の応募があり、抽選で参加者（21名）を決定しました。昨年度の陶芸教室は1日のみで、粘土による成型のみでしたが、今年度は全3回とし、①粘土で成型、②高台の削りだし、③絵つけの順に講座を行いました。どの参加者も、講師の熱心な指導に耳を傾け、一生懸命に飯碗づくりに励んでいました。

参加者からは、「作るのが大変だったが上手にできてよかった。御飯を食べるのが楽しみ」「先生の熱心な指導に感謝している。また参加したい」などの感想が寄せられました。

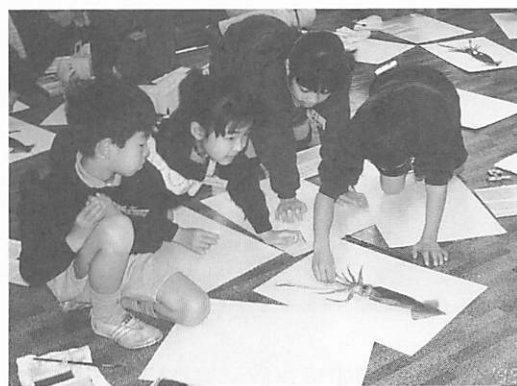
<第2回>『運動生理から見た健康法』 畑佐茂喜氏（厚生省認定健康運動指導士）

上記講座は、11月12日、19日、26日の3日間開催の予定でしたが、中止となりました。

<第3回>『楽しく描こう！「絵画教室」』 松本一郎氏（キミコ・プラン・ドウ）

上記講座を、2月5日、19日、3月19日の3日間、西湖地区教育会館で開催しました。

小学校1年生以上25名募集のところ、43名の募集があり、抽選で参加者（26名）を決定しました。キミコ方式は、3原色と白の絵の具だけを使って自分の色を作るなど、独特の絵の描き方をさせます。「色づくり」「いか」「いちご」をテーマに行いましたが、どの参加者も回が進むに従って、自分なりの色を作ることができるようになり、「いか」「いちご」を個性的に描くことができていました。



4) 平和教育ハンドブック、「語り継ぐ言の葉第3集」の発行について

西湘地区教育文化研究所「平和教育推進委員会」編集による「平和教育ハンドブック」が発行しました。1992年11月より編集を開始し、2年の歳月をかけて完成しました。平和教育の基本的な考え方を初めとして、平和教育の各領域について教育実践に役立つよう詳細に記載してあります。また、巻末には、日常化にむけて「平和教育カレンダー」が掲載され、教文研ライブラリーの紹介もしています。

また、西湘地区教育文化研究所「言の葉編集委員会」編集による「語り継ぐ言の葉第3集」が発行されました。第2集の発行以来約9年ぶりに、約4年の歳月をかけて完成しました。第1部には、市民・教師の戦争体験が記載され、第2部は「問いなおそう現代と過去を」と題して資料編となっています。特に、第2部の資料編は、授業実践の中で教材として有効に利用できるような作ってあります。

私たちは、「教え子を再び戦場に送るな」をスローガンに平和教育を推進してきました。戦後50年を迎えますが、子どもたちに戦争の悲惨さを教えていくとともに、平和を築いていく主体者としての育成をめざした平和教育の実践が重要となります。そのためにも、この2冊の冊子を活用し、平和教育の日常化をはかり、充実させていく必要があります。

5) 教文研ライブラリーの貸出し・その他

ビデオソフト、16mmフィルム、スライドフィルム、書籍、平和教育用写真パネル、視聴覚機器等の貸出しも行っています。94年度は、ビデオソフト、平和教育用書籍を中心にライブラリーの充実を図ってきました。

ビデオソフトライブラリーの充実については、授業実践に役立つ平和・人権・環境・保健教育用のビデオソフトの購入を中心に進めてきました。また、多くの人が利用しやすくするためにディズニー作品などの子供向けマンガビデオソフト、動植物の生態を描いた自然科学ビデオソフトなどの購入も行ってきました。現在、教文研のビデオソフト所蔵本数は約600本となっています。その結果、貸出し本数は、のべ約1300本（前年度は700本）となり、2年連続で利用度が飛躍的に増しました。

平和教育用書籍の充実については、教文研が「平和教育の日常化・充実」の補助的役割を担っているという観点から進めてきました。原爆を含む太平洋戦争関連の書籍を中心に購入を進めてきました。また、西湘地区の太平洋戦争に関わる写真パネルの制作も行ってきました。

6) 今後に向けて

今後も、地域に開かれ、平和と人権に根ざした活動をめざし、県教文研や各地区教文研と連携を図る中、地域保護者と連帯した運動を進めていく必要があります。そのためには、機会あるごとに教文研の活動を地域の方たちに紹介していくとともに、一人ひとりが講演会、講座等の教文研事業に主体的に関わる体制をつくっていくことが重要です。

西湘地区

教育文化研究所

教研だより

95. 3. 22

No. 4

西湘地区教育文化研究所の発展に向け、

皆さんのご意見を！

今年度も、「西湘地区教育文化研究所」の事業に対してのご理解・ご協力ありがとうございます。今年度行った「教研だより」の主な事業についてお知らせします。

来年の事業の拡充に向けて、是非、ご意見をお寄せ下さい。

戦後五〇年を 迎えるにあたって

平和を築く主体者の育成を
「平和教育ハンドブック」
「語り継ぐ昔の集第3集」
を發行！

一〇月、「平和教育推進委員会」編集による「平和教育ハンドブック」を發行しました。九二年一月より編集を開始し、約二年の歳月をかけて完成しました。平和教育の基本的な考え方をはじめとして、平和教育の各領域について学校現場での教育実践に役立つよう詳細に記述してあります。また、巻末には日常化にむけて「平和教育カレンダー」を掲載しました。教研ライブラリーの紹介もしています。

また、同時に「昔の集編集委員会」編集による「語り継ぐ昔の集第3集」を發行しました。第2集の發行以来約九年ぶりに、

約四年の歳月をかけて完成しました。第1部には、市民・教師の戦争体験を記載し、第2部は「聞いてなおそう現代と過去を」と題して資料集としました。第2部の資料集は、授業実践の中で教材として有効に利用できるように作りました。

九十五年は、戦後五〇年を迎えますが、これからも、子どもたちに戦争の悲惨さを教えていくとともに、平和を築いていく主体者としての育成をめざした平和教育の実践が重要となります。そのために、この二冊の冊子を活用し、平和教育の日常化をはかり、充実させていきましょう。

「蒼い記憶」に感動！
*一〇〇名が鑑賞

七月二十八日、「第二回親子のよい映画を見る会」を小山

「平和教育用写真パネル制作中」

教研が「平和教育の日常化・充実」の補助的役割を担っているという観点から、西湘地区の太平洋戦争に関わる写真パネルの制作を行っています。学校現場での教育実践の中で、あるいは、地域での学習会などで役立つことと思います。

*詳しいことは教研までお問い合わせ下さい。

教研ライブラリーの貸出し

教研では、ビデオソフト、16mmフィルム、スライドフィルム、書籍、平和教育用写真パネル、視聴覚機器等の貸出しも行っていきます。94年度は、ビデオソフト、平和教育用書籍を中心にライブラリーの充実を図ってきました。

ビデオソフトライブラリーの充実については、授業実践に役立つ平和・人権・環境・保健教育用のビデオソフトの購入を中心に進めてきました。また、多くの人々が利用しやすいためにディズニー作品などの子供向けマンガビデオソフト、動植物の生態を描いた自然科学ビデオソフトなどの購入も行ってきました。現在、教研のビデオソフト所蔵本数は約600本となっています。その結果、貸出し本数は、のべ約1300本（前年度は700本）となり、2年連続で利用度が飛躍的に増しました。

☆94年度購入のビデオソフト一覧表を分会に配布しました。

※希望者に販売しています。
「平和教育ハンドブック」
一〇〇〇円
「語り継ぐ昔の集第3集」
七〇〇円
☆第1集・第2集もあり
ます

ポスタープリンター

『かくだいくん』を購入！

☆A4サイズの原稿をA0、A1、A2に拡大できます。
☆組合に関わることでの利用は無料です。
☆地図・グラフなどの拡大に最適です。

全員配布

西湘地区教育文化研究所 所長 山崎幸典 ☎0465-35-1771

III

研究論稿

日本社会のあり方を問う外国人参政権問題

研究評議員 宮 島 喬



関心は高まったが……

朝日新聞が1994年2月、在日韓国・朝鮮人への地方参政権を認めるか、認めないかという世論調査を行った。もちろん全国調査としては初めてである。その結果は、「容認」47パーセント、「反対」41パーセントと出ている。筆者にまず印象ぶかく感じられたのは、意外にD.K.(分からない)という答えが少なかったことである。こういう質問がぶつけられて、「在日の人たちには選挙権はなかったのか?」とびっくりする人や、「むずかしくてよく分からない」と戸惑い、答えを控える対象者がそう多くなかったということである。今から5年ほど前のことをふりかえると、時の流れを感じる。当時、関東の大学生などのなかでは、在日韓国・朝鮮人が選挙権をもっているのかもっていないのか知らないと答える者が、3割はいたものである。

定住外国人の参政権の問題は、ここ1、2年で確かに広く知られるようになった。大阪に住む定住イギリス人ヒッグス・アラン氏の1989年の訴訟もあるが、やはり在日の人々が動きだしたことのインパクトは大きかった。その一つが大阪市に住む金正圭氏ほか9人の在日韓国人の行動で、かれらは選挙人名簿に自分たちが記載されていないことを不当とし、1990年9月選管に異議を申立てたが、却下。この却下の取消しを求めて大阪地裁に提訴したのである。ここでも請求棄却となったが、この辺りから支援の輪が広がり、一般日本人のなかにもこれを知り、共感を寄せる市民たちが増えてきた。特に大阪を中心とする関西では、これはかなり知られる運動となっている。在日韓国人の組織である在日本大韓民国居留民団が、94年3月、「居留」の二文字を削り、いわば定住集団としての宣言を行い、参政権など日本社会への参加の権利の獲得を運動の前面に掲げるようになったことも、広いバックの動きとして重要である。

しかも、地方自治体のレベルでは、93年秋頃に始まって、優に100を越える議会が定住外国人の地方参政権要求を支持する決議を行っている。予想外といえるほどの早い動きである。

そして、金氏らの上告にたいし、95年3月1日、最高裁が、主文では原告敗訴の形となっているものの、注目される画期的な内容をももつ一つの判決を下した。同判決は、「憲法が権利として外国人の選挙権を保障しているとはいえない」と、原告の請求を退けながら、一方で「定住外国人に法律によって首長や議員の選挙権を与える措置を講じることは、憲法上、禁止されていない」と述べたのである。

憲法解釈、ドイツと日本

1990年10月、西ドイツ（当時）のカルルスルーエの憲法裁判所は、ハンブルク市とシュレスウィッヒ・ホルシュタイン州の議決した外国人地方参政権にたいし違憲の判決を下した。特にハンブルク市（州と同格）はトルコ人など多数の外国人人口を擁し、市政の円滑な運営のために、かれらへの参政権付与を必要と判断したのだ。憲法裁判所の判決の採用したのは、基本法20条2項の「すべての国家権力は“フォルク”より生じる」の言う「フォルク」とは、「ドイツ連邦共和国国民」を指すとし、さらに同28条（市町村自治に関する部分）における選挙権者を指す「フォルク」も同様である、という解釈だった⁽¹⁾。フォルク（Volk）という言葉は、使われる文脈によって「国民」とも「民族」とも「民衆」とも解することが可能な語であって、この点で、英語の「ピープル」の語義の広さとよく似ている。憲法裁判所の解釈はこれを、「ドイツ連邦共和国国民」と確定し、外国人は含まないとしたわけである。なお、この判決の前に外国人選挙権推進勢力は意気阻喪してしまったわけではない。むしろこれを契機に、基本法の改正の必然性がはっきりした、として社会民主党などは28条の改正を早速議論しはじめている。

さて、これと対比すると、日本の場合は構図が少しちがっている。「国民主権」（第1条）がうたわれ、公務員の選定と罷免は「国民固有の権利」（第15条）とする規定が一応これに整合している。だが、同じ日本国憲法の第93条は次のようにうたっている。「地方公共団体の長、その議会の議員及び法律の定めるその他の吏員は、その地方公共団体の住民が、直接これを選挙する。」ここには「国民」という語は登場しないし、ちなみに地方自治法のなかでも、「住民」とは、単に「市町村の区域内に住所を有する者」（第10条）とされている。ただし、同法では、第11条、第12条、第13条の選挙権、直接請求権を規定した部分（つまり地方参政権にかかわる部分）では、「日本国民たる普通地方公共団体の住民」という文言により、国籍による制限が付されてくる。

それゆえ、総じて憲法、地方自治法ともに、地方自治体の運営においては日本国民としからざる者をクリアーカットに分けるという発想は弱く、国民主権が市町村のレベルまで一本で貫徹しているとは解釈しにくい。むしろ憲法93条では、「住民主権」とでも言いうる観点が押し出されているのであり、この点が重要である。そして、憲法が、地方自治法（この場合、11、12、13条）よりも規範として優先することはいうまでもない。

その点からみると、最高裁判所の判決は、歯切れが悪く聞こえるが、上の全体を考慮したものだろう。その論理はこうであろう。憲法93条があるからといって、在日外国人の首長や議員の選挙権がただちに当然に保障されるわけではない（だから請求は認めない）。しかしこれを明示的に禁じているわけではなく、住民の日常生活に身近に関わる公共の事務は住民の意思にもとづき地方自治体が処理するという93条の趣旨を生かして、法律により、定住民としての実態にある外国人に参加の道を講じることが妨げられない、というものだろう。ことは、「国の立法政策の問題」とされたのである。

法律論に立ち入るのは筆者の専門でもないから、このくらいにしたい。ここで気づくのは、地方自治体の運営はあくまでこれに密接に関わる地域住民にもとづき行われるべきで、その意味で国政とは区別されるべきだという見方が一応示されたことだろう。田中宏氏はこれを「最高裁判所が国政レベルと地方政治レベルの参政権をはっきりと区別した意義は大きい」として評価している⁽²⁾。

在日への日本社会の対応を振り返って

次に、ここで考えてみたいのは、「定住外国人」の主体である在日韓国・朝鮮人への日本社会の対応である。

この人々を今、日本社会の側は「(定住) 外国人」と呼ぶ。しかし、これをおかしいと感じる感覚がなければならない。本人または親、祖父母がかつては日本国籍をもち、日本人（ただし「皇民」「臣民」）として扱われてきた人々でありながら、戦後いっせいにその国籍を剥奪されてしまった人々だからである。すなわち、日本政府はサンフランシスコ講和条約発効の1952年に、かれらを外国人であると一方的に宣言し、外国人登録法を適用して、その管理下においたのである。これは尋常なことではない。

英、仏、オランダなど、かつての植民地大国の例をみても、植民地だった国々があらたに独立するとき、宗主国に住む植民地出身者たちが、新しい独立国の国籍を選ぶか、それとも宗主国の国籍にとどまるかは、かれらの選択に任せるのが一般的だった。しかし、こうしたオプションは在日の朝鮮民族には示されもしなかった。英国のように、旧植民地出身者で国内に住む者に、国政までの選挙権を認めている国もあるが、日本ではそのような配慮がまったくなかったことはいうまでもない。

かれらは、日本人になるべしとして教育され、朝鮮半島にはもはや確たる生活の基盤をもたず、日本以外で生きていくことのむずかしかった人々である。それが一斉に国籍を奪われ、単なる「外国人」として生きていかなければならなかった。日本人からいっぺんに180度転換し、「エイリアン」になったのである⁽³⁾。国民健康保険、国民年金、公団住宅、公庫融資、育英会奨学金、等々の利用ができず、公務員採用の道も閉ざされ、非常に苦しい生活をよぎなくされたのだ。また、このとき、日本国籍からはずれたという理由で、かれらは戦争犠牲者への補償の措置からも除かれてしまい、この点は今だに解決されていない。

この重要な事実を、現在の教科書もほとんど記述していない。終戦の時には実に230万人以上いたこれら「日本人」が、その後どんな事情ですっかり姿を消してしまったのか、これはきわめて大きな問題であるはずだが、日本の子どもたちには正確なことがほとんど教えられていない。いま、「定住」や他のどんな形容をかぶせようとも、かれらを「外国人」と呼んで平気であるという日本社会の感覚は大いに反省されなければならない。かれらが一斉に「韓国」または「朝鮮」籍に切り替わり、ただちに出入国管理令や外国人登録法の管理の対象とされたとき、日本人の意識と眼差しもためらいなくさっと切り替わり、かれらが無権利であるのが当然の「外国人」という目でみるようになったのだ。かれらの権利が日本人と平等であるべきだと考え、そのことを訴えようとする日本人の側の運動は、革新勢力の強かったこの時期でも、ほんの弱い動きでしかなかった。

かれらの参政権が論議の対象となっている事実を、今、日本社会に住む日本人自身が戦後を反省的にふりかえるよすがとしなければならない。

参政権の根拠と議論

ところで、参政権要求は、近代デモクラシーの「代表なければ課税なし」の原則にもとづいて、理詰めで論じていくと、強い説得力をもって来る。日本人と同じように長年地域に住み、税金を払っているのに、その税金をどう使うかに関し、議会や首長を監視し、注文をつける権利が認められないのは不当だ、という訴えは説得力がある。これを否定する

なんらかの普遍的な論理を見いだすことはむずかしい。

「国民ではないのだから」という反対論は、結局は、①国民主権の原則を無際限に自明のこととして日常の地域生活にまで適用しようとする考え方、②「日本人らしさ」のような、かなり曖昧な文化的条件をなんとなく市民権の基礎におく考え方、③すみやかに帰化の手続きをとり、日本人になって「正々堂々」と参政権を行使するのが筋だとする考え方、などのいずれか、またはそのすべてに基づくのであろう。

しかし、①については、最高裁判決すら、国政と自治体政治を区別するロジックがありうることを認めている。

反対論の②は、実は日本人の意識の底にオリのように深く沈殿している一つの感覚であるが、仮に百歩譲ってそれを認めるにせよ、在日韓国・朝鮮人にこれを適用し、排除しようとするのは不当である。言語、習慣、知識、教養のいずれをとっても、在日の人々と日本人との間の乖離をいうことはできないし、永住を予定するかれらはあらゆる面で日本社会への適応の努力を払ってきた。また、仮に定住外国人のなかに、日本語の読み書きの力が不十分である者がいるとしても、日本の選挙関係の法令は一時期までのアメリカの若干の州にみられた「識字条項」のような差別規定をなんら含んでいない以上、差別すべきではない。

さらに③についていえば、たとえばフランスのように帰化を積極的に認める国ならともかく、日本の帰化の制度は主権の裁量による部分があまりにも大きく、滞日数十年におよぶような在日の帰化請求でさえ、さんざん待たせたあげく、「却下」の通知が届くケースが少なくない。帰化が国籍取得の透明度の高い制度になっているとはとてもいえないのである。

それに、今日、帰化という形で決定的に帰属を変えなくとも一定の市民権の享有は妨げられないという考え方が先進国では正当性を得てきている。言い換えると、国籍を保持するのはアイデンティティに関わる権利であり、これは尊重されるべきで、地域市民権と引換えにされるべき性質のものではないということである。スウェーデン、オランダなどが定住外国人に認めている地方選挙権や、先に発効したマーストリヒト条約に基づくEU市民権などがこの考え方に立っている⁽⁴⁾。

こうみてくると、「日本国民でなければ、選挙権は不可」という素朴常識論は、とうてい論理的に維持しえないことが分かる。ただし、人々の世論がこの常識論を棄てるにはなお時間がかかるとされる。また、ある主張が論理的に筋が通っているからといって政治過程においてすんなり立法にこぎつけられるとは限らないことは、経験的にわれわれの知るところである。外国人の運動をサポートし、同時に、日本社会を見直す日本人自身の課題として、なお幅広い運動が組織されなければならないと考える。

「定住外国人」とは？ どう規定するか

しかし、具体的内容からみると、定住外国人地方参政権をめぐる議論はほんの始まりの入口たどりついたばかりだともいえる。

先にも紹介したように、原告の金氏らは選挙人名簿に自分たちの氏名が載っていないことを不当として訴えたのであり、必ずしも、定住外国人の選挙権のコンセプトを明示化し、訴えを起こしたわけではない。今回の最高裁への上告理由書をもてみても、「上告人ら定住

外国人の定住・生活実態」「上告人の参政権者たる適格性」をくわしく述べてはいるが、それは三世代目の一在日韓国人の生活史、生活実態を主な論拠としている。同じことが、滞日10年あるいは20年の中国人やフィリピン人やアメリカ人にも一般化できるのかどうかは何もいっていないし、おそらくそうではないだろう。他のさまざまな国籍、滞在歴の外国人のことは、とりあえず考慮外におかれていたと思われる。

だが、定住外国人の選挙権のあり方を一般的、原理的に考えるとすると、金氏のような外国人だけを脳裏に浮かべて議論を進めるわけにはいかない。もちろん、かつて日本国籍を有し、その不当な剥奪により、またゆえなき民族差別のために耐えがたい辛酸をなめてきた在日のトータルな境遇に、筆者は特別な思いをいだき、かれらの選挙権の要求に特に正当性を感じるものである。しかし、にもかかわらず、「定住外国人」とは何か、どう規定するか、どの範囲までを含むのかは、できるだけ客観的な観点から議論しなければならない。

まず、参政権有資格の定住外国人＝「永住者」として、これにあたる韓国・朝鮮人、中国人を対象とするという考え方があろう。かつて日本国籍をもっていた、植民地出身の人々（朝鮮半島や台湾の出身の人々）とその子孫だからというわけである。その特別な絆と歴史的な居住実態を重視した考え方である。こうした考え方は、諸外国のなかで例がないわけではなく、イギリスは、旧植民地で英連邦を構成する国々（コモンウェルス）の出身者とアイルランド人に居住権を認め、国政選挙と市町村選挙への投票権を認めている。なお、これは近年「パトリアリティ」という原則⁽⁵⁾によって制限される傾向にあるが、その点には立ち入らない。この場合、それ以外の外国人は、いかに定住歴があっても、排除される（ただし、EU域内出身外国人は、EU市民権の枠内で地方参政権をもつが）。たとえばロンドン在住20年という日本人あるいはアメリカ人がいたとして、いかに「英国仕込み」のジェントルマンになっていようと、参政権は認められないのである。

それに対し、定住外国人を国籍、出身国の別なく一定の客観的基準、特に継続的な居住年数によって定義するという別の考え方がある。これが今、スウェーデン、オランダ、デンマークなどで外国人への参政権付与の基準として取られている考え方である。スウェーデンではわずか3年の居住でよく、オランダでは5年である。もしこの方式を日本に当てはめると、まず何年で区切るかが問題となる。5年間という意見、10年間という意見、あるいはそれ以上の特定年数を挙げる意見が出てくるだろう。その場合、どのように決着が付けられていくだろうか。

第三には、相互主義あるいは互酬性という考え方がある。地方選挙権を認めている国の出身者のみに等価のものとして地方選挙権を認めるというものである。スペインがこの原則をとっている。EU15カ国間の外国人地方選挙権も、あえていえばこれにあたるといえる。ただし、日本の場合、この相互主義に立つならば、最大の定住外国人集団の韓国・朝鮮人ははずして、欧米の若干の国の出身者に選挙権を認めることになり、まったく意味を欠くことになる。

これらのなかの内のどの考え方をとるか。その議論が必要となる。筆者の意見をいえば、参政権という権利の重要性にかんがみ、なるべく普遍的な基準によることが望ましいと考える。在日の人々を当然に包含しつつ、しかし一定の居住実績をもつそれ以外の外国人が、ともに共通の基準の下にくられるようなシステムが最善だと思うのである。

単に一票を行使できるだけでよいのか

最後に、外国人選挙権を議論する人びとが意外に見落としている一つの論点があることを指摘し、私見を述べてみたい。

それはある意味で参政権の根本的な理解に関わる事柄である。定住外国人の参政権とは、こと選挙については、日本人とまったく同じように一票を投じる権利、同じ条件で立候補をする権利に尽きると考えるのが、一つの立場であろう。多くの人びとはこのイメージに立っている。だが、それがすべてだろうか。もう一つ、外国人の住民のなかから実際に地方議会に代表を送りだせることを参政権のより重要な意義とみなす考え方もあろう。この二つは、人口の上で絶対的マイノリティである外国人の場合、ほとんど両立しない。

実際、考えてみても、人口のたかだか1パーセントにすぎない人々が、普通の方法で同じ境遇にある仲間を議会に送りだすことはほとんど不可能に近い。ヨーロッパの地方議会の選挙では、だいたい政党または政治団体のリストへの投票という方式であるから、まだしも外国人議員の誕生の可能性があるが⁽⁶⁾。日本の場合、候補者個人への投票であるから、当選の可能性はきわめて低い。その結果、将来選挙権を獲得したあかつきにも定住外国人の間から、「選挙権は得たけれど……」という失望感、無力感が生じてこないとはかぎらない。

この点を考慮した外国人参政権の生かし方はいったい可能なのだろうか。外国人の選挙権が正式には認められていないフランスで、いくつかの自治体が外国人準議員（議決権をもたない）の選出のシステムをもっているが、そこでは、外国人の実質的な代表をどう保障するかがかなり議論され、工夫されたのであった。たとえばM市の場合でいえば、人口の27,000人、外国人人口が2,100人。この比率を議員定数35人にあてはめて、準議員の定数を3名と決めている。そしてその選出母体は、外国籍の市民たち（ただし登録制）と定めている⁽⁷⁾。こうすることで、つねに一定数の外国人が議会に議席をもてるようにと配慮されているのである。

正規に外国人選挙権が認められた場合、かえってこうしたシステムは導入しにくくなるが、単に一票を投じる権利をあたえるだけでなく、実質的な代表の権利を認めようというその精神は学ぶべきものがあるだろう。

教育のなかでも取り上げる課題に

もとより選挙権付与によって外国人住民の生活上の問題、差別や不平等の問題がただちに解決されていくわけではない。それは一種の幻想であり、一部の外国人の間からも、現実の差別や不平等の問題の解決の努力を選挙権問題にすりかえてしまうのではないかと、という警戒の念が表明されている。無視してはならない声である。この機会に、いま一度、われわれ日本人および日本政府が、これまで定住外国人のために何をしてきたのか、何をしてこなかったか、どんな課題を残しているのかを振り返り、きちんと総括をしておく必要がある。

そして、この外国人参政権の問題は、政治とは何か、地方自治とは何か、住民の権利とはどうあるべきか、を考える最善の教材として、中学や高校の社会科のなかで積極的に取り上げられるべきであろう。そのことを是非とも付けくわえておきたい。（立教大学教授）

- (1) 宮島喬『ひとつのヨーロッパ いくつものヨーロッパ』東京大学出版会、1992年、178～79頁などを参照。
- (2) 朝日新聞、1995年3月1日付。
- (3) ここで「エイリアン」と言ったのは、英国ではこの語が旧植民地出身のインド、パキスタン、バングラデッシュなどの在住者には使われず、市民権付与の対象とならない旧植民地以外の出身の外国人（東欧諸国出身者など）をよく「エイリアン」と称したからである。エイリアン(alien)とはいうまでもなく、異なる者、部外者というニュアンスを含んで「外国人」を指す場合に使われる。
- (4) マーストリヒト条約が定めているのは、加盟国15カ国は域内出身の外国人には市町村議会選挙における投票権を当該国の国民と同じ資格で相互的に認め合うというものである(8B条)。
- (5) かなり複雑な原則であるが、本人が英国生まれ、または親ないし祖父母が英国生まれあるいは本人が5年以上の英国での居住歴があること、等を要件として、英国の居住権、市民権を認めることを言う。この要件を満たし、受け入れられる者を「パトリアル」という。これは、意図および結果において、非白人の旧植民地出身者を市民権から締め出すもので、人種差別的であるとの悪評がある。
- (6) 候補者のリストにおいて、外国人代表を上位にランクすれば当選の可能性がある。
- (7) 『平等な社会を求めて』神奈川県自治総合研究センター、1991年、151～52頁を参照。

高校改革の論理と現実

研究評議員 黒 沢 惟 昭



はじめに —現代日本のメガトレンド—

教育改革を考える場合、メガトレンドを無視して改革を試みても有効ではありえない。それでは端的に現代日本におけるメガトレンドとはなんだろうか。この点については様々な観点からの言説がありうるだろうが、「差異化」とか「多様化」という言葉でその流れを表わしても大方の反論はないと思う。⁽¹⁾あるいは教育界でしばしば用いられる「個性化」、やや大雑把に「自由化」と表現しても意味するところは殆ど変わらない。要するに、「非・画一化」である。しかも、このトレンドは今後とも押しとどめることはできない大きな潮流であると考ええる。これを無視してはいかなる教育改革も共感を得られるところ少なく、従って非現実的であるというのが拙論の前梯である。

この背景についてはこれまでもしばしば触れたところであるので、70年代半ばに、日本の第三次産業が就業人口の半分以上を占めるようになった事実、それと連動して生産方式もフォーティズム（小品種、大量生産）からアフター・フォーティズム（多品種、小生産）に転換した状況、その結果、いわゆる「ポスト・モダン」現象が現われたという事況だけを指摘しておきたい。したがって、70年代半ばをターニングポイントとして、「後期戦後」が始まったとする見解⁽²⁾に私は賛成である。

1. 高校の大衆化と格差

以上のメガトレンドを前梯にして、小論の対象であるその一支流——高校教育——に目を転じてみよう。ここでも、55年にはやっと5割を超えた程度の高校進学率とその後急上昇を続け、74年についに9割を突破する。その後は上昇はするもののカーブは鈍っている（因みに現在は全国平均95.6%である）。念のためにいえば、大学進学率（短大も含めて）も75年まで一貫して増加していたが、75年を期に急に横ばいになる。

以上、ほんの粗描ではあるが、70年代半ばをピークに高校進学率が9割以上に達したということは、後期中等教育の段階にまで、教育運動が求めた「教育を受ける権利」がほぼ実現された（Secondary education for all）ということであり、その面で輝かしい成果である。しかし、同時にそれは高校の大衆化ということでもある。つまり、様々な階層の学力、性格の異なる生徒が——極端に言えば「フランス現代思想を原典で読む者から常用漢字も満足に読めない者」までが——高校生になったのである。これが大衆化の実相である。

ところで、現行の公立小・中学校のように「学区制」が厳格に実施されていれば——これは戦後改革の理念の一つと考えられているが——高校も、現在の小・中校と同じく、種々様々なタイプ（もちろん、その学校近辺の地域社会の一定の特性は反映するだろうが）の生徒によって構成される集団になったであろう。だが、高校の場合は、小・中校とは異

なる状況を呈している。

いわゆる小学区制も次第に崩れ、入試も単独選抜方式が一般化したため、高校間に「格差」が生ずるようになったからである。そして、いわゆる「偏差値体制」が拡大・深化していくにつれこの格差・序列化は固定化していった。そのために端的に言えば、各学校内の生徒・間の格差が学校・間の格差となって現われるようになったのである。この点が義務制の場合と高校との大きな違いである。いいかえれば、メガトレンドとしての「個性化」「差異化」を学校・間の格差によって乗り切ってきたのだともいえよう。

2. 平等と効率

14期中教審答申（以下「中教審」又は「答申」という）は「平等」と「効率」の二つのキーワードで如上の状況を説明している。「答申」にはやや論理が定かでない点もあるが、私なりの読み込みも含めて答申の要目を述べてみよう。

ともかく「平等」化がタテマエとしては実現したことは評価されてよい。たとえ内容的には著しい「差」があろうとも、どんな高校の卒業生でも「高卒」の資格としては全く等しく、この意味では戦後教育の改革の理念の一つである「平等」が高等学校において実現したのである。しかも、この「平等」化の過程で「格差」が生じたとしても、それは身分制など前近代的要因ないし、外部的な“強制”によるものではなく、本人の能力（学力）を公正な選抜によって振り分けた結果である。逆に、学区の制定や「総合選抜」などによる「自由」の制限は自由競争に反する、つまり如上のメガトレンドにも逆行するものだという名分もそれなりに説得性がある。

「効率」については、教育の効率（果）なのか、経済効率なのかは必ずしも明確ではない。しかし、次のようにはいえるのではないか。

生徒を学力差によって分けてグルーピングした方が、様々な生徒が拡散され、「学力」にバラツキがある状態よりも“教育”の「効果」が上がるという主張は一定の説得性がある。とりわけ、大学進学率が上昇し高校が中等教育の完成期というよりも、ポスト高校の過渡期という性格が強くなってからは上記の主張は一層多くの人々に受け入れられるところとなったことは否めない。例えば、大学進学という目的のためには能力別にクラス（コース）編成をした方が「効率」がよいという謂である。したがって、この場合は教育というよりも、大学の進学に必要な「学力」の養成に限っての「効率」であることを断っておきたい。この「学力」は教育ではない、という人も多くいることは私も認めないわけではない。

以上の限定を前提として「効率」の側面をいえば、学校の内部の生徒の多様性（とくに学力のバラツキ）を学校間・格差に転ずることによって、「効率」を挙げてきたとみることでできよう。さらに、推測を加えれば、産業が要求する種々様々な「人材」をこの学校間・格差、その多様化を通してそれなりに供給してきたのであった。この意味で、経済成長つまり、経済の効率と「教育」の効率とはほぼ一致していたといえるのではないだろうか。⁽³⁾

たしかに、教育運動の側は如上の状況を、「差別選別体制」と位置づけ「高校三原則」の実現を！というスローガンの下に批判してきた。だが、一部の地域では現在に至るも根強い抵抗が持続しているものの大勢としては「学区制」は拡大し、「総合選抜」の実施地域は減少しつつあるのが実情である。もちろん、産業界、財界の意向を反映した政権が長期にわたって続き、文部行政もその要求に応じて教育固有の論理よりも経済の論理、企業の要

請を優先させてきたこの国の特有な事情も勘案する必要もあろう。また、多くの社会主義国家の崩壊は、革新運動の低迷に影響し加速したに違いない。しかし、その底流には冒頭部分に指摘したメガトレンドが存在することは間違いない。教育運動の側もこの潮流を勘考した上で、有効な対案が提起できたとはいえない。「高校三原則」のスローガンを専らに掲げ続けてきたという歴史的事情も認めざるをえないのである。

これに加えて、教育運動の中核である教員についてみれば、「豊かさ」のなかで現状維持の保守化への傾向が強まり、スローガンとしては「三原則」を叫びつつも、自分の子どもに関しては偏差値、受験体制のなかで「差別化」競争に巻き込まれざるをえないという矛盾の中にいる教員も多いという事情も勘案する必要がある。

3. 高校教育の矛盾

タテマエとしての「平等」、実態としての「格差」による「効率」化というわが国の高校教育の仕組みも近年少しずつ崩れつつある。原因としては色々なことが考えられるが、主要な要因としてはさしあたって次の二点を指摘しておきたい。

①中退・不登校の増大に伴う社会的不安の増大である。高校中退に限っていえば、ここ10年以上も、毎年10～12万人程度为数が報告されている。一昔前のように、経済的理由による退学ではなく、“不本意入学”によるものが多いことは注目される。いわば高校の大衆化（ポストモダン）現象に伴う“学校からの青少年の逃走”というべき未曾有の事態であり、その意味での社会不安なのである。

②産業界の要求する「人材」に偏差値体制が産みだす「人材」が対応できなくなってきたということである。この点に関しては若干の説明が必要であろう。

一は、「エリート」的層についてである。

ゼネラリストよりも、創造的・想像的スペシャリストが日本独自で産出される必要度が増してきたことである。つまり、従来は、真にオリジナルな技術は、外国から購入し、それを分解・再生して「商品化」することで「技術大国」化を進め維持してきたが、日本の「経済大国」化とともに、先進諸国との対立・競争が激化し、オリジナルな技術そのものも日本国内で開発しなければならなくなったのである。このため前述の創造的・想像的人材養成が急速に必須となったが、従来の偏差値体制が供給する人材はこの要請に充分応えることができないという産業界やわが国のノーベル賞級の科学者の危機意識とそれに基づく提言である。⁽⁴⁾

二は、エリート以外の層である。

日本企業の三大特色の一つと考えられてきた「終身雇用制」がもはや日本は維持することができないという事情があげられる。大巾なフレックス制が導入された場合には、これらの人々の場合は新しい「技術」を生み出すための関心・意欲ではなく、失業を免れるために、新しい職種・生活に対応する意欲、関心、態度が必要になるが、これまた従来の偏差値体制による教育では充分にこの要求に応えられないという認識である。⁽⁵⁾

以上、ラフな分析であることを覚悟していえば、①は文部省的、すなわち教育固有の要求であり、②は財界の、経済の要請ということが出来る。これら二面の要求が合成されて、偏差値による一元的序列化の体制を崩す、少なくとも是正しようという国家的意図が形成されたものと考ええる。こうして、これまでの「平等」「格差」「効率」のトリアーデ（中教

審のキーワードは「平等」と「効率」である)による高校教育の仕組みが再検討され、修正されるに至ったのである。

4. 14期中教審の診断と処方箋

この事態を14期中教審は極めて深刻にうけとめ「病理」とさえ表現した。この事実認識は評価してよいと思う。格差が「病理」にまで至ったのは、日本の教育が「平等」と「効率」の双方を追求してきた結末であるというのが「中教審」による「病理」の診断である。それでは処方箋としてどのようなものが提示されたのだろうか。

端的に言えば、「平等」と「効率」のレベルを少しずつダウンさせるというものである。前述したところを勘案して私なりに言えば、タテマエとしての「平等」と実質としての「格差」という従来の相関関係を変えていこうとする処方箋である。いいかえれば、タテマエとしての「平等」を実質的な「平等」に転換すること、このことによって、従来の「教育的」、「経済的」「効率」がダウンしても止むをえないという考え方である。それでは実質的な平等とはなにか。この点を考えてみよう。

まず注目すべきは「平等」の捉え方である。たとえば「総合選抜」によって、学力を「平等」に各校に振り分けるという「平等」の謂ではなく、学力の高い生徒にはそれに適しい教育を、低い生徒にはそれなりの教育をするというのが実質的な「平等」なのだと考えられていることである。具体的に例示すれば、1割の学力優秀な生徒には徹底的な競争によってエリート養成を、そして残りの9割には無試験で全員を入学させノンエリートの教育を行うということが実質的な「平等」、つまり「平等」のレベルダウンということなのである。そう考えられる。端的に制度的な複線型の進学コースである。⁽⁶⁾

しかし、周知のように、14期中教審の改革構想の具体化案を試みた「高校教育改革推進会議」の改革案では如上のようなラディカルな案は提示されなかった。実際に示された処方箋は「入試」の多様化と「高校」の多様化、特色化という改革案であった。つまり、入口（入試）と内容（高校）を多様なものにしてそれぞれの生徒が自分に適した「入口」と「内容」を選択すれば、一元的な価値（偏差値）による序列化は崩れ、メガトレンドとして「非・画一化」という現代的状況にもうまくマッチするのだ、これが改革案の眼目である。選択の多肢・多様化による一元的序列化の是正ないし、変換は一定の説得性をもつ。私もこの案が提示された時一定の期待感を抱き、大いに注目したのであった。

5. 多様化政策の実態

実施された「多様化」の方途には様々な方式があるがここでは主要な全国的に普及しつつある例として、①推薦制（入試選抜の多様化）と②コース制（高校の特色化）について考えてみよう。但し、改革は実施されてからたかだか数年のところが多く、限られたヒヤリングや私の研究会などでの現場教師の報告に基づくものであるから大方の流れしか捉えていないことを予め断っておきたい。

①推薦制については、とりわけ選抜に際して学力以外の要素が大きく採り入れられるので、偏差値による一元的価値を崩すものとして期待された。実態はどうか。

推薦の「規準」を要約すれば次の三つになる。

㊤学習の意欲があって、成業の見込みのある者。㊦スポーツで著しい実績を上げたり、

生徒会活動に積極的な者。③ボランティア活動など奉仕活動に積極的な者。

この結果、学力のみに偏らない選抜が可能になったであろうか、まず、①の「成業の見込みのある者」とは、明らかに「学力」が一定以上でなければならないことの謂である。進学後に「学力」によって「成業の見込み」が立たなくなれば、翌年の推薦枠に影響するから、中学校側はやはり当該の高校に値する「学力」の生徒を推薦することになる。

さらに、③④の「規準」の判定は仲々難しく、担当教員の主観の要素が大きい。そのため推薦組と非推薦組との間に、また担当教員に対する生徒、父母の疑念、不信が巻き起きているという。無理もないところである。また、推薦に伴う教員の仕事も急増し、「これならむしろ、従来の学力試験一本の方がましである」という教員のホンネもしばしばヒヤリングでは聞かれた。

要するに、多面的な評価による選抜という理念とは程遠く、現状では、それぞれの高校にとって適しい生徒を確保するための「早期選抜」になっているのが実態である。その反面、推薦以外の一般枠も狭められ、学力試験もそれだけ厳しいものにならざるをえないこともつけ加えたい。

②次にコース制についてみよう。ここでは、「高校の特色づくり」の先進県といわれる埼玉県のコース制についての調査報告を参考にさせて頂く。

埼玉はすでに37の専門コースを設置している。この数は神奈川の3倍であり、全国的にも「特色づくり」が進んだ県である。詳細な数値の比較は私たちの共同研究⁷⁾を参看して頂くことにして結論部分のみを述べれば、専門コース（情報、国際文化、美術工芸、国際観光ビジネス、日本文化、体育etc.のコース）は、中学生を十分に引きつけるに足る「魅力」をもっていないのである。むしろ、進学校（普通科）の人气が圧倒的に大きいということである。しかも、埼玉では推薦制、傾斜配点の導入、拡大学区など、「特色ある選抜」を可能にする条件が整った県といわれる。それにもかかわらず、「専門コース」は、受験生の希望の焦点とはならなかったのである。次の結論を参看されたい。

「倍率を見るかぎり、専門コースとして『特色をもつ学校』よりも、『進学校』として『特色をもつ学校』に希望が集中していることは否定できない。制度改変の途上にある埼玉県の入選方式全体の是非について結論を出すことは、現段階では差し控えるべきであろう。しかし、『特色づくり』が学校間格差の是正に無力であり、『特色』の名のもとに格差を固定してしまう可能性も多分に持っているとの指摘をすることは、許されるのではなかろうか。」⁷⁾

以上の考察に鑑みる限り、折角の中教審の処方箋も薬効の甲斐なしといえそうである。それでは廃止するべきか。それは偏差値による一元化への逆戻りを意味する。それは認めることはできない。それではどうすべきか。この点について私見を述べよう。

まず、①の推薦制の理念は決して悪くないと考える。現行はこの理念通りにやっていないことが問題であって推薦制そのものは尊重されるべきと考える。たとえば、純粋に生徒の志望のみを考慮することにして志望者が推薦枠を超えた場合にはクジ引きにすることなども考えられる。たとえ、「成業の見込み」が少ない者でも、熱意のある場合には「習熟度」クラスなどをつくって補償教育を行えばよいではないか。「障害者」をはじめ社会的経験のある者、あるいは近辺居住の者ないし外国籍の者を優先させるとか、推薦でしか採れないケースを各校で工夫すれば、多様な生徒が入学することになろう。推薦制の意義・理念に

そった方向へ転換することを強調したい。

②のコース制は、やはり根本的難点をはらんでいる。ある時期に生徒の好みに合いそうなコースをつくってみたところで時流が変われば、人気がなくなり志望者が減り、定員割れを起こすことは充分考えられることである。したがって、多くの総合選択制高校や総合学科で実施されているように、コースを固定させず、コース間の移動を認め、コース間の連携ないしネットワークによって、時流に応じて対応していけるような形に変えるべきであろう。

ところで、私はかねてから疑問に思ってきたことは、必要なのは、生徒の「個性化」であって学校の特色化・個性化ではないのではないかとすれば、特色ある高校をつくり一定の個性・特色ある生徒を集めると現行の改革では個々の生徒の個性化は顕れにくいのではないかと。むしろ、さまざまな個性、タイプの生徒が入学して、交流するなかでこそ生徒の個性化が実現するのではないだろうか。

以上の観点からいっても、すでに指摘したような方向へ推薦制、コース制の変換は絶対に必要であると考え。次に、改革の大枠についての私見を若干述べて稿を閉じることにする。

6. 地域選択制高校と生徒の個性化

冒頭で指摘したメガトレンド及び中教審の診断した「病理」の構造、及び処方箋などを勘案して改革の大枠を示せば次のようになるであろう。

まず、要目は生徒の「個性化」である。そのためには学校の特色化は必ずしも必要ではないということである。いいかえれば、多くの生徒にとって中学校段階では未だ明確に自分の個性が進路と結びついていない場合が多いのが現状である。せめて高校に入って最低一年ぐらいのモラトリアム期間が必要であり、又一応の進路を決めても途中で「移動」の可能性のために「バイパス」をつくっておくことが必要である。(もちろん、中学校段階で自分の個性に応じた進路が確定できる者もいるであろう。また小・中校でも単に学校の選択ではない大きな将来の選択ができるような「進路指導」は必要であり、カウンセリングの充実は一層充実されるべきである。)

そのためには、なんといっても選択の幅を増やすことが肝要であり、具体的には科目(ないしそれに準ずるもの)を増やさなければならない。

私の見聞した例を挙げれば、選択制高校として有名な伊奈学園総合高校には160余の講座が開講され、同じ時間割りの生徒は一人もいないのである。また、昨年(94年)「総合学科」高校としてスタートした筑波大学付属坂戸高校⁽⁹⁾では150余の科目が開設され、これまた生徒の多様な選択に応えようとしている。しかも、いづれもこれまでのところ成功している例と考えて差しつかえないだろう。

以上の点を勘案すると科目ないしその分枝としての「講座」の大幅の開設・増設こそ生徒の多様化に應える必要条件である。そして、これらをいくつかの類ないし群に大別する。しかもこの場合、それらの類ないし群に分かれるのは2年目ぐらいがいいのではないかと。つまり、入学後一年ぐらいはできるだけ共通科目を多くして類・群へ分かれるオリエンテーションの期間とするのである。しかも、類・群に分かれてもホームルームをはじめ、共通の科目も多く設定して、類・群の固定化・閉鎖性を防ぐ必要がある。もちろん、2年目

以後の途中でも、類・群の変更の可能性も残しておく必要があろう。

以上の科目の大幅な増設が一校で可能な場合もあろうが、財政的にも困難が多く、大規模校の問題も生ずる。そこで、私は近隣の数校が連携してネットワーク化することが現実的であるとする。地域の学校の立地状況を配慮しなければならないが、すでに各校で実施されている「単位互換」（この場合、生徒の移動だけでなく教員の相互乗り入れも必要である）がまずもって拡大されるべきであろう。

しかも、「総合学科」の理念である普通科と職業科の総合・統合という構想自体は正しいのであるから、連携は普通高校間に限られるべきではなく、職業高校、望むならば私立校、定時制、通信制、さらに一定程度は社会教育との連携、実務体験、ボランティア活動などの単位への取り込みも考慮されて然るべきである。このようにすれば選択の巾は著しく広がり、生徒の多様性、個性化に応える現実性もそれだけ拡大するのである。しかも、学校外の教育的要素の取り込みは生涯学習時代の学校の在り方としても適しいのである。

以上のネットワークは一定の通学範囲が限定されるから地域性が前提にならざるをえない。いわゆる「地元」を優先しつつも、交通の利便による遠隔地からの熱心な希望者の「選択」もはばむ理由はない。しかし、このようなネットワークによる地域の選択制高校が各地に続々とできれば、あえて遠隔の高校へ通う利得も殆どなくなるであろう。そうすれば厳しく「学区制」をしき必要もなくなるのではないかと考える。

各学校の定員の総計が定員となるわけだから、生徒減の今日、選抜を行う必要もほぼ無くなると思う。ここでは生徒の多様化に応え、生徒の個性化を目標とするのであるから、「障害者」、外国籍生徒も含めて、希望する生徒全員を入れることを原則とすべきである。もし、「無試験」ということに抵抗があるなら当面、「推薦制」を活用して、中学で推薦された者全員を高校側が受け入れればこの問題はクリアできるであろう。

なお、このネットワークによる高校——地域選択制高校と私は名付けたい——には通学許可範囲であれば可能な限り多くの学校が参加することが望ましいが、そのほかにそれを拒否する独自の高校があっても差しつかえないであろう。そうした独自のタイプ——さしあたって体育、芸術などが考えられる——の学校を早くから希望し、選択する個性的生徒の存在も認める必要があると考える。

最後に、生涯学習時代の今日、学校の閉鎖性・独善化を排し、「市民社会の風を吹き込む」ことが必要である。そのためには、学校の運営には、生徒はもちろん、地域の人々の意見表明の機会、参加を考えるべきである。欧米で実施されているように、生徒、親、地域の各層の諸団体の代表もそれなりの権限を持って参加できる「学校評議会」ないし、「地域教育会議」などを創設することが、地域に根ざす（地域選択制）高校にとっては必要であろう。

冒頭に指摘したメガトレンドを高校という支流で考えると以上のような高校がデザインされるのである。

（注）

- （1）概略については黒沢・森山編『生涯学習時代の人権』（明石書店、1995年）「はしがき」（3～7ページ）を参照されたい。
- （2）小浜逸郎「『後期戦後』からの出発」（朝日新聞『論壇』1995年1月16日）。

- (3) この点については、拙稿「高校改革と市民社会の創造——『多様化』と『公正』の調和を求めて——」（教育総研理論Forum、No.8、1993年）〈第一章〉を参照のこと。
- (4) この点については、教育総研理論・No.15、Forum「『新しい学力観』をどうとらえるか」（1994年）第一章「『新しい学力観』の時代的・社会的背景」（拙稿）を参看されたい。
- (5) 同上。
- (6) 一つの参考例として西尾幹二『日本の教育 智恵と矛盾』（中央公論社、1985年）所収の「『高等学校複線化』私案」が興味深い。
- (7) 県教文研資料シリーズⅢ『高校教育改革の方向と課題』（神奈川県教育文化研究所、1994年）第2章第2節（本間正吾氏稿）。この論稿には多くの教示を得たことを記して御礼申し述べる。
- (8) 拙稿「総合選択制高校の現状と課題」（『季刊教育法』95号、1993年）を参照されたい。
- (9) 拙稿「総合学科における『産業社会と人間』の実践——筑波大附属坂戸高校の現状と将来展望——」（『月刊高校教育』1994年11月号）を参看されたい。

（東京学芸大学教授）

教育とこころの健康Ⅱ

—教師のこころの健康を中心として—

研究評議員 林

洋 一



1. はじめに

現在の学校教育のあり方に対する批判は、各方面から、またさまざまな立場から出ているが、その改善は遅々として進まない。そのことが改めて認識されたのが、1994年11月に愛知県西尾市で発生した中学生大河内清輝君の自殺事件であろう。この事件では、まれにみる悪質で執拗ないじめと中学生らしからぬ高額な金品の要求が世間を驚かせた。筆者は校内暴力の嵐が吹き荒れていた頃、神奈川研究文化研究所の所報にいくつかの論文を発表した（林、1981；林、1982；林、1984）が、そこで指摘した問題のいくつかが全く変わらずに現在でも学校に存在している点に改めて強い衝撃を受けた。大河内君の事件以来、同様にいじめを苦にして自殺した鹿川君の事件に再び注目が集まったが、またまた繰り返された悲劇に顔を曇らせた教育関係者は少なくないのではないだろうか。

子どもたちが学問について、社会や文化について、さらには人間についての深い知識と理解を得るはずの学校で、どうして何度も何度も執拗にこのような悲劇が繰り返されるのであろうか。時代に適應できないシステムとなりつつある公立学校は全て解体して小回りのきく私塾化したり、ニューメディアを用いた在宅学習システムの本格的構築を模索すべきなのだろうか。あるいは放送大学のように、通信制の小学校や中学校に取って代わられた方がよいのだろうか。

たしかに、現在の学校教育が初等中等教育から高等教育に至るまで、さまざまな課題を抱えているのは事実であろう。だが、学校教育は数々の矛盾を内在しながらもそれなりに重要に役割を果たしており、それは他の方法で容易に置き換えることができるものではない。したがって、われわれが考えるべき現実的な対応は「脱学校の社会」をめざすのではなく、学校を子どもたちが安心して生活できる場、充実した学びの場に変えていくことなのではないだろうか。そのために教育関係者がまずなすべきことは、自らの教育実践をもう一度原点から見直すことであろう。自らの子どもの不登校を契機として学校を去り、主催するフリー・スクールの運営に情熱を傾けている元教師たちがいるが、それはもう一度外部から学校を見直すことに他ならないのではないだろうか。学校を去っていった人たちの発言は、決して敗残者のたわごとではないのである。

本稿では、教育とこころの健康を、教師の抱える心理的問題などを中心にして検討することにした。

2. 教師のこころの健康

教師は、教育を職業として選択した一人の人間である。人間である以上、人並みの感情は持っているし、過ちもある。喜びや悲しみと同様に、悩みや苦しみもあるであろう。神

奈川県下だけで国・公・私立あわせて数万人に達する教師の全てが理想的な人格者であるとは思えないし、教師が全て子ども好きで意欲的・情熱的に教育に取り組んでいると思っていたわけではない。だが、その筆者も、1994年に神奈川県高等学校教育会館教育研究所が刊行した「神奈川の高校 教育白書 94」を読んだとき、思わず「このような厳しい状況下で、先生方は毎日の教育に取り組んでいるのか」と改めて考えさせられてしまった。

この調査は、①生きがい、②健康状態、③職場のゆとりの検討を目的として、神奈川県下の公立高等学校の教師1050名を対象として行われたものである（回答者数は、847名）。学校内での生きがいについて、報告書は次のように述べている。

「学校内、学校外とも生きがいを感じられるものを2つまであげてもらいました。学校内で一番多かったのは「生徒とのふれあい」でした。全体で25%の教員がこの項目をあげましたが20代が28.7%と最も多く、年齢があがるにつれて減少を示しています。50代ともなると、「生徒とのふれあい」よりも若干ですが「授業」を生きがいとした人が多かったのが印象的です。……予想に反して、「部活動」は5.4%と低い比率です。これも若い教員ほど生きがいとする人が多く、20代では12.1%と1割を超えています。30代9.1%、40代4.6%と比率が下がって、50代では1.9%です。自由記述欄をみるとわかるように、30代の教員を中心に部活動に関しては様々な問題点が指摘されています。」

生きがいという複雑な概念を比較的少数の項目に対する回答で把握することにはかなり無理があるし、設問が「あなたが学校で充実していると感じることのできる時間は、どんなときでしょうか」という形であるので、厳密には「生きがい」それ自体を聞いた質問ではない。だが、①生徒とのふれあいに充実感を感じる人の比率が年代が高くなると低下すること、②部活に充実感を感じる人は比較的少なく、年代が高くなると非常に少なくなる、ということは興味ある結果である。

この報告書の中でとくに注目されるのは、「あなたは最近、教員をやめたいと思ったことがありますか」という質問に対する回答であろう。この問いに対する回答は、次のようにまとめられている。

「教員を止めたいと、「今も思っている」人は30代10.6%、40代13.0%と1割を超えています。その理由としては「やめたいと思ったり、今も思っている人にのみ」聞いたところ、「他にやりたい仕事や趣味がある」との答えだけでなく、「今の教育のあり方に絶望して」が多いのが気掛かりです。この「絶望」を理由としてあげているのは、年齢が上がるほど多くなっています。逆に、20代も含めて考えると、若い人程「教員としての適性・資質に自信がない」と答えているのに気がきます。」

報告書の集計表を見ると、「今も思っている」人は20代では8.3%、50代では5.5%になる。年代別に見ると50代の比率がとくに低いのが目立つが、それは管理的立場に立ちそれなりの安定を得ているためなのか、それとも定年というゴールが見えてきたためもう少し頑張ろうと思うためか、さらにもう少し勤めれば安定した年金が得られるので何とかがまんしているためなのかは明らかではない。いずれにしても、30代、40代という職場での働き盛りの教員の1割以上の人たちが教育という仕事に明るい展望を持ってないのは大きな問題であろう。

もちろん、この結果は偶然もたらされたわけではなく、高校教育が抱える構造的問題の反映である。それは、次のような自由記述欄の回答からも明らかであろう。

- ・学校間格差がありとあらゆる問題の原因だと思う。格差を認めた上での対策を立てなければ、生徒も教員も不幸になるばかりである。
- ・本校のような課題集中校のような学校の存在を含めて、よく高校のあり方を再検討する必要があるのでは？ それをきちんとやらないと、少なくとも課題集中校における職員のストレスは解消の方向に向かないような気がする。
- ・精神的ストレスがとてつもなく多い職場環境であり、毎日が苦痛の連続である。職場間の格差が大きくなり、労働条件も各校によりさまざまであろうが、課題集中校においては条件も厳しく、環境も最悪である。人事に関しても「吹きだまり」の様相を呈しており、毎年悪くなる一方である。
- ・いわゆる課題集中校での労働条件は過酷なものがある（早朝指導・10分休みの校内巡回、昼の立ち番、下校指導、臨時職員会議、苦情電話の対応および出勤など）

つまり、学校間格差と課題集中校の問題である。これは高校教育に特有な問題ではあるが、小学校・中学校においても似たような状況がないわけではない。それがより明確に現れてくるのは、次に部活の問題であろう。

- ・部活動の位置づけ、賃金（部活動手当）等について、もっと真剣に取り組んでほしい。部活動の問題が今、一番教員の労働条件を圧迫している。
- ・早朝からラストまで部活動毎日。日曜日も部活動。担任、分掌、分会役員、通勤片道2時間以上、家で残業。ほとんどゆっくりするひまなし。大ピンチの毎日が続いている。
- ・部活動が学校で行われている限り、教員が生徒の面倒を見るのである。その仕事に個人差がありすぎるのはどうみてもおかしい。それがストレスや不信感を生み、大いなる負担となる。この不満をどこにぶつけたらよいのかわからない。
- ・これからは部活は社会体育や公共施設等のインストラクターにまかせるようにするべきである。

教師のこころの健康のためには、まず教師自身にゆとりを与えることが必要である（林、1994）。それができないような状況が存在するのは、この調査の行われた公立高等学校だけではなく、公立の小学校・中学校においても全く同様である。そのためにはまず、教師の生活実態、彼らが抱える教育上の問題、ストレス、生きがいなどに関する的確な把握が必要になる。小学校・中学校の教員に対しても、より厳密な形で、このような調査を早急に実施すべきであろう。

3. 民間企業におけるこころの健康管理

それでは、教育以外の場でのこころの健康管理はどのようになっているのであろうか。比較するために、民間企業の場合をみてみよう。

民間企業におけるこころの健康管理がとくに問題になったのは、一般に1982年に起きた日本航空機の墜落事故からとされている（福島章、1982）この事故は、着陸時の機長の「逆噴射」操作が不適切だったことが主要な原因とされているが、当初は機長が「心身症」と報道されたこともあって、大きな社会的関心を集めた。それとともに従業員個人のこころの問題がこのような大事故に発展し企業に多大の損害を与えたことから、各企業の人事・労務関係者や安全管理関係者は非常に大きな衝撃を受け、職場におけるこころの健康管理の再検討を行ったのである。

このように、精神的疾患を持つ従業員に対する対策から開始された職場でのメンタルヘルス活動であるが、その後、より充実した生活を社員が送ることが企業の発展にもつながるという認識に変化していく。その間の事情は、日本鋼管労働部（1989）によれば、次のようなものであった。

「メンタルヘルスに対する関心の高まりの発端は悲惨な日航機墜落事故であったが、昭和60年代から、高齢化や成人病の増加が問題になるに従い、より豊かな人生の創造と健やかな心身の開発こそが職業生活の基盤であるというトータルヘルスプランの考え方が多くの企業に導入された。すなわち、単なる「疾病管理」という次元から離れて、心身ともに疲弊して活力を失っている従業員を、より健康に活性化させる必要性からメンタルヘルスへのニーズが高まってきている。」

そして、このレポートは企業におけるメンタルヘルスに対する関心の高まりの社会的背景を、次のように分けて考察している。

1. 技術革新の進展 OA化やFA化による精神・神経的疲労の増大と、単独あるいは少数者による職場の人間関係の希薄化
2. 急速に進行する高齢化と増加する中高年の不安と緊張 企業組織における中高年者比率の拡大とポスト不足、リストラなどによる中高年者の不安、悩み、緊張などの増大
3. 生き残りをかけて変化する経営体 円高や貿易摩擦を背景とした厳しい企業間競争のために、経営の効率化や製品の多角化、新技術の開発などで生き残り施策
4. 国際化のメリット・デメリット カルチャーショックや海外勤務に伴う危険、子どもの教育問題、外国人労働者の雇用などにもなる問題
5. 疾病構造の変化で見直しを迫られる健康開発 結核などの感染症に対する予防対策から、成人病の予防や精神疾患への対応に健康対策の重点が変化

これらはいずれも既によく知られていることではあるが、それぞれが難しい問題を含んでいる大きな課題である。

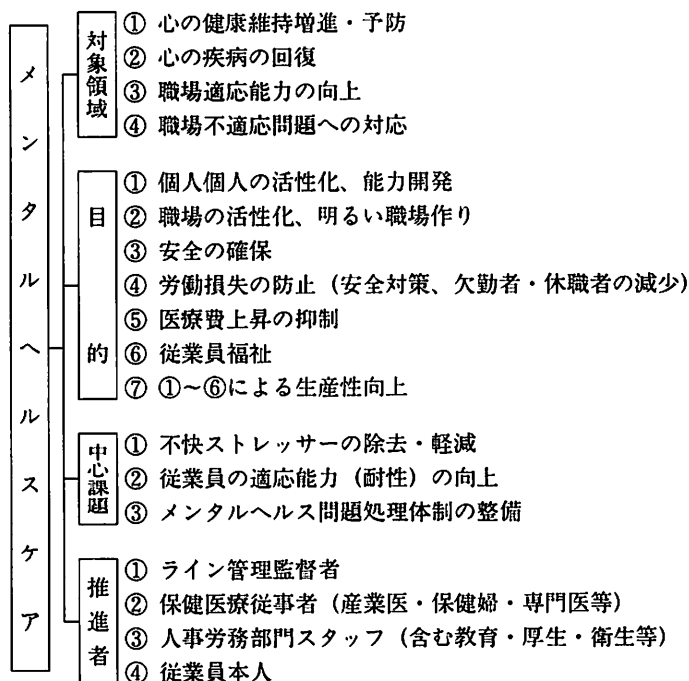
それでは、企業内では具体的にどのようなところの健康に対する対策がとられているのだろうか。日本鋼管労働部安全健康管理室（1985）が作成した「職場のメンタルヘルス」という管理監督者用テキストは、次のような構成になっている。

- 1 今、何故メンタルヘルスカ
- 2 心の健康と不健康
- 3 メンタルヘルスケアの対象範囲と推進体制
- 4 管理監督者によるメンタルヘルスケア
- 5 日常管理上の留意点
- 6 NK式ストレスコントロール法
- 7 事例研究

このテキストは、職場での管理監督者にメンタルヘルスに関する基礎的な知識を与えるとともに、日常業務の中でところの健康を損なった人々にどのように対応するかについての情報を与えることを目的として編集されたものである。それとともに、ストレスコントロールとしてのリラクゼーションについても言及されているし、久里浜式アルコール症スクリーニングテストや自己診断式ストレス尺度なども付属している。また、メンタルヘル

スケアの対象や課題については、図1に示したように設定されている（日本鋼管労働部、1989）。

図1 メンタルヘルスケア・システム



（日本鋼管労働部健康開発室、1989）

日本鋼管という企業は、職場におけるこころの健康管理に積極的に取り組んでいる企業であり、比較的早い時期からこのような活動を行っていた。しかし、一般の企業ではようやく取り組みつつあるところであり、まだまだ試行錯誤の段階である。公立の小中学校はもとより国公立の大学においても、一部の例外を除くとほとんど手つかずというところであろう。

さらに、心理学の立場から行われた実証的なメンタルヘルスに関する研究は少なく、この領域はまだまだ未開発の部分が多い。実証研究を基にしてまとめた形で公開されている書籍は、わが国では宗像・川野（1994）などごく少数である。だが、アメリカではMaes,S.らによって健康心理学に関する国際的展望を扱う書籍がすでに公開されている（Maes,S. et al.1992、1993など）。今後の研究の発展が強く望まれる分野である。

4. こころの健康と健康心理学

心理学の立場からこころの健康を扱うときまず注目されるのは臨床心理学であり、現実的な臨床の場面でそれを担当する臨床心理士などのカウンセラーである。カウンセラーが勤務している場の一つである病院の精神科についてその実際の活動状況をみると、来院した患者はまず一般の身体的疾患の場合と同様に各種の生理学的ないしは生化学的検査を行

い、それと平行してロールシャッハテストなどの投影法を中心とする心理学的検査を行う。これらの諸検査のデータと患者との面接を通して、最終的には医師が患者の疾患の診断を行う。その診断に基づいて、精神安定剤などの向精神薬の投与が行われたり、必要に応じて本人や家族へのカウンセリングなどの心理的治療が行われるのである。診断を行うのは医師であるが、カウンセラーは心理学的検査や患者との面接を通して医師に重要な情報を提供する役割を果たし、またカウンセリングの実務面を担当している。このような意味からいえば、臨床心理学は不適應状態や精神的不健康状態にある人たちの状況を改善するための実践的なアプローチと、それを支える基礎的な研究を行うものといえるのである。

だが、最近、従来の臨床心理学とは異なるアプローチに対する関心が高まっている。たとえば、キメル (Kimmel, 1990) は次のように述べている。

「健康や疾患に複雑な要因が関与していることが最近認識されるようになり、特に心理学的要因の重要性が注目されるようになった。今日では、どのような疾患でも身体的障害でも心の健康に影響されるものであり、また個人の健康状態、あるいは疾患や身体障害に対処する能力にさまざまな心理的要因が強く関与しており、同時に心身の疾患に対する対処行動にも心理的要因は深く関係しているという考え方が強くなっている。」というのである。かれはその例として、エイズ (AIDS) の予防に対する健康心理学の貢献について次のように述べている。

「これまでのところ、エイズに対する治療法はみいだされていないので、エイズが広がるのを防ぐ唯一の方法は、教育によって健康行動を生み出していくことである。性的活動をより適切なものに変え、静脈注射による危険な薬物の使用を減らす効果的教育のための心理的技術は、この疾患をコントロールし、人々の生命を救う最も有効な方法といえるだろう。エイズに対する医学的治療法やワクチンがみつかるまでは、健康心理学がエイズと闘う最前線に位置を占めるものと思われる。」

それでは、健康心理学 (health psychology) とはどのようなもので、何をめざしているのだろうか。本明寛 (1990) は、このことについて次のように述べている。

「ここで改めて健康心理学とは何かという定義について考えてみたい。それには1980年のAPA (アメリカ心理学会) 健康心理学部会でまとめられた定義をあげるのがよいであろう。

『健康心理学とは健康の推進・維持・疾病の予防・治療、健康・疾病・機能不全に関する病因学的及び診断学的にみた相互関係、さらにヘルス・ケア・システムと健康政策の策定の分析と改善に関する心理学領域の特定の教育的、科学的、専門的貢献の全てを包含したものである。』

この定義のような包括的指示は、実は当たり障りはないが、よく分からないものである。確かに、健康心理学は健康の推進・維持や疾病の予防・治療に関する学問であることは間違いない。しかしこの定義では、他の科学との差が明確でない。」(一部改変)

そして本明は、次のように続けている。

「しかし、便宜的にStoneらは1985年に健康心理学が具体的にあげられる健康価値を次のように列挙している。

1. 主観的ウェル・ビーイング (快適) 感があること。
2. 高度の社会的生産達成能力を有すること。

- 3. 血圧、心臓、血液、排出量、呼吸量その他の身体機能測定値が優れていること。
 - 4. ヘルス・ケア・システムにかかる医療費負担の減額。
 - 5. 1 から 4 までの基準に余り触れず、ストレス、感染症、身体的障害に対する抵抗が強い。
- 多少のかたよりはあるが、これらは私どもとして健康を具体的にイメージする時の大きな手がかりになることとして、注目しているものである。

心理学の諸学問領域でからだの問題に取り組み、新しい視点から人間の幸福に直接関与している学問は健康心理学のみであろう。健康と疾病を心とからだと社会という三つの要因からなるシステムの中でとらえようとする試みも、序々にではあるが、日本でも常識化しつつあるように思うのである。」

主観的ウェル・ビーイング感とは、一般的に主観的幸福感ともいわれているものであるが、健康心理学において最も重視される概念の一つである。もちろん客観的幸福感というものは存在しないが、主観的幸福感とは「明るく健康で前向きに生きる自己にある程度満足し、自己受容している状態」と考えてもよいかもしれない。そのような状態にある人は、自己の持つ能力を十分に発揮して高度の生産性を示すであろうし、それを支える身体的健康状態もおおむね良好であると考えられるのである。

それでは、反対に心身の健康が損なわれるとどのような問題が生じるのであろうか。その典型的な例として、宗像恒次（1988）があげているデータを示す。表 1 は、一般の人と医師との人口10万人当たりの自殺率を示している。

表 1 10万人あたりの医師
(含歯科医)と総人口の自殺率

	医師の自殺率		総人口の自殺率	
昭和	自殺率	指数	自殺率	指数
54年	10.9	100.0	18.0	100.0
55年	12.4	113.7	17.7	98.3
56年	12.7	116.5	17.1	95.0
57年	15.0	137.6	17.5	97.2
58年	22.9	210.0	21.0	116.6
59年	27.8	255.0	20.4	113.3

厚生省および警察庁の資料から宗像が作成
(指数は54年度を100とする)
(土井、1988)

治療がもともと困難な病気が多くなった上に、神経症状、精神症状をもった病人に接している。しかも終末期患者とのかかわりの中では、患者の生死にかかわる倫理的な問題にも直面する。……その際、こうした諸困難に専門的に対処するため、医師には対象理解や自己理解の訓練、人間の生死や倫理に関する教育などが必要とされているが、そうした患者へのかかわり方は、もっぱら本人の常識や経験に委ねられており、必要以上に不安やイライラをつのらせている。」

さらに宗像は、医療ミスに対する訴訟の増加が医師に対するプレッシャーを高めていること、診療科別に見るとアメリカでも日本でも精神科医や麻酔科医の自殺率が高く産婦人科医や小児科医の自殺率が低いことなどを示している。また彼は、医師の医業経営や家庭生活の苦悩が自殺の原因になっている場合が少なくないことも示唆している。

医師の自殺に関して宗像があげているデータはこの他にも多岐にわたるがそれらの多く

は数量化されたデータであり、自殺既遂者個人の事情や自殺に至る経緯を細かく分析したものではない。したがって、医師の自殺についてのある程度の傾向は示唆されているが、それがどのような原因によるかを明確にするにはデータ不足といえるであろう。だが、医師の中でもストレスが多くかつ完治するという達成感が少ない診療科目を担当する者が自殺しやすいという傾向はある程度示されているのではないだろうか。

いずれにしても、こころの健康がその人の生命にも関わる重要な問題であるということだけは否定できない事実であろう。したがって、このような問題を扱う健康心理学に対する期待は非常に大きなものになるが、現在の健康心理学はまだその期待に完全に応えるには至っていないというのが現状である。また、臨床心理学と健康心理学との関係についても、今後より詳細な論議が必要であろう。そして、学校教育の中に健康心理学的の知見を積極的に取り入れ、新たな視点から学校教育とこころの健康について検討することが強く望まれているのではないだろうか。

(引用・参考文献)

- ・福島 章 1982 働きざかりの過剰適応症候群 大和書房
- ・林 洋一 1981 対教師暴力の心理的背景 神奈川県教育文化研究所所報 47-55.
- ・林 洋一 1982 対教師暴力の心理的背景(2) 神奈川県教育文化研究所所報 59-65.
- ・林 洋一 1984 いじめの構図 神奈川県教育文化研究所所報 89-94.
- ・林 洋一 1994 教育とこころの健康 I 神奈川県教育文化研究所所報 66-73.
- ・神奈川県高等学校教育会館教育研究所 1994 神奈川の高校 教育白書94
- ・Kimmel,D.C.,1990,Adulthood and Aging.,3/ed.,Wiley & Sons.New York. (加藤義明監訳 高齢化時代の心理学 ブレーン出版 1994)
- ・Mase,S.,Leventhal,H.,Johnston,M.,eds.,1992 International Review of Health Psychology.,vol. 1,John Wiley & Sons.
- ・Mase,S.,Leventhal,H.,Johnston,M.,eds.,1993 International Review of Health Psychology.,vol. 2,John Wiley & Sons.
- ・本明 寛 1990 健康心理学に期待するもの 社会心理学研究 第5巻2号 75-82.
- ・宗像恒次 1988 対人専門職の受難時代 土居健郎監修 燃えつき症候群 金剛出版
- ・宗像恒次・川野雅資編著 1994 高齢社会のメンタルヘルス 金剛出版
- ・日本鋼管労働部安全・健康管理室 1985 職場のメンタルヘルスー管理監督者用テキスト 日本鋼管労働部安全・健康管理室
- ・日本鋼管労働部健康開発室 1989 NKKのストレスマネジメント エイデル出版
(白百合女子大学教授)

神奈川の高校改革をめぐる

研究評議員 広瀬 隆雄



1. 作業部会と高校改革問題への取り組み

教文研の教育改革研究委員会のなかに高校改革作業部会が設置されたのは、一昨年(1993年)の5月であった。当初から私もそのメンバーの一人として参加し、作業部会での検討に従事してきた。そこでは、文部省や全国自治体における高校改革の動きをどうみるか、その理念や具体的方向をどう評価するか、また単に批判するだけでなく、われわれのめざす方向とは何かなどといった問題について話し合ってきた。約1年半の審議を経た後、昨年の10月に最終報告書を提出した。

作業部会で検討を行っていたとき、ちょうど県教委も高校改革のプランを具体化する作業に取り組んでいた。いわば県教委の動きをにらみつつ、作業部会での議論が行われたわけで、そこには常にある種の緊張感が漂っていた。

この作業部会での議論を通して私は多くのものを学んだと思う。高校の現場で実際どのような問題が起きているのか、あるいは中学校での進路指導の実態がいかなるものかなどを知ることができた。

また、高校問題をどのように解決すればよいか、そのために改革の具体的プランをどのように練ればよいか、これらをすじみちを立てて考えることの難しさも学んだ。文部省の作成した改革プランをあれこれ批評したりするのはたやすいが、具体的にどうすればよいかという問題に対して、リアリティのある対抗プランを出すことは結構大変なことである。特に高校問題の場合、様々な立場の利害が複雑に絡み合っているため、問題の解決は一筋縄ではいかない難しさを抱えている。Aという問題を解決するためには、Bという問題を解決しなければならない、Bという問題を解決するにはCという問題を解決しなければならない……といったように次から次へと新しい問題が派生し、結局は最初の問題に立ち戻るといった堂々巡りをしてしまう。実際、作業部会での議論ではこうしたケースはいくどもあった。しかし、空理空論ではなく、現実問題の解決のために頭をあれこれひねることは、私にとっては大変よい刺激になった。

具体的プランを提出する際に、われわれが基本的な視点としたものは、次のようなものであった。①希望者のできるだけ多くを高校が受け入れることを前提にすること、②学校間格差を少しでも縮小する方向を探ること、③高校をめぐる現実の問題から考えること、④改革案は絵に描いた餅にならないように実現性の高いものとするものであった。なかでも高校間格差の是正は、当初から作業部会の主要なテーマであった。個性化や多様化という言葉が氾濫するなかで、あえて高校の抱える現実の問題を出発点として、そこから具体的な改革の方向を明らかにするという立場をとったわけである。

ところで最近の状況を見ると、高校改革に対する熱気も冷めつつあるように感じられる。

一時は各地の自治体でさまざまな高校改革が実施され、マスコミもそれを大きく取り上げて、「高校改革ラッシュ」という言葉も生み出された。

人々の関心が下火になった理由にはいくつかあるが、その一つは、県教委によって高校改革の基本的な方向が確定されてしまい、それが既定事実になってしまったことであろう。作業部会が報告書を出したあと、高校問題をめぐるシンポジウムを藤沢で開催したが、シンポジウムの参加者からいまさら高校改革の問題を議論して何になるのかという厳しい意見が寄せられた。路線がすでに決定されているなかで、高校改革のあり方について議論することにどれだけの意味があるのかという問いかけであった。

もう一つは、新しい制度が何をもたらすのか、実際にやってみなければわからない面も持っていることである。今回の高校改革が神奈川で全面实施されるのは、1997年度からであり、高校の個性化・多様化を基調とする改革が何をもたらすかは、今の時点で予測することは難しい。完全実施の時期が近づくにしたがって、再び高校改革のあり方が注目されるようになると思われるが、現時点ではとりえず静観するしかないといった感じである。

しかし、静観してばかりもいられないので、いま一度神奈川における高校改革の動きをまとめ直し、そこでの問題点や課題を私なりの観点から明らかにしておきたい。

2. 神奈川の高校改革のポイント

(1) 高校改革の動きと内容

まず、神奈川において高校改革がどのように進められ、何がどのように変わることになったのか、この点からおさえておこう。

神奈川での高校改革の動きを推進したのは、神奈川県高等学校教育課題研究協議会（以下、略して高課研）であった。この高課研が高校改革の基本的なプランを作成し、それにもとづいて県教委が具体化の作業を行うという形で高校改革は進められた。しかし、どの自治体でも同じであるが、改革の基本的な方向は、文部省が打ち出した青写真を踏襲するものであった。すなわち多様化・個性化をめざす、生涯学習のための高校改革である。

高課研は、93年の4月に第1次報告を発表し、同年12月には第2次報告を発表した。この報告を受けて県教委は、翌年の7月に入試制度の改正に関する「大綱」を発表し、高校改革の最終的な具体案を明らかにした。

高課研の第1次報告の主な内容は、計画進学率のあり方など高校の進学機会に関するものであった。そして第2次報告の主な内容は、「入学者選抜をめぐる現状と課題」「入学者選抜制度改善の検討の視点」「入学者選抜制度の改善策」の三つであった。

高課研における高校改革の論理を簡単にまとめれば、次のようになるだろう。すなわち多様な生徒の個性に対応するために、高校入試のあり方を多様化し、それと同時に、中学における進路指導のあり方を改め、特色ある高校づくりを積極的に推進すべきだということである。中学における進路指導のあり方を改めるとは、偏差値などの点数によらずに、生徒の個性を十分見極めて進路指導を行うことにほかならない。

高課研の打ち出した報告の中で注目すべき点をあげれば三つある。まず第1は、ア・テストの結果を選抜資料から除外した点である。周知のように神奈川では1968年以来、このア・テストと調査書、学力検査（入試）を合わせた3点セットで合否を判定する、全国でも例のない「神奈川方式」が実施されてきた。このようにア・テストは中学の進路指導上

の重要な資料の機能を果たしてきたが、他方では2年生の段階で進路先が決まってしまう、あるいは点数に依拠した進路指導を生むといった問題点を生み出してきた。いわば高課研は、こうした意見に配慮して、「学習検査の結果については、選抜資料としての扱いはせずに、日常の生徒の学習や教師の指導方法の改善に生かす材料としての活用を図ることが望ましい」（第2次報告、p.4）という方向を明らかにしたのである。

もちろんこうした方針は、文部省の業者テスト追放の動きと密接に結びついていた。文部省は、93年2月に高校入試改革に関する通知を出し、そのなかで業者テスト追放を強く訴えていた。通知が出された当時、県教委はア・テストは業者テストと異なるとし、ア・テスト廃止は当面考えていないという発言をしていたが、マスコミでこの問題が大きく扱われ、文部省も業者テスト一掃に本腰を入れて取り組んだため、高課研もア・テスト排除の方向を打ち出さざるをえなかった。

第2は、受験機会の多様化である。高課研の報告は、生徒にできるだけ選択の幅を広げるために、「受験機会の複数化や、受験生の希望により第2希望校を認めるといった志願のあり方、あるいは再募集のあり方などについて積極的に検討する必要がある」（第2次報告、p.5）と指摘した。そこでは、受験機会の複数化、複数志願制や再募集のあり方など多様な選択肢をあげていたが、最終的には、第2希望校まで認める複数志願制の導入に落ちついた。

この複数志願制とは、志願にさいして第1希望と第2希望の高校2校を志願できるというものである。第1希望の募集人数は、入学定員の80%、第2希望は20%となっている。学力検査の受験は1回で、第1希望の合格者が募集人員に満たない場合は、その不足分が第2希望の方に上乘せされる。受験機会の複数化を実施している自治体は、1994年度の時点で、愛知、大阪、奈良、岩手、長崎の5県あるが、このような形の複数志願制は全国でも初の試みである。

第3は、推薦制の導入である。神奈川ではすでに農業、水産、工業などの専門学科では推薦入学が実施されていたが、高課研の報告は、「他の特色ある学校・学科・専門コース等においても、推薦入学を実施できるようにすることが望ましい」（報告、p.5）と提起した。しかし、普通科の一般コースへの導入については、「なお検討することが必要である」とのべ、早急に導入することには慎重な姿勢を示した。ところが高課研の報告が出されたあと、県教委は普通科一般コースへの推薦制の導入を強引に行おうとした。しかし、教育関係者からの強い反対にあい、再度今後の検討課題にすることになったが、県教委は「特色を突き詰めていけば、推薦制につながる。『検討する』としたのは、適切な時期を見極めるためで、後退したとは考えていない」（註：「朝日新聞」94年7月20日）と発言しており、普通科一般コースへの推薦制を導入する基本的な姿勢を崩していない。

以上、ア・テストの排除、複数志願制の導入、推薦制の拡大をポイントとする神奈川の入試改革の特徴を指摘したが、基本的には文部省の入試多様化路線に沿ったものとなっている。また、なぜ多様化が必要かについても、生徒一人ひとりの個性やニーズが多様化した点に求め、これに対応するために、高校の教育制度や中学の進路指導、そして入試制度を多様化すべきだという論理を展開しており、この点においても文部省の改革の論理と軌を一にするものである。

(2) 高校間格差の問題への取り組み

第14期中教審答申が、高校間格差の問題を「教育の最大の病理」とみなしたことはよく知られている。しかしそれは、高校問題の中心課題についてそれなりに正しい指摘をしていたにもかかわらず、その解決策に関しては多様化・個性化というピントはずれの方向性を示していた。それでは神奈川県においてこの高校間格差の問題はどのように扱われたのだろうか。

まず高課研の報告にしても、県教委の「改正大綱」にしても、高校間格差の問題を真正面から取り上げて論じている箇所は見当らない。しかし、だからといって、全くこの問題が無視されているわけでもない。公的な文書の中では触れられていないが、新聞報道などをみると県教委の意向が非公式に明らかにされている。つまり県教委なりの格差是正のすじみちが用意されていたのである。

たとえば、「総合的な選考」の意義について、県教委は次のように説明している。「受験生を成績順に並べて取るのではなく、全員がいったん同列にあると考え、それぞれの高校が教科とか、調査書の特記事項とか、あるいはこれから打ち出そうとする『特色』などに照らして受験生の個性を活かすように選考してもらう。これによって、高校は学力で入った生徒と、それ以外にも着目された生徒がミックスされる。長い目で見て格差是正の方向に向いていくのではないか」（「神奈川新聞」94年7月22日）。あるいはこうした発言もある。「新しい制度では、各高校がその『特色』に応じて、生徒を学習成績や入試の結果以外を評価して選べる仕組みでもある。したがって各高校には、第1希望どおり合格してきた生徒と、第1希望でも点数だけで合格した以外の生徒と第2希望で合格した生徒で混成される。後者は学校の特色に合致しているとして選抜された生徒だから、そこでは学校一律の偏差値が通用するだろうか」（「神奈川新聞」94年7月26日）。

県教委の意向によれば、学校の定員の半分を学力を基準にして決定し、残りの半分を学力以外の要素を考慮して決定する。これによって、学校のなかに多様な生徒が混在し、これが長い目でみれば、学校間の格差是正に役立つというものである。今回の高校改革が多様な個性と生涯学習論への対応を大きなねらいとしたものであることはいうまでもないが、新聞記事にみられるように、県教委自身が高校間格差を重要な問題と認識し、入試の多様化策によって、その是正を図ろうとしている（より正確に言えば、図れるだろうと期待している）ことを明言した点は、注目すべきである。

偏差値という一元的ものさしによって格差と序列が生じるとするならば、数値によらない入試のあり方をめざすことが必要となる。ア・テスト排除や学力のみでない「総合的選考」の強調は、そうした方向の具体的あらわれとみてとることもできる。県教委によれば、数値によらない入試とは、子どもの多様な適性・能力を見極めて、それにふさわしい特色ある高校とのマッチングを行うことである。適性・能力だけでなく、興味・関心・意欲・態度など、いわば数値化しにくい要素まで含めて生徒の全体像を把握して、その個性に最もマッチングする高校を選択することである。そのためには当然、中学校の進路指導のあり方が問われてくるし、他方では、高校における特色の中身が問われてくるといえる。

このようなところから、県教委の発表した「改正大綱」には、「別紙資料」としてわざわざ、「中学校における進路指導について」と「高等学校の特色づくりについて」という文書が添付されている。前者の文書では「これからの進路指導においては、数値のみに重きを

おいた進路指導ではなく、生徒一人ひとりの個性や高等学校の特色など多様な視点に基づいた進路指導をしていくことが大切である」（「改正大綱」p.10）とのべ、進路指導の具体的な方策が書かれている。また後者の文書では、「今後の特色づくり」として、いくつかの実践例があげられている。普通科と職業科を統合したような「総合学科」、美術・音楽・書道など芸術関係の科目や、英語やフランス語、スペイン語などの語学系を集める「類型の設置」、あるいは2つの高校の間で相互の施設を利用したり、多数の選択科目を2校の生徒が共通して学ぶ「学校間連携」などの、具体例があげられている。そして各高校は、94年度中に特色づくりの考え方や、取り組みのあり方をまとめた「魅力プラン」を作成するように指示している。

3. 神奈川の高校改革で何が問われているか

これまで神奈川の高校改革の内容についてみてきたが、その主なねらいは、生徒の多様な個性に対応するために高校を多様化すること、そしてその結果として高校間格差の是正がもたらされる（かもしれない）ということである。しかし、そのように期待どうりにいくだろうか。以下、神奈川における今回の高校改革の問題点をいくつか指摘しておこう。

まず第1は入試制度の複雑さである。その一例として、選抜における選考方法の変更をあげることができる。ア・テストを選抜資料から除外することに伴って選抜の選考方法が変わり、調査書の評定と学力検査の結果だけで決まる場合とそうでない場合の2通りのケースが生じることになった。実はこの点の仕組みが複雑で、複数志願制の問題ともかかわって、今回の入試改革が「複雑すぎる」として評判の悪い原因になっている。

たとえば普通科の一般コースを例にとると、第1希望の合格者の人数は、定員の80%とされている。そしてその第1希望のうち、70%が調査書の評定と学力検査の結果で合格が決まり、残り30%の合格者は、調査書の評定と学力検査の結果に加えて、「調査書の評定以外の記載事項を活用して総合的に選考する」となっている。また、第2希望の選考方法は、第1希望の残り30%の合格者の決め方と同じであるとされている。つまり、全体の56%が、調査書の評定と学力検査の結果のみで決定され、残りの44%が、調査書の評定以外の記載事項も加味して総合的に決定されるというわけである。

こうした選考方法は複雑であるだけでなく、第1希望は定員の80%に絞られるため、その枠をめざして受験競争が前よりもいっそう激化する可能性がある。逆に「課題集中校」では第1希望者が集まらず、第2希望者ばかりとなる可能性があり、これで本当に不本意入学の問題が解決するのか疑問である。

第2は、高校の特色づくりの内容があいまいな点である。とりわけ普通科でどのような特色が出せるのか、高校現場の教師にとっても深刻な問題となっている。特色として進学を売り物にする高校もあらわれるだろう。また普通科に専門コースを設置することが謳われているが、たとえ専門コースをつくっても、恩恵を受けるのは1クラスか2クラスにすぎず、それで特色といえるのかといった問題点もある。

もちろん入試制度に限っていえば100%完全な改革などありえないのだから、こうした問題はつねに生じてくるだろう。ここではさらに高校間格差とかかわって、もう少し本質的な問題について指摘しておきたい。

まず第1は、生徒と高校とのマッチングの問題である。県教委は、偏差値という一つの

尺度で高校を決めるのではなく、生徒の個性を重視して、それにふさわしい特色をもつ高校を選択するやり方に転換すべきだとしている。しかし、生徒の個性と高校の特色とはうまく対応するのだろうか。この種の議論では、生徒の個性が多様化していることが前提にされているが、もしそうであるとすれば、うまくマッチングするには生徒の個性の数だけの学校・学科・教育内容が準備されなければならない。当然これは不可能である。したがって、生徒の多様な個性を類型化し、その類型を特色とする高校に生徒の方が合わせるとい形にならざるをえない。ただしその場合、生徒の個性や高校に対するニーズがいかなるものかを事前に知っておかねばならない。ある高校の校長が「マーケティング調査もなく、新しい商品（特色）は作れない」（「神奈川新聞」94年7月20日）と語っていたが、県教委は生徒のニーズを調べる必要性についても方法についても一切触れていない。つまり「一人ひとりの個性を大切にする高校選択」という聞こえのよいフレーズだけが一人歩きをしているのである。それは実際にやろうとしても不可能に近いことがらである。生徒の高校に対する多様なニーズといっても、基本的には社会のあり方に規定されていることを考えれば、社会のニーズや社会の変化に対応することを特色とする高校がつくられていく可能性の方が大きい。

これと関連してもう一つ、たとえ生徒の個性と高校の特色との対応がうまくいったとしても、それが果たして高校間格差の是正に結びつくのかという問題がある。県教委の構想では、高校の定員の約半分の学力で決定し、残りの半分の学力以外の要素も考慮した総合的な評価で決定すれば、さまざまな個性の生徒が混在するようになり、将来的には格差是正につながるというものであった。こうした可能性を全く否定するものではないが、このような事態が可能となるのは、序列の構造のなかで上位に位置づけられた一部の「進学校」だけである。下位に位置づけられた「課題集中校」では、学力のあるものはまず受験しないし、また学力に自信がないものも、第1希望はそれより上位の学校をねらうようになるから、結果的には第2希望で不本意ながら入学した生徒ばかりの同質集団になってしまう。

生徒の個性を考慮した選考方法で学校間格差を是正しようとしても限界があるといわざるをえない。学区制と選抜制度のあり方を改革しなければ、格差の問題を根本的に是正することはできない。神奈川では、一部の学区を除いてその大半が大学区となっており、また選抜方式は単独選抜制をとっている。今回の高校改革では、こうした学区制や単独選抜制には全く手が加えられておらず、入試の多様化と特色ある高校づくりがもっぱら中心課題とされている。一つの学区に高校の数だけの格差と序列が存在し、数が多ければ多いほど、上位校と下位校との学力の差も大きい。この格差を縮小するためには、個性にもとづく入試方法だけでは限界があり、学区の縮小をできるだけ図ること、単独選抜にみられるような「学校選択の自由」に一定の制限を加える措置が必要である。

（桜美林短期大学助教授）

教文研の相談活動を考える



教育相談室専任カウンセラー 内 山 淳

1. 全国の教組による相談活動状況に思う

(1) 全国の教組による相談活動実態 (1994年10月日教組相談室調査：「教育相談通信No.11」による)

①相談室設置状況…72単組中16県教組・7高教組、内10年以上の活動実績13単組

- ・設置してないが実質相談に応じているところ…6単組(千葉高・埼玉高・鳥取・鹿児島高・兵庫高・京都)
- ・相談室なし(49単組)の事情…手が回らない(青森)再建組織動きがとれてない(青森高)設置希望あるが、組織率低く難しい(栃木)再建組合(岐阜)力量不足(京都)組織率低い(山口)専従一人(徳島)県段階ではない(奈良)必要感あるが難しい(埼玉)組合事務所計画中(和歌山)教育開館設立準備中(茨城)重要性は認識、財政上きつい(佐賀)早く設置したい(香川)県教育サービスセンターと連携しているので、独自の設置考えない(愛知)教研時実施(長崎)社教センターとかかわっていききたい(大阪)退職者組織との協議考慮中(高知)相談室設置は必ずしも有効と思えない(宮崎)発展的解消考慮中(新潟高)

②設置主体・担当部

- ・教組・教文部…11単組(秋田・宮城・長野・福井・沖縄・岩手高・新潟高・鳥取高・熊本高・宮崎高・沖縄高)
- ・教文研・総合研・民研・教育推進センター等…8単組(群馬・神奈川・兵庫・新潟・熊本・山形・鹿児島・岡山)
- ・退職教職員協…2単組(滋賀・大分)・校長会・PTA等との共同設置…1単組(山梨)
- ・主任手当拠出金管理運営委…1単組(宮城高)

③相談室の構成

- ・相談員数(特別相談員を除く)…1人：2単組(山形・福井)、2人：1単組(兵庫)、3人：2単組(宮城高・新潟高)、3～4人：1単組(岡山)、6人：3単組(神奈川・長野・沖縄)、7人：3単組(新潟・熊本・熊本高)、8人：1単組(鹿児島)、9人：1単組(山梨：支部毎1名)、10人：2単組(宮城・宮崎高)、11人：1単組(沖縄高)、36人：1単組(大分)、総合計：137人

内 常勤数合計…34人(24.8%)：置いている単組 5(宮城高・熊本・福井・大分・鹿児島)

非常勤数合計…80人(58.4%)：11単組 区別不明…23人(16.8%)

- ・教文部長・執行部で対応…4単組(秋田・群馬・岩手高・鳥取高)
- ・事務局員数…1人：4単組(山形・熊本・宮城高・熊本高)、2人：2単組(宮城・宮崎高)、3人：2単組(神奈川・鹿児島)、5人：1単組(新潟)、9人：1単組(山梨：

支部毎1名)、11人：1単組(大分：研修員を含む)

④相談の取り扱い、受付、すすめ方

- ・電話相談…ほとんどすべての教組
- ・面接も受ける…16単組
- ・面接中心(山梨)
- ・手紙…10単組
- ・出張訪問も(大分・熊本高・沖縄)
- ・FAX(奈良・群馬)
- ・箱庭療法(福井)
- ・相談というより教育に関する提言などを聞く(群馬)
- ・入試110番(埼玉高)
- ・就学相談(京都)

⑤過去1年間の相談件数

- ・100件以下…10単組(奈良・岡山・群馬・山形・秋田・沖縄・宮崎高・鳥取高・岩手高・沖縄高)
- ・200～…7単組(熊本・鹿児島・兵庫・福井・新潟・熊本高・新潟高)
- ・300～…6単組(大分・神奈川・山梨・長野・宮城・宮城高)

⑥運営経費

- ・教組予算…6単組(奈良・長野・沖縄・新潟高・宮崎高・沖縄高)
- ・主任手当拠出金…4単組(宮城・福井・宮城高・熊本高)
- ・研究所等予算…6単組(神奈川・兵庫・新潟・熊本・鹿児島・岡山)
- ・関係団体分担…2単組(山梨・大分)
- ・特になし(ボランティアを含む)…5単組(秋田・山形・群馬・岩手高・鳥取高)

⑦相談活動上の重視事項として挙げていること(複数回答)

- ・スタッフの確保・質の向上…6単組(秋田・神奈川・山形・群馬・大分・鳥取高)
- ・相談者側に立つ(共感等)…7単組(熊本・鹿児島・宮城・新潟・長野・岩手高・熊本高)
- ・学校の理解(連携)…5単組(長野・福井・岡山・沖縄・岩手高)
- ・出張相談…1単組(岡山)
- ・プライバシー保護…3単組(神奈川・大分・宮崎高)
- ・予算確保…1単組(鳥取高)
- ・相談の継続…1単組(沖縄)
- ・広報…6単組(神奈川・山形・山梨・兵庫・大分・沖縄)
- ・部屋・設備の確保…2単組(神奈川・鳥取高)

(2)「全国の相談活動実態」が物語ること

1994年12月、日教組主催の「第1回教育相談全国研究集会」が開かれ、各地の相談員ら40余人が参加、相談室の設置運営・登校拒否・子どもの人権などについて話し合いがもたれた。時あたかも愛知県の中2年生の「いじめ」による自殺事件が朝報道された日であったので、参加者の緊張と問題意識はいやが上にも盛り上がりを見せ、「相談活動の活発化」という集会目的に向けた意見交換は非常に活発であった。集会に参加して得た実感も含めて、全国の教組の活動実態から感ずることをいくつか検討してみたい。

①貧困な「教組の教育相談活動」

「いじめ問題」が全国的に取り沙汰され、文部省の対策通知や各界の提言の中、教育現場が「相談体制の充実」に力を入れはじめたのはもう10年も前のことであった。その必要性への対処に早くから取り組み相談室設置を実施した教組も数多く、1980年代前半に開設した教組は日教組教育総研をはじめ15単組(秋田・岩手高・山形・宮城・宮城高・神奈川・山梨・新潟・福井・兵庫・岡山・熊本・熊本高・沖縄・沖縄高)に上っている。しかしその後の開設状況の伸びは遅く、80年代後半は5単組(新潟高・長野・鹿児島・大分・鳥取高)90

年代に入って3単組（群馬・新潟・宮崎高）であり、しかもそれぞれの「相談室」の内容実態は、後述のように決して発展状況とは言えず、むしろ「必ずしも有効と考えない」とか「相談というより提言等を聞く」「今後も考えていない」という声すら聞かれる。教組の組織率の低下傾向が「相談活動の活発化」にブレーキをかけている悲しい実態も否めない。そこに、昨年の「いじめ自殺」以後全国を揺るがしている「いじめ対策＝子どもを守る相談対応」の大合唱である。文部省もあわてて「焼石に水」的発想の「カウンセラー配置」を含めた「いじめ対策」の通知（いじめ対策緊急会議報告と総点検結果：1995.3.13.）を出したが、教組としては各地の教研活動の中で「特別分科会」「特別委員会」などの形で様々な取り組みはあるものの、積極的な「相談活動対策」はあまり聞かれない。

一般の「教育相談活動」としては、児童相談所・教育委員会関係の教育相談室・少年警察等、公的な相談は全国どこへ行っても必ず行なわれているという状況はあろう。しかしそこには、法的処置はともかく公的な活動故の制約や感情的な「相談しにくさ」もある。長期の継続的関わりも難しい面をもつ。また、病院や民間の「治療的な相談」は相談者に経済的負担を余儀なくさせる隘路や「精神的な病気？」「世間体が…」と言った抵抗がある。その点その中間的存在の教組による相談活動は、経済的負担や継続の制約・学校への遠慮も少なく、また何よりも「秘密保持」や「子どもの側に立つ」という相談原則が保たれやすいという面で、本当に「役に立つ教育相談活動」が行なわれる利点をもっている。今こそ「いじめ・不登校」対策としても、教組だからこそできる「子ども・親そして現場教師に役立つ相談活動」の構築に力を入れるべきだと思うのだが、教組による相談活動の現状は心細いかぎりである。

②相談室の名称（相談対象問題も含めて）

日教組の教育相談室が「親と子の教育相談室」と表示しているので、「親と子の…」と名乗っているところが一番多い（5単組：山形・新潟・熊本・鹿児島・沖縄）。神奈川のように「教師の…」を付けているところは意外に少ない（3単組：神奈川・宮城・岡山）。「ホットライン」「教育110番」「なんでも…」「心配ごと…」などのネーミングもあるが、その他は単に「教育相談所」「教育相談室」「相談センター」などである。教組が開いている「相談室」であれば、現場教職員の相談に応ずるのは当然過ぎることなのだが、教職員が直接クラスの子どものことで相談することがどれだけあるのだろうか。まして教職員が自身の悩みや心配事を相談することがどれだけあるのか気になるところである。最近「教師のメンタルヘルス」への要望がふえ、県によっては教育委員会として医師によるケアの体制が考えられているようであるが、教組としても「教師の精神面への援助」は是非とも考えたいことである。もっとも、そのための相談時間帯の設定・専門家の参加ははじめ何よりも職場を離れて相談しにくい状況（例えば会議などの多忙さ、担任としての休みにくさ等）などの解決が先決という隘路は否めない。ともあれ、前記のような「教組の相談室」の特質や、「いじめ」「不登校」など親や子ども自身の緊急避難場所的相談要請に応える「相談機関」としての役割は、いまこそ必要とされていることに違いない。

③設立主体と担当部・経費負担

設立主体と担当部は「教組・教文部」が圧倒的に多い（11単組）。教育文化研究所・教

育文化総合研究所・国民教育研究所・教育運動推進センター等の別組織をとっているところが8単組（神奈川・群馬・兵庫・新潟・熊本・山形・鹿児島・岡山）あり、中には「主任手当拠出金管理運営委員会」というのがあがるが、経費の捻出に「主任手当拠出金」を充てているとしているところは多いと思われる。しかし、設立主体が「教組・校長会・教頭会・PTA・県教委」というところ（山梨）や「女性部OBのボランティア団体と協力」（新潟）などもあり、経費負担に関しても「特になし・計上なし」（秋田・岩手・山形・群馬・鳥取高）「教組・組合費・関係団体の援助」（山梨・新潟高・奈良・大分・宮崎高・沖縄・沖縄高）など独立設置の「相談活動」としては心細いものがある。

④相談室の構成

相談員は、仕事の性質上「非常勤」が「常勤」より多いのは当然と思うし（専門分野を持っている人の場合他に勤務主体がある人が多いであろう）、人数も少な過ぎても多過ぎても、数への対応・対応の質・専門性等の面でそれなりの活動になると思うので、5～10人の「非常勤」1、2名の「常勤」位が妥当な線であろうか。ただ最近の相談要求が内容的に深刻化・複雑化してきていることから、相談員の質（相談対応の専門性）を高めることや、種々の分野（医学・法律・心理・福祉等）からの応援が得られるようなシステムづくりは是非とも必要である。その点で、経費の関係はあるにせよ、相談対応者が「教組役員（執行委員・教文部長等）」だけとか「スタッフなし」「構成員あいまい」などというところがあり、「医師・弁護士・大学の研究者」等の非常勤を揃えているところが2単組（神奈川・大分）だけなのは、まだまだ教組の「相談活動」への考え方の軽さを思わせられる。

事務局員の構成については、室長（相談員兼務でもよいと思う）以外に最低一人は…と思うが、経費負担の面で教組関係者の兼務も止むを得ない気はする。

⑤相談事項の取り扱い、受け付け方法、相談のすすめ方、相談件数

「電話相談」は設備の関係から経営し易いし、相談者側にとっても、顔・姿を見せず恥ずかしさの抵抗は少ないし、時間制限や回数制限も余りなく、気に入らなければすぐに中断できる点などで一番自由が保障されているというメリットも持つ。そして相談対応の質を高めれば「継続治療」的機能も相当期待できると思うのだが、逆に気楽さゆえの「相談斡旋・紹介や簡単な指示的対応」といった専門性軽視の傾向、また「安易な相談員の採用」など相談の質の低さも多く見られるのではないだろうか。それは、各地区教組の年間の相談件数が「相談活動を行なっている」と言うには余りにも少ないところが多く（年間100件以下10単組の件数：1、3、5、6、20、26、28、41、45、80各件）、中には「力量不足」「県のセンターを紹介する」「開店休業状態」などと調査に答えているような明らかに「軽い相談」になっている単組がみられることでもわかる。また、「不登校・いじめ」に対する教育相談機関の対応の不満がこの所あちこちで指摘され、その分民間や親の会の手による「フリースペース」「こどもの居場所」等での相談活動が活発化していることがそれを物語っていると言えよう。

最近の「不登校・いじめ」「学校教師問題」「障害児問題（特に最近文部省の調査研究協力者会議が中間報告をまとめた学習障害問題）」など複雑・深刻化してきている問題の相談対応は、丁寧な継続的相談が要求されるし、その数は上昇の一途である。それには当然のことながら、親子（それも両親、家族ぐるみでの）の「継続面接」による対応が

長期にわたって数多く要請されていることは間違いない。「電話相談」で始まった関わりが1回で終わることなく「面接相談」に継続し、専門家を交えた複数の力量のある相談員のチームワークと丁寧な対応が、親子・家族はもとより、学校現場の教職員のどれだけの手助けになることか。そのためには、前記のような数少ない相談数・貧弱な相談スタッフの教組の相談活動は緊急に何とかしなければならない気がするのである。

なお「手紙による相談」は、時代相を反映して減少していることは当然で、変わって「FAX」「パソコン通信」「無線」等のメディアでの相談も登場する様相はあるが、これはまだ「FAX」が2単組（群馬・奈良）受けている報告はあるが数はわからない（日教組相談室でも半年で4件だそうである）。

さらに、直接の個人相談とは別に、「相談教室」「相談学習会」と言った形のグループワークでの相談活動が考えられているところも見られるが、その実態は明らかではない。今後とも「研修」への相談的関わりはもっと考えられてもよいことであろう。

⑥相談活動上大切と思われること

全国の教組の相談活動としては、ここまでに記してきたようにまず「組織の確立」が土台として大切であり、そこで「費用の確保」「部屋・設備の確保」が裏付けられ、相談員が確保できれば一応「相談業務」が運営できるわけであろう。しかし、相談活動を続けてきている各単組のスタッフが、重要事項として一様に挙げることは、第一に「スタッフの確保・質の向上」であり「相談者の側に立つ」「共感的に理解する」といった「相談姿勢」にかかわることである。「プライバシーの保護」「相談の継続」等とも合わせて、そのことが「役に立つ相談活動」「相談活動の活性化」につながる基本であることは間違いない。また、情報化時代の現代、「広報活動（PR）」も確かに重要なことは言うまでもないが、それより地道で丁寧な「継続対応・面接」を心がけることで、いわゆる「口コミ」による相談の増加が本当の「信頼されている相談」を証明することも忘れてはならないと思う。

2. 神奈川の教文研における相談活動を検証する

(1) 神奈川の教文研相談活動のあゆみ

1980年11月、「神奈川県教育文化研究所」が発足して今年で満15年になるが、その事業の一つである「親と教師の教育相談」は、翌1981年7月から次の4点を特徴として始められた。

- ①「親や教師のため」と限らずに広く、県民のために教育相談活動を行なうこと
- ②どのような教育問題についても、その相談に応ずること
- ③相談は「手紙によって受付けて、手紙によって回答する」こと
- ④相談ケース一つ一つについて、原則として相談委員会で検討すること

教育学・心理学・医学などの専門家に現場の教師や地域の教育活動にかかわっている主婦まで加えた、幅広い相談委員の検討に裏付けられた「手紙による相談活動」は、それだけ誠意に溢れたユニークな出発ではあった。

しかし開設後6ヶ月の相談件数18件。「これでは県民の要請に答える活動としては貧し過ぎる」と言うことで、翌1982年7月から「電話による相談」が開始された。以来、この相談室の方針①②に、「特に審議を要する場合、委員会による検討と回答担当者分

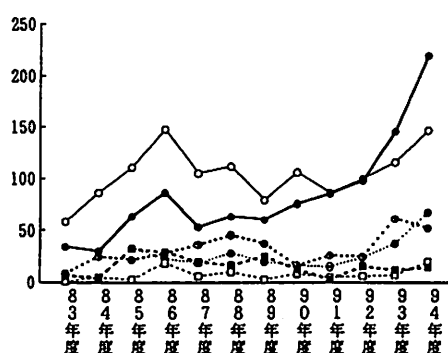
担をして対応する」という特徴を残して、手紙と電話による丁寧な相談活動が展開されてきた。専用電話2本も設置され、学校現場へのPRと1時間以上に及ぶ丁寧な電話対応が定着すると、相談員の増強の必要に迫られ、1991年度から専任の相談員（専任カウンセラー）が置かれるようになり、1993年度からは1日2人の相談員体制（相談員6人）が確保されるようになった。それに伴い、相談対応も電話・手紙・面談と多岐にわたるようになり、継続相談が大幅に増えると同時に年間相談件数はうなぎ登りの上昇を示し、学校現場の教師との連携活動もなされるようになってきた。そして、相談委員会（月1回開催：委員は、直接対応の6人の相談員に教育学・心理学・社会心理学・哲学の大学の研究者、児童精神科医）のケース討議に裏打ちされた「きめ細かい丁寧な相談」が、本相談室の特徴として定着してきたと言えよう。

またこのような相談室の活動が、神教組の組織力をバックにした「主任手当拠出金」の有効利用としての独立研究団体「神奈川県教育文化研究所」の活動の一環として、県民・教職員のニーズに役立っているという事実は、他県教組に誇れることと言っても過言ではないであろう。

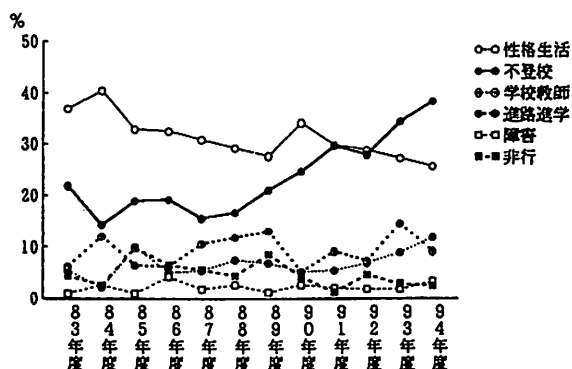
(2) 神奈川の教文研相談室の対応ケース状況が物語ること

ここで、相談室の活動を裏付ける相談対応数、相談内容、継続・面接待対応数等の12年間の変化（特に相談室充実後の最近4年間の変化）を少したどってみたい。

グラフⅠ. 年度別相談種別対応数の変化(ケース数)



グラフⅡ. 年度別相談種別対応割合の変化(年度ごとの%)

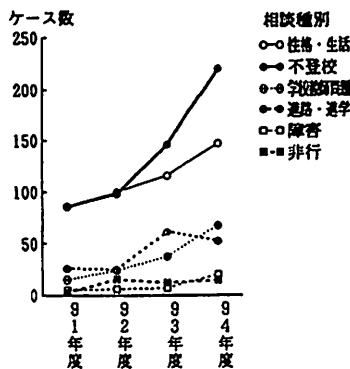


まず、グラフⅠ・Ⅱは12年間の「相談内容別年間対応数」の変化である。最近4年間の対応数の急増と86年の対応数の特別な多さの影響はあるにしても、全般的に見てまず

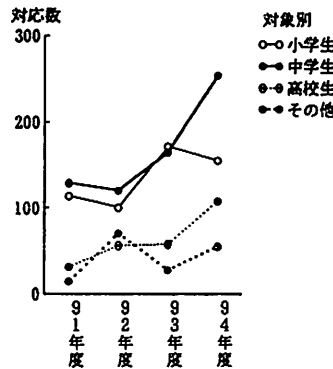
- ①「不登校」、「性格・生活上の問題」の相談が主流を占めている。
- ②「不登校」相談の1980年代後半以後の増加状況が特徴的である。
- ③他の相談内容については、多少の変化はあるが、①②に比べて横這いの（恒常的）な相談数である。

などが考えられる。本来当相談室が対象としている子どもが公立の小中学生であるところから、これらは当然のことではあるが、それにしても「不登校」の上昇ぶりは深刻なものを感じさせる。小学生の場合、以前は「性格・生活上の問題」として考えられる程度であったものが、最近では明らかに「不登校」問題とははっきり言えるものに変わっている状況が伺える。「性格・生活」のパーセンテージの下降はそれを物語っている。

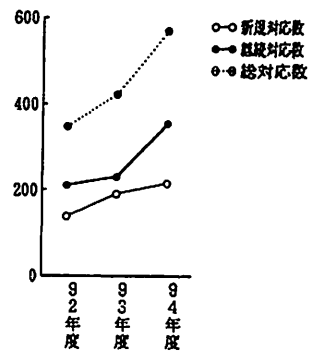
グラフⅢ.最近4年間のケース変化
(相談種別)



グラフⅣ.最近4年間のケース変化
(対象者別)



グラフⅤ.最近3年間のケース変化
(継続対応状況)



表Ⅰ. [最近3年間の継続・面接・手紙対応状況]

	総対応数	1回だけの対応数%	2回以上の対応数%	面接対応数(内数)	手紙対応数(内数)
1992年度	349	138(39.5%)	211(60.5%)	24	3
1993年度	424	145(34.2%)	279(65.8%)	48	6
1994年度	572	167(29.2%)	279(70.8%)	50	3

グラフⅢ・Ⅳは、最近4年間のケース状況を取り出したものであり、各年度の総対応数は、それぞれ91年度：291、92年度：349、93年度：424、94年度：572、という上昇ぶりであった。また、92年以降では継続的に対応した数と1回だけ対応した数に分けて見た状況と面接数を表とグラフにしてみたのが表ⅠとグラフⅤである。

これらの資料から考えられることでは、次のようなことが挙げられよう。

- ①「不登校」「性格生活」問題数の上昇もさることながら、「学校・教師問題」の上昇が大変気になる。
- ②「中学生」ケース数の増加は、「不登校」状況の中心が中学生であることから当然だが、この所「高校生」対象の増加が目立つ。
- ③相談対応が年々1回で終結する数が少なくなり、2回以上継続する相談が増加している。(昨年度、1回だけの対応は3割を切っている)

①については、担任教師・部活顧問・学校等の「体罰」を含めた子ども・親への対応の不満がこの所特に感じられ、その裏には「いじめ」問題・「不登校」の原因問題が絡み、複雑・深刻化している学校での子どもの状況が見えるようである。深刻な事例はまた別のところで検討したいが、このような数字の上からも、管理的、閉鎖的で息苦しくなってきたしまっている「学校の改革」が急務であることを叫びたい気持ちがする。

②の「高校生」対象の増加は、当相談室のPRが公立小中学校への「チラシ」が中心であることから、兄弟関係の相談、ロコミによる相談、いくつかの「不登校問題」の書籍による紹介など、教文研の相談活動への「信頼」につながっていることとは言えないだろうか。この2年ばかりの間に、他県からの電話相談が時々あり(昨年度10件：東京・埼玉・静岡・千葉・茨城・兵庫等) 大学生や母親自身の問題(人生相談的なもの)も増えてい

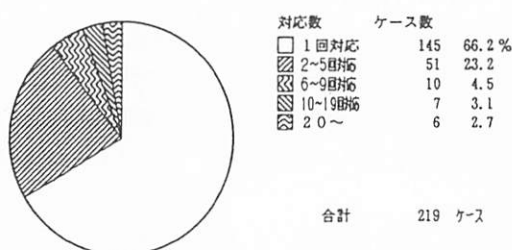
る。

③は、相談内容が「不登校・子育て・学校問題・学習障害」等1回の相談では到底解決どころではないような複雑・深刻な問題が増えていることを強く感じる。それは数字として記録されていないが、1回の電話相談の時間が1～2時間以上に及ぶことが多くなっているとどの相談員も語っていることでもわかるし、複数の相談員が同一ケースに対応するため「記録」の内容が重要な連携・検討資料となっていることでも言える。そして、継続の中にはより深い関わりを求めている「面接対応」が必要なケースも多く、場所・時間のやり繰りに苦労しながらも年々多くならざるをえない状況を感じている。

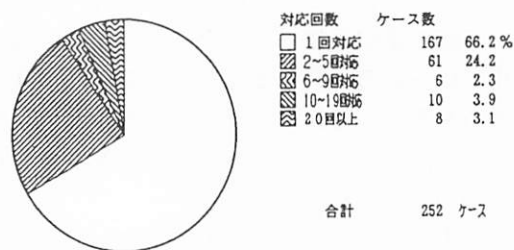
表Ⅱ [1994年度 面接状況] (延 50回)

面接回数	9回	5回	3回	2回	1回	合計
人 数	1	1	4	5	14	25
相談内容	不登校	非行 (異性交遊)	性格生活 2 不登校 2	不登校 4 生活指導	不登校 2 進路進学	性格生活 5 学校教師

グラフⅥ. 1993年度 継続回数別年間対応数



グラフⅦ. 1994年度 継続回数別年間対応数



表Ⅱは、1994年度内での面接対応数で、この中には電話も入れて93年度から延べ92回も対応してきたケースはじめ、延べ20回以上の対応ケースが3、10回以上の対応ケースが3、というように面接のみの対応というのではない。そして、面接対応は距離的・時間的に言って横浜市内の居住者が多くなってしまうが、中には足柄上郡・相模原・伊勢原といった遠隔地からのもあり、もっと各地域での相談活動を構築する必要性を感じさせる。グラフⅥ・Ⅶは、93・94年度内だけでのケース数を対応回数別に見たものであるが、93年度から94年度にかけてだけでも継続回数の増加しているケースが増えていることがわかる。このような相談状況の変化の底流に、問題の深刻化・人間関係の希薄化が思われて寒々とするものがある。

また、継続・面接対応の増加は、相談対応を丁寧に、より「専門性」を高めるように努力してきた結果として、当然起こってきたこととも言えるのではないだろうか。前のところでも書いたことだが、「不登校」「いじめ」問題の深刻化を招いた原因に、「学校の管理的対応はもとより、教育関係の諸相談機関の対応の悪さがある」と指摘されてきている中で、「相談者の期待に応え得る相談対応」を目指す必要をますます強く感じている。

IV

エッセイ

阪神淡路大震災から何を学ぶか

— 防災についての聞き書きから —

研究評議員 木谷要治



2月16日栄区公会堂で、都市防災研究所の重川希志依氏の「防災講演会」があった。年度末の公務多忙のため実施の調査ができず、もっぱらテレビ報道のみで大震災から防災の智恵を学ぼうと心がけていたのであるが、震災直後の実地の調査結果からの防災のすすめを聞くべく講演会に参加した。区役所新館ロビーに展示してある現地の写真への人々の関心の様子などから、参加者の多いことは予感できたが、実際に始まってみて驚いた。少なくとも600人は入れる位の講演会場は聴衆でいっぱい。相当な関心の高さである。

講師の重川氏は、まだ学生といっても通りそうな若々しい女性。かねがね都市防災の立場でいろいろ発言してもマスコミは聞く耳を持たなかった。その結果がこの惨状だ。もっと声を大にして伝えれば良かった、という自責の念を感じずということを冒頭に云われたが、現地で撮ってこられた写真を使いながら非常に情熱的に現地の惨状とこれからの防災について語られた。

以下は、お話の中で印象に残ったことを書き連ねたものである。()内は筆者の註である。

西宮から道路にそって長さ25キロくらい延々と壊れた家の残骸が続く。テレビでは一部しか写らないが、東京でいえば東京駅から北にとれば吉祥寺、西でいえば川崎を越えて横浜に入るあたりまで、そういう状況であった。防災研究のグループは誰も口をきくことができなかった。とにかく壊れ方がすさまじい。1階は潰れている。かつて木造は地震に強いといわれていたが、30年、40年経過すると老朽化し風化するのではなからうか。木造で20年30年経った家は耐震診断が必要なのではないか。

神戸市役所は、新館はガラス1枚割れていなかった。全く無傷であったが、すぐ近くの昭和32年建築の建物は5階のところが潰れている。幸いまだ出勤前であったので、掃除にきていた女性一人の犠牲であったが、この潰れた階は水道局、下水道局が入っていた。すべての図面は潰れた階に入っている。今も取り出せないのも、水道、下水道の復旧の大きな妨げになっている。(2月中旬頃取り出された)壊れなかった方の無傷の建物は、しかし、その後避難民が入り込んで、空間を占拠している形になっている。食事など避難民も職員も同じ扱いなので、これはさまざまな形で復興業務の妨げになっている。風邪も流行ってきており、悪い条件の中で、市役所の職員は悪戦苦闘している。一方、兵庫県庁は、建物に入ろうとする避難民を峻拒し避難所に誘導したので、神戸市役所とは対症的な状況になっている。

役所の建物にも大きな被害があった。消防署も被害があり、郵便局もNTTも。いざという時お役所はお助けマンになると思っていたら間違いで役所も被害者なのである。大きな災害の時は頼りにならない。職員も被害者。建物も壊れている。

企業と地域住民と全国からのボランティアが実際に活動した。(自衛隊も) コンビニエンスストアの〇〇〇〇は全部の店が開いていて商品は何でも豊富にあった。

道路端の街路樹が意外に強さを見せていた。倒れかかった家をたいして大きくもない街路樹が支え道路に家が倒れこんで道を塞ぐのを防いでいた。しかし道路は大渋滞で動きがとれなかった。

貼紙が多数見られた。今日ハイテクの通信手段が多数あるが、最も役に立ったのは、この原始的な通信手段であった。

全国から建築士のボランティアが集まって壊れかかった建物の危険度を判定し、危険と判断されたものには、赤い紙を貼っていたが、建築士の数が少なくて、実際に判定の紙を見たのはわずかに2件であった。

コンビナートも被害を受けて、各種の塔は傾いていたが、火は出なかった。油の流出も無かった。ガソリンスタンドもかねがね地震の時には最も恐れ存在と思われていたが、安全性は高かった。周りはすっかり焼けているのに壁のペイントも焦げていなかった。どこかのガソリンスタンドもちゃんと残っていた。厳しい安全基準に縛られたところが安全であったということである。

建物のガラス、自動販売機などは危険と云われていたが、実際危険である。早朝でほとんど人通りが無かったからよかったが、昼間であつたら大事であつたろう。分厚いガラスの破片が車道の方まで飛散していた。神戸新聞社の窓という窓はガラスは全部落ちていた。こういう建物がかなり多数あった。長い年月の間にパテが固くなり、きしんで割れて落ちたのだと思われる。自動販売機は倒れたのをみると、足が小さくボルトで止めてない。ボルトのあるものもあるが短い。役に立たない。早朝であつたから幸運であつた。

結局100ヘクタールくらい焼けた。防火水槽に水が無く火は自然に鎮火するまで待つしかなかった。耐火の建物、広い道路が火を止めた。市民の力で延焼を食い止めた所も何ヵ所あった。ある町では40トンの防火水槽があった。町会長さんは、瓦礫の山になった町の下にまだ何人かの下敷きになって死亡したままの人がいることを町会の人に話し、これらの方々の死骸がこのまま焼かれてしまうのに忍びないと訴え、町会の人で力を合わせて防火水槽の水をバケツリレイで燃え盛る火に3時間か4時間かけ続けて倒れた家々に火が燃え移るのを食い止めた。マンションの出火も多数あった。分譲マンションは地震国日本ということを考えた場合、問題が多いと思われる。燃えなくても壊れたものが多数あり、建て替えるには住民の5分の4の同意が必要というが、住民の多くが四散している状況である。ローンを抱えたまま、またローンを組んで、となると絶望している人も多いだろう。(昔からの借家住まいというのは災害の多いこの国での一種の生活の智慧であつたのかも知れない。持ち家願望は、今回の災害で大変なダメージを受けたことは事実である。財産が消滅したばかりか多額の借金が残ったのである。しかし、壊れた家の間に、内部はともかく外見は全く無傷の家もかなりあった。それらは、最近の耐震耐火のプレハブ式の家であつた。あまり地震の脅威がいわれなかった関西に住んでいても、防災の用心をしていた賜であるといえよう。)

5,400人以上の死者というのは大変な数ではあるが、150万人以上の人口を考えると助かった人も多いということになる。運もあるが、かねてからの対策、用心も役に立つのである。火の出た所出なかった所がある。それと、生死を分けたのは、隣近所がその人の存在を知っていたかどうかであつた。老人でも、近所とよく顔を合わせて知られていた人は救

助され、若くても存在を知られていなかった人は、家族が捜しに出てきて、死骸が発見されたという例がある。日頃のコミュニケーションが大事である。(淡路島では、倒壊した家屋の下から多くの人助け出された。近所の人、どこそこの誰は、いつもどの辺りに寝ている、ということまで知っていたので、姿が見えないと急いで捜し崩れた家の下から救い出したのである。)

地下鉄はやはり安全であった。一部壊れた所はあったが全体でみると、地上部はめちゃめちゃに破壊されていても、その地下ではちゃんと早くから復旧して走っていた。

人々はよく助け合った。あまり被害を受けなかった南京街の商店では、早くから商売を始めサービスに努めた。卵がゆ、60才以上の方1杯無料などという貼紙も見られた。また別の所では灯油10リットル無料という貼紙も。

市民が覚悟しておくべきことは、飲み水、食べ物1日か2日は無くて当たり前。仮に備蓄してあっても運べない。マスコミが食料や水の不足を訴えたので全国からおにぎりや水が送られてきたが配る手はずもなく始末に困っていた。物はあるところにはあるが隅々に行き渡らない。配布の拠点がある。手はずが円滑にいかない。

避難所の生活については、物は有り余っていた。ただ人々はプライバシーの確保に苦労していた。クルマが役に立っていたようだ。着替え、休息など。

風呂は、マスコミでいかにもみんなが楽しんでいるように伝えられていたが、人数が多いので、恩恵に浴している人はまだまだ一部である。

避難所、宿泊施設として、船も活躍した。明るい灯火、湯のでる蛇口、水の流れるトイレをこんなに有難いと思ったことはなかった。

被災地でいま最も問題になっているのは、被災者と役所、被災者間の連絡、それにゴミとし尿の処理の問題。ゴミは生活ゴミ、地震ゴミ、瓦れき。特に生活ゴミ、地震ゴミは勝手にいたるところに無秩序に積み上げられており、渋滞で運ぶのにも難渋しているし焼却施設も破壊されている。下水道も下水処理場も被害を受けているのだ。

ものすごい災害をみて絶望的になる人も多いと思われるが、実際には助かっている人が多いのだ。対策は役に立っている。備えをするとともにこれから神戸の方々のために何ができるのかをみんなで考えていきたい。

以上、不連続ではあるが重川氏の講演の要点である。話を聞いて思ったことがいくつかある。最も印象的であったことは、ものすごい家屋の崩壊の列である。地震国日本では、しっかり学んでいるはずのことが、関西ではまた繰り返された。まず、ピロティ式の建築は地震の際には最も危ないと云われていた。今回の災害でも、店舗やマンションでは、一階の部分が店舗や車庫のため、柱の少ない空間になってこれが潰れた。またビルの中で潰れた階が多く見られたが、柱が少ないかほとんど無い所とであるらしい。東京の会社などでも広い空間に柱がほとんど無いビルは多いというより、今日むしろ一般的ではないか。構造計算では壊れないことになっているかもしれないが、その



こういうマンションが危ない!?
神戸でもピロティ式はつぶれた。

構造計算が当てにならないことが証明されたのが今度の地震である。後になって直下型の強い縦揺れは予想もしなかったと。そんな構造計算などしない方がよっぽどまし。法隆寺の建物は1300年地震や台風に耐えてきているが、構造計算など無かったのだ。次に瓦屋根。関西では、台風への備えということから、屋根には重い瓦を載せていた。これが今度の地震では仇になったようである。関東大地震の後、瓦の重さが家を潰すばかりか、激しい揺れで飛散し凶器に変わった事が認識され、人々は瓦屋根をやめて、小田原から藤沢、さらに東京にかけて、相州のトタン屋根といわれるほど一時期トタン屋根の平屋が多くなった。今でも地震の恐さを知っている人は重い瓦を載せることはしないが、関東大地震から72年も経つと災害伝承も消えるのか重厚な瓦ぶきの堂々とした二階家が多く見られるようになった。南関東直下型地震の危険が刻々迫りつつある今日、もう一度、関東大地震の災害伝承を振り返って、学校での理科の時間などで防災教育を充実する必要がある。

ところで、阪神淡路大震災で、三陸はるか沖地震や雲仙普賢岳災害の方はかすんでしまった感がある。雲仙普賢岳災害の方も大変であるが、三陸はるか沖地震でもかなりの被害があり、家を破壊され生活手段の船まで壊されて困っている人もいると聞く。日本では自然災害から免れることはできないという覚悟をするとともに、災害に際しては常に援助し合う心がけばかりでなく本格的で公平な公的な支援体制をもっと充実しなくてはならない。まとまった大災害になると天下の同情がマスコミによってかきたてられ、援助がそこにだけ集中するが、災害の規模が大きかろうと小さかろうと、被害をうける個人にとって災害に変わりはないのである。

もう一つ、阪神淡路大震災では、死者は人口150万余のうちの5490余名であり約300人に一人である。1923年の関東大震災の死者行方不明合わせて14万2800余名という数は、今回の大災害と比較してみると、あらためてその大きさが実感される。当時の南関東の人口は300万足らずであった。その20人に一人が亡くなったわけである。次に首都圏を直下型地震が襲うとすると南関東の約2千数百万にいかなる被害が及ぶであろうか。我々ではできるだけ備えを固くして、被害を最小限に食い止める努力を不断にしていかななくてはならない。自然災害は容赦なく襲ってくる。地震、台風、津波、火山、異常気象等、いずれもまともに戦って勝てる相手ではない。いかにして被害を少なくするかに工夫を凝らさなくてはならない。本当にこれらとの戦争のための軍備にこそもっと重点を置かなくてはならないのではなかろうか。その軍備については、ハード面の充実整備もさる事ながらソフト面の強化が重要である。ソフト面とはすなわち迎え撃つ人間の準備と心構えである。実は阪神淡路大震災で意外であり嬉しかったことがある。かねがね大都市で大きな災害が起ると、今日の市民はうち続く太平の世で危機管理能力が低下しているし、共同体意識も貧しくなっているので、混乱が生じパニックになる可能性が高いと心配されていた。しかし、とりわけて地震への危機意識の薄かった関西に実際に起こってみると、外国の記者も驚くほど市民は冷静で、災害にめげずにお互いに助け合い、他地域からのボランティアの素早い参集と献身的活動には目ざましいものがあつた。こういう事実を心強い支えとして、教育の面で、ソフト面の防災強化にこそもっと力を注がなくてはならない時期であると思う。

(横浜国立大学教育学部教授)



広い敷地に建つトタン屋根の大きな旧家。
この家には関東大地震の災害伝承が生きている。
ただ大谷石の塀は危険である。



この家の屋根は着色したステンレスでふいてある。
この家にも関東大地震の災害伝承が生きているの
であろう。



空から見る東京都都心部。あらためてその密集ぶ
りに驚かされる。



空から見た横浜港と横浜市。大岡川と中村川には
さまれた地盤の悪い地域が最も密集した地域にな
っている。



三浦半島上空から西を望む。神奈川県南部への人
口の集中が実感される。三浦半島の緑も空から見
ると哀れなほど侵食されている。



ランドマークタワーから見た関内地区。大岡川と
中村川にはさまれた地域、もとは海だった埋立地
に神奈川県と横浜市の政治・経済の中枢が集まっ
ている。

情報整理という強迫

研究評議員 府 川 源一郎



明窓浄机

「明窓浄机」という熟語がある。明るく清らかな書斎、というほどの意味である。

一昨年、某大学へ集中講義に行ったとき、そこに勤めておられる教授から著書をいただいた。その本の見返しに書いてくださったことばが、これであった。中味のない人間ほど形式にこだわるという例にもれず、筆者は昔から、整理整頓のよく行き届いた仕事部屋にあこがれていた。そこで、この熟語を眼にしたときには、正直言ってしびれてしまった。自分の身边もそうありたいと思っていたからである。もっとも、その教授の机の上には、山のように書類が積み上げられていたけれども……。

そういえば、ついでに思い出したことがある。本居宣長の住まいが「鈴の屋」と呼ばれて、今でも松坂市に保存されている。そこを訪ねたのは、もう20年近くも前のことなので、記憶もかなりあやふやだが、その書斎がすこぶる魅力的だったことだけはおぼえている。

確かその部屋は、屋根裏にあった。屋根裏といっても、背中をかかめなければならないような狭い部屋ではなく、ふつうの四畳半（六畳かもしれない）だったように思う。部屋には押入が付いていて、そこに本を収納するようになっていた。それほど広い部屋ではなかったが、その居室全体の清楚なたたずまいには、心打たれるものがあった。その当時の筆者の語彙帳には未登録のことばだったが、いま思えば、これこそが「明窓浄机」と称するにふさわしい光景だったのである。

さらに、部屋の中をよく見ると床の間の柱には、絹で編んだ細紐が垂れ下がっており、そこにいくつかの小さな鈴が結び付けてあった。宣長は、ときおりその紐を引き、鈴の鳴るさわやかな音で、疲れた頭を休めたという。「鈴の屋」という名の由来である。これも、なかなかしゃれている。のせられやすい筆者は、階下の売店で、さっそくその鈴の複製品を求めた。が、それを掛けるに値する部屋が無いことをすっかり忘れていた。なにしろ、筆者の部屋の中は散らかし放題で、いうならば「暗窓汚机」だったからである。

宣長のように（と書くのはあまりに恐れ多いが）きちんと整理された環境の中でこそ、すぐれた仕事ができるのだとするなら、せめて机の上の整理整頓だけでもしておきたいものだ、というのが筆者積年の夢である。いうまでもなくそのためには、押し寄せる情報をただ机の上に積み上げておくだけでは解決しない。それをどのように処理したらいいのか、という情報処理のノウハウを身につける必要がある。

筆者も、いろいろな方法を試みてみてきたが、なかなか机の上が思い通りにはきれいになってくれない。どうしたら、様々な情報を上手に整理して、ついでに頭の中まですっきりとさせることができるかというのが、筆者長年の関心事である。

以下、そうしたことをめぐって、あれこれ試行錯誤しながら考えたことのいくつかを書いてみたい。

知的生産の技術

こうした問題について、初めて問題意識をかき立てられたのは、ご多分にもれず梅棹忠夫の『知的生産の技術』だった。1969年、岩波新書の一冊として刊行されたこの本には、アイデアをどのように定着させ、それをまとめあげたらいいのかについて、体系立った記述がなされていた。

ここで推奨されていたのは、綴じてあるノートではなく、1項目1枚のカードを使うことである。京大式と称するB5サイズの少し厚手のカードを、現在も使っている方も多いことだろう。筆者も一時これに凝って、専用の小さなキャビネットまで買ったが、けっきょく使いこなすまでにはいたらなかった。

川喜多二郎のKJ法、中山正和の発想法、加藤秀俊の取材学などの本を通勤の電車の中で読みあさったのもこのころである。どの本もそれぞれ面白く、そこで紹介されていたカード整理の方法を、筆者が当時勤めていた小学校の子どもたちの作文学習に応用したりしたこともあった。

『知的生産の技術』では、自分の発想の整理ばかりではなく、様々に集まってくる印刷された書類資料の整理についても、多くの頁数がさかれていた。そこで推奨されていたのは、ファイル・キャビネット方式である。日常、机の上にたまってしまうのが、この種の雑多な書類であるのはいうまでもない。

ファイル・キャビネット方式は、現在なら誰でも知っている方法だと思うが、書類を小分けしたファイルに投げ込み、それをキャビネットに分類整理するという方法である。この方法の原理は、書類を平らに積まずに立てておき、それがいつでも差し替え可能なように（可動的に）しておくという点にあるだろう。これにもあこがれた。もっともスチール製のキャビネットは、給料にくらべてあまりに高価だったので、おりから売り出された段ボール製のキャビネットを購入して悦に入っていた。が、これも今は屋根裏部屋の片隅で、衣類の整理箱に化けている。

情報を整理するに当たって、このキャビネット方式が問題なのは、初めに分類項目を考えておいても、時間が経過するにしたがって、どんどん分類項目が増えていき、やたらに膨れてしまうファイルと、最初は必要だったが、その後全く必要がなくなってしまうファイルとが出てくることである。その結果、キャビネットの中の分類項目が、ごちゃごちゃになり、やがて全体の分類項目そのものを見直さなくてはならなくなる。つまり、最初の分類の見通しと、現実の収集過程であらたに発生する分類項目とが一致しなくなるのだ。これを再構成するのはすこぶるめんどうで、手間がかかる。

話は飛躍するようだが、現在筆者が使用中のコンピューターのワープロソフトでも、同様な問題をかかえている。ワープロ専用機をお使いの方も、きっと同じような事情だろう。いわゆる、ファイル管理に関する問題である。ワープロを使っていると、いろいろなファイルが次々にたまっていく。その中からいざ目的の文書を探そうとしたとき、あちこちのフロッピーをとっかえひっかえ器械に突っ込まなければならない。それが困るのである。

文書数が少ない初めのうちはまだいいが、文書が増えてくると、該当のファイルにたどりつくのにひどく苦勞するはめになる。とりわけ、MS-DOSシステムでは、文書名が日本語で4文字までしか記入できないので、似たような名前を持つ文書が連続してしまい、いちいちファイルを開いてみないと中が確認できない。

もっともそのために、コンピューターのワープロソフトでは、ディレクトリというものが考えられている。ディレクトリというのは、小引き出しのようなもので、引き出しごとに名前を付けてその中に一つ一つの情報をしまっておく。私たちが、様々な書類をひとまとめにして、大きな封筒に入れておき、その上に「〇〇関係」などと表書きして、棚別にそれを収納しておくのに似ている。

だが、これも基本的には同じ問題点をもっている。情報をどの引き出しにしまったらいいのか、これを決めるのがなかなか難しい。もちろん、これも文書の少ないうちならなんでもない。ところが情報が多くなってくると、ファイルをどのディレクトリに入れたのかが分からなくなってしまふ。それは、途中であらたにディレクトリを作る必要が生じたり、あるいはそれを廃止したりするからである。また、どのディレクトリに入れたらいいのかすぐには判断できない情報を、とりあえずどこかに入れておこうと、適当なディレクトリに入れておくからでもある。

その「とりあえず」が、あとで困る原因になるのだ。これは、日常生活でも同じである。私たちは、様々な情報を、とりあえずどこかに入れておく。もちろん、その時その時にはそこへ収納する何らかの理由と必然性がある。だから、一時的にせよ、その場所へ待避させておくのである。そうしないと、あとから、あとから仕事が追いかけてくるから、とりあえずどこかに置いておき、あとでゆっくり分類しよう考える。だが、いざその暇ができたとき、あるいはその情報が緊急に必要なときには、「とりあえず」は、すでにほかの文書と紛れてしまっていて、机の上、ないしディレクトリの中を、また最初から探し回らなくてはならない。

「分類」という性癖

ここまで読んできて、次は、「超」整理法の話になるのではないか、と思った読者は正解である。情報処理関係の久々のベストセラー、野口悠紀夫の『「超」整理法』が刊行されたのは一昨年の末だった。さっそくこの本を読んで、筆者は、それこそ目からうろこが落ちる思いがした。

この本のポイントは、ずばり「分類をするな」、ということである。それなら、整理はできないではないか、と思うかもしれない。だが、それは違うのである。ここに提案されているのは、情報整理の基準を変えようということなのだ。すなわち、「超」整理法は、時系列にしたがって情報を整理しようという発想を前面に押し出しているのである。

この「超」整理法の提唱する、時系列の整理という問題にはすぐあとで触れることにして、そもそも私たちが物事を整理をしようとするのはなぜなのか。それをまず先に考えてみたい。

そんなことは問うまでもない、日常生活に便利だからだ、といってすませることもできよう。もちろん、身の回りが整理されていれば、快適に仕事を進めることができる。だが、人間の整理癖は、どうもそうした実用レベルの説明だけでは、おさまりがつかないような気がする。

世の中の様々な事象を整理分類するもっとも典型的な方法は、図書館の十進分類法であろう。世界中の書籍の知識が分野別に見事に整理され、図書館という巨大なスペースに収蔵されている。全国どの図書館に行っても、同じ分類体系に基づいているから、どこでも

迷わずに探求書にたどりつける。もし十進分類法によらず、図書館ごとの独自の分け方をしていたとするなら、異なる図書館を訪れるたびに、基準が違ってしまい、利用者はとまどうことだろう。

似たような整理を、ことばの世界で行ったものに、分類語彙表（ソシーラス）がある。あらゆる単語をその意味という側面から、分類整理しようとした試みである。ことばによって切り取った、世界の見取り図だといってもいい。その基準に基づいた類語辞典もあり、筆者もそれを愛用している。また、動・植物の分類の仕事も、世界中に生息する生物をすべて命名し、細大漏らさず整理記述しようとしたものだろう。それをまとめた動植物図鑑などにより、私たちは、目の前にある木や草がどういう名前を持ち、どういう系統に属しているのかを知ることができる。さらに、私たちは、歴史を知るために、過去の出来事ができるだけくわしく調べて年表を作り、各地を実測して地図を作る。それを見ることで、過去の世界や、地球上の土地を、居ながらにして一望することができる。

つまり、私たちは一つ一つの物体・事象に対して、それぞれを弁別し、命名し、それをグルーピングすることで、世界を人間の知のもとに統御しようとしているのである。いうならば、分類整理という作業は、人間の認識の枠組みを通して、世界を籠絡しようという人間の欲望の現れなのだ。さらにまたべつのいいかたをするなら、分類という営みは、人間があたかも造物主のように振る舞おうとする行為である、といってもいい。そして、もしそうだとするなら、世界を分類しようという人間の欲求自体は、永久に止むことはないにちがいない。なぜなら、それこそが人間を人間たらしめている基本的な要件でもあるからだ。

しかし、実際に神ならぬ身にとって、世界を司るどころか、日常の様々な雑事を取り仕切るだけでもせいっぱいなのが現実である。とりわけ浮き世の情報は、前後左右、めったやたらに、飛び込んでくる。したがって、私たちは、神のような高い立場からの分類作業の方法だけではなく、それと平行して、手の届く範囲の日常の整理法をも開発する必要がある。

筆者の見解によれば、その有力なひとつの方法が「超」整理法である。

「超」整理法

時間の順に並べよ、分類するな、これが「超」整理法の極意である。

もちろん、一つの情報につき一つのカードという原則は大事にする。「超」整理法の場合には一つのカードではなく、一つの袋を使い、その表面に内容物を書いておく。個別の情報の単位を小さくしておくのは、キャビネット方式と変わらない。違うのは、その情報の一単位を、十進分類法のように分類項目を立てて分類せずに、時間順に並べることである。

時系列の整理がどうしていいのかというと、私たちが、探し物をするときに、あれはいつ頃のことだったかという観点に立って、思い出しの作業をするからである。確かに十進分類法的な分類体系は、時間という観念を捨象して成り立っている。というより、個々人の経験を切り捨ててあるからこそ、十進分類法的な分類法は、多くの人が共用することが可能なのである。

しかし、個人の情報は、その人間の具体的な日常生活としっかり結びついている。私たちは、ええとあれは大体いつ頃のことだったっけというように、自分の体験を思い返しな

がら、過去の情報を探索する。自分がかつて行った情報処理については、必ず、確かあの情報よりは前で、あの情報よりは後だったというような想起の仕方をする。それが個別のファイルを、時間順に並べようという「超」整理法の発想である。

筆者はなにも「超」整理法の回し者ではないから、本を買いなさいとはいわないが、これまでの情報検索の方法がめんどろ過ぎて、途中でいやになっていた人にとっては、一見の価値があると思う。なによりも、安上がりで、大がかりな設備を考えなくてもいいのがいい。個人情報の管理は確かにこれで十分のように思える。

書籍の整理

本もどんどん増えて始末に負えなくなる。都区内では、本を収納しておく土地代の方が本そのものの価格より高い、という話を聞いたことがあるが、だからといって読み終えた本を、次から次へと捨てるというわけにはいかないだろう。この整理もかなりめんどろである。先ほどのディレクトリの話と同じで、ある程度棚ごとに分類しておいても、あとからあとから本が付け加わり、その秩序はやがて崩壊してしまう。

本の場合は、一冊一冊の背中にタイトルがついているから、よほどの蔵書家でない限り、書類のようにほかのものと紛れてしまって、見つからないということはない。しかし、ある程度分類しておいておかないと、とっさの役に立たないことは同じである。本が書類と違う難点をもっているのは、重いということと、大きさがまちまちだということだろう。

重いということは、一度作り上げたグルーピングを変更する場合には、たいへんな労力を必要とするということである。本を束ねて動かしたり、本棚を移動したりすることを、考えただけでも腰が痛くなりそうだ。また、大きさがまちまちだということは、内容別には整理しやすくとも、テーマに沿って並べたり、作者別に集めたりすると、本棚という物理的な制約を受けかねない。

文書情報の場合は、長くても、短くても、それを格納する最小単位をそろえるということが、検索を容易にするための基本である。京大式カードでも、ファリングシステムでも、「超」整理法でもそれは同じなのだが、書籍の場合、重さや大きさが足枷になって、うまく整理するのはなかなか難しい。

図書館ならいざ知らず、まさか家庭で図書カードを作るといふほどの必要はないだろうし、それよりも問題なのは書籍それ自体の分類整理なのである。本の整理については、さすがの「超」整理法の著者も、「絶望的だ」と嘆いている。

こうした書籍の整理について、何か有効な方法をご存じの方は、ぜひご教示いただきたいと思う。そうでないと、筆者の「明窓浄机」の夢は、結局夢のままで終わってしまうことになる。

(横浜国立大学教育学部助教授)

古い家と新しい家

研究評議員 高橋 和子



関西大震災の1ヶ月後、わが家は近代的なマンションに引っ越しをした。前の家は昭和30年代に建てられた木造の平屋で、足で蹴飛ばせばすぐにでも壊れそうな家であった。取り壊すために退去を余儀なくされたのであるが、古き良き時代を象徴するような家での14年間は、都会で生活する田舎者の子育てには、かけがいのない時であった。少々回顧じみているが、今回は家を巡って感じたことを取り留めもなく綴ろうと思う。

1. 昭和30年代からの脱出

引っ越し当日に至るまで、多くの思い出の品々を捨てた。都会の限られたスペースをがらくたで埋めるには、余りにももったいなかった。捨てては拾ってを何回か繰り返した。この片付けを通して自分が物に縛られているのに気がついた。物から解放され中身（自分自身）を充実させることが課題だとも思ったが、物を大切にすることを教えられ育った者にとって、ヒモの1本でも巻いて取っておいたのである。

引っ越しは何回かに分けて業者に頼まず自分達の力行で行なった。子どもが成長するにつれ、家族で何かを一緒にやるのがほとんどなくなっていたので、この引っ越しは皆で一つの事をやるという意味でも有意義であった。特に中学2年になる息子が、いつの間にか重い荷物を運べる力を充分につけ、頼もしい存在に思えたことも収穫であった。

からだがあれば自分達でもできるんだ、昔はこういう労働を家族で行なう機会が多かったと思い返した。台風シーズンになれば雨戸の外から板を打ち付けたり、雨漏りがすれば屋根に登って補修工事を行い、布団の打ち直しは手ぬぐいで頭や口を覆い布の端っこを持たされ、お風呂を沸かすにも井戸から何往復となく水を運んだ。昭和30年代に入り、各家庭に冷蔵庫とテレビと洗濯機の3種の神器が入ってからは生活の様子や形態も一変したが、平成の時代とは雲泥の差があるのを、引っ越して日々の生活を送る中で実感している。

2. 美観地区のマンション住まい

ようやく荷物を運び入れてやれやれしたのも束の間、電気もガスもつかない、電話も通じない。引っ越し1週間前に全て使えるよう手配したにもかかわらず、情報伝達の食い違いが招いたこととは思うが、スイッチひとつで使えるには苦難の道が待っていた。都会の生活のもろさを身にしみて感じた。神戸の人々の生活が頭をかすめた。引っ越し当初のアクシデントはあったものの、近代的な住まいの便利さは、昭和30年代から一気に40年近く未来に移った者にとっては、カルチャーショックであった。生活が変わってしばらくの間は、新鮮な思いや驚きに浸っていた。そんな思いも便利さの中にとくとく忘れ去ってしまいそうなので、感じたままを次に述べよう。

【その1】 快適温度のお風呂

アトピー性皮膚炎の子どもにとっても、無類のお風呂好きの夫婦にとっても毎日のお風呂は必需品であり、幸福を感じられる最も身近な品である。そのお風呂にこちらの設定した温度でいつでも入れる。ぬるくなったら追い炊きも出来る。老人になると皮膚感覚の衰えから熱すぎるお風呂に入っても気づかずに、脳溢血で死亡するケースが多く、温度計でお湯の温度を測ることが必要だと言われているが、それにも対応していると一安心した。

この明るく美しいお風呂や小綺麗なマンションやアパートの普及が、現代の若者の綺麗好きにつながっているのではないかと、ふと思えた。泥やゴミやがらくた、シミや暗がりや無駄な空間は、彼らの生活空間からは消え去っている。

【その2】 全自動洗濯機と日照

2 槽式の洗濯機を粗大ゴミとして出し、全自動洗濯機に変えた。スイッチ一つで設定した通りに脱水までしてくれる。洗濯が何となく楽しくなってきた。洗濯機の門番は必要でなくなり、時間を使える立場になった。その時間をどう使うかは問題である。また、公園や駐車場のスペースを確保するための開かれた空間が、太陽の光を存分に提供してくれる。光を浴びているだけで幸せを感じた。その一方で、美観地区に制定されているため、ベランダの手すりやその高さを越えて、洗濯物や布団を干すことはできない。生活の臭いを周囲にまき散らさないことのようにであり、古い家との大きな違いを感じた。

【その3】 洋式トイレ

痔の方や老人にいいと言われている洋式トイレに比べ、和式のトイレの長所を聞くことはあまりない。和式では毎日しゃがんで立つ運動を、日に何度となく繰り返してきた。特に足を怪我した時は悲劇であったが、蹲踞の姿勢は足腰の力を必要とする。新しい住まいは洋式になり快適なトイレタイムを過ごしている。しかし、トイレに限らず、和室（畳）が少なくなり、洋室、ベッド、椅子の生活が、日本人としてのアイデンティティであった、座る、そして蹲踞という姿勢を奪い、足腰の力が弱まるのではないかと危惧している。せめて5階までエレベーターを使わず歩くように心がけている。

【その4】 密閉空間

サリンの毒がこの住まいに置かれたら、いっぺんで死亡してしまうだろうと思われるくらい、気密性が高い。その気密性のおかげで、ほとんど暖房費がいらないし、隣の音も聞こえない。近所付き合いの煩わしさもなく、1週間誰とも合わずに、人の生活の臭いや音も聞かずに過ごそうとすればそれも出来る。現に原稿書きに1週間1歩も外に出ずに、家族以外の誰とも会わず、電話とファックスだけで外界と連絡を取って過ごせた。こもって仕事をするには打ってつけの場所であった。

また、ダイニングキッチンとリビングがひとつにつながっている設計は、日本の住宅事情を反映した日本独自のもの、というのを雑誌で読んだことがある。このリビングを中心に個室が配置されている設計は、家族がそこに集まっていなくとも、何をしているかが手に取るようにわかる。しかも同一平面のそんなに広くない空間は、移動も簡単で死角もない。

このような密閉空間の長所は短所も抱えている。第一に結露の問題である。毎朝起きて最初にやる仕事は、アルミサッシの結露を拭くことである。第2はコミュニケーションの問題である。特に高層住宅に住む子どもは、低層階の子どもに比べ外出頻度が低く、交友



範囲が狭まるという調査があるが、子どものみならず大人の場合も同様に、本当に限られた相手（勧誘業者が1日に平均5人は来る）と会話するだけである。第3は防犯や防災の問題である。交友関係が希薄である住民にとって、外との通路がドア一つだけであるということは、もし侵入者や災害があった場合を想定すると、逃げ道が一つというのは本当に心許ない。そして、

我が家にとって最も打撃的な出来事は、犬を飼えなくなったことである。共働きの為に子どもの話相手であった犬との数々の思い出が、あの古い家との思い出と同様、宝物を失ったように思われる。

3. 子どもの遊び

家の生活だけでなく、子どもの遊びも周りの空間によって相当左右されることを、眼下の公園を見ていて感じた。公園にはブランコ、滑り台、砂場のいわゆる遊具3点セットがある。この3点セットは都市公園法第7条に明示されているようで、日本中どここの児童公園でも見ることが出来る。10時頃からお昼頃までは、よちよち歩きの子どもから入園前の子どもまでが、母親に連れられて遊びに来る。午後から夕方までは、小学校の男児がサッカーに興じたり、女兒がブランコに揺れている姿をよく見ることが出来る。

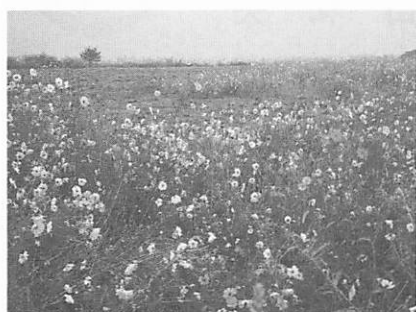
前の古い家の付近にも広い公園があった。その公園にはきちんと整備されたものから、自然の地形を生かした無造作な広場や原っぱを残した場所まであり、子ども達や犬達の絶好の遊び場になっていた。そこで繰り広げられる遊びは画一化されたものから、そうでないものまで色々見ることが出来た。公園のみならず古い家には、多くの生き物が各自の縄張りを守りながら住みつき、土や蜜や実を求めてやって来る物もいた。ミミズ、カマキリ、ヤモリ、蝶、蝸、蛙、蛇、野鳥など、多くの生き物が子どもや大人の話相手になっていた。そして庭には、水仙、チューリップ、梅、桜、紫陽花、グミ、夏蜜柑、柿、紅葉、楠などの草花や木々が四季折々の季節を告げてくれた。

次の文は私の子ども時代（昭和30年代）の遊びの思い出である。

春には魚とり。小川に股まで入り網を持たされて立った。兄が上流から魚を追って来て待ち構えた私の網にかける。たんぽぽの綿毛飛ばしやシロツメクサの首飾り作り。夏には蟬やバッタ、トンボや蝶を捕った。糸トンボや烏アゲハ、熊蟬やヒグラシを捕まえると大得意になった。珍しい物では蛙も釣った。長い竿に赤い布を巻いた錨型の針を付け、沼の上にブランブランすると、虫だと思った蛙は思いきり飛び上がり針に引っ掛かる。うちわを持って螢狩りにもよく行った。捕まえた螢を蚊帳の中に入れると幻想的な世界が出現した。秋には石蹴り、隠れんぼ、ゴム跳び、達磨さんが転んだなど、釣瓶落としを愁いながら暗くなるまで遊んだ。夕暮れ時になるとコーモリが飛んで来た。長い竿を天空に振り回し、運良く当たるとコ



一モりは脳しんとうを起こし落ちて来る。鼠籠に入れて夜中に羽根を広げるのを楽しんで見ていた。冬には、雪合戦・坂作り・竹滑り・鬼ごっこ、辺り一面真白な雪で覆われた田んぼに道を作り、その道だけで鬼ごっこをする。まーあ、よく遊んだ。



その当時は外遊びがメインで、遊びは季節に応じて変わった。季節の移り変わりもからだ全身で感じていた。というよりも「季節の中に、自分のからだも遊びも時間や空間も組み込まれていた」と言ったほうがいいかもしれない。太陽や月の光、風や水の冷たさや温もり、木々のさえずりや土のにおいが、四季の移り変わりと共に変わっていくことを、からだで感じていた。自然と共に遊んだ体験やその風景が、大人になっても

原風景として心の中に残っている。疲れたり生きる力を失い欠けても、その風景がからだを癒してくれる。

現代の子ども達や若者にとっての原風景は、果してどのような風景なのだろうか。これは何も遊びの空間だけでなく、住まいの空間も、からだの奥に記憶としてしまわれる。長谷川町子氏の『サザエさん』や宮崎駿氏の『となりのトトロ』が根強い人気があるのは、失われつつある住空間や遊び空間、そして人間関係に対してのほのぼのした想いを求めている表れと言えるのではないだろうか。

しかし、いまの子ども達の遊びや生きている空間を批判する資格は、我々大人にはない。むしろ、子ども達から批判されるのは大人達であろう。豊かな自然を壊し、新しい家やマンションや公園を造り、快適といわれる空間を提供していると信じている背後に、多くの失ったものがある。そんなことを感じながら、快適空間に胡座をかいている私がいる。

(横浜国立大学教育学部助教授)

都心の過疎化と公立高校

研究評議員 富 山 和 夫



1. 進んだ過疎化

ここ数年、東京の千代田区では小学校の統廃合を巡って、統廃合を推進しようとしている千代田区と地域住民の間で熱い論争が続いている。東京都区部の小中学校の生徒数は、1970年代の後半から減少傾向にあり、各地で小中学校の統廃合が進んできている。従って、千代田区の問題が全く特殊の問題だという訳ではない。しかし、この地域の特有の事情もあるようで、東京都の区部でも、都心部と周辺地域とでは、かなりの差異がみられる。

小学校の統廃合の問題が起こってきたのは、過疎化が進み、学級数が減少し、しかも一学級の生徒数も減少するようなケースが続出しているからだという。

都市が肥大化すると、その中心部分ではいわゆる都市機能が集中し、一般的な生活機能が薄れていく。東京都について見ると、少なくとも高度成長が開始される1950年代の半ばまでは、全体として都心部（山の手線の内側）の人口は増加を示していた。高度成長期に入ると、周辺の区部（大田区、世田谷区、練馬区、杉並区等）の人口増加が目立ち、都心部の人口は減少に転じてくる。その後になると、区部の人口の増加がとまり、70年代後半からは減少に転じ、3多摩地区での増加が目立つようになる。

千代田区は、麴町区と神田区とが合併したもののだが、この千代田区も人口が急増した時期があった。明治政府が発足した当時は、旧武士が減ったこともあって、人口が一時的に減少している。しかし、世の中が落ちついてくると、人口の流入が盛んになっていった。その間の事情は、東京都から出されている『東京百年史』（1973年）にも詳細なデータと共に明らかにされている。1869年（明治2年）に当時の東京府が定めた「戸籍書法」では、他国（県）から流入して5年未満の人は「寄留」人、そうでない人は「本籍」人と記載するようになっていた。その「寄留」人口と「本籍」人口の比をみると、1881年（明治14年）になると、麴町区では寄留人口が本籍人口を上回っている。つまり5年間で人口が倍増したのである。この場合、自然増ではなく、社会増が大きな役割を果たしているのである。神田区でも、この時期には社会増が目立ってくるが、その割合は麴町区の場合よりはゆるやかなテンポで進行した。このように東京の人口は、中心部分の人口増が盛んであり、一時的には山の手人口増が下町の人口増を上回っていたのである。

しかし、都心部での人口増は、特に山の手ではかなり早い時期に停滞することになる。麴町区の人口がピークを迎えるのは1923年であった。この年の9月に関東大震災が起こったのであるが、震災後の人口が震災前の人口を越えることは2度となかった。とは言っても、1960年代の半ば頃までは、千代田区の麴町地区でもまだ表通りに民家が点々と残っていたし、裏通りは閑静な住宅街であった。麴町界限を私は良く知っているが、当時は、四谷見附から半蔵門に抜けるあの大通りに面して知人の家がいくつかあり、昔風のそば屋も繁盛していた。神田地区でも、表通りの商店の多くは2階建てで、2階部分や店の裏は住居として使っている場合が多かった。

2. 過疎化と越境入学

ところで、千代田区の打ち出している統廃合には大きな特徴がある。それは、特定の小学校を廃校にして他に統合するのではなく、全ての小学校を廃校にし、改めてより少数の小学校を新設しようとするものである。しかし、小学校の用地を新規に手に入れることは至難の業であるから、結局はいくつかの学校に統合するのである。だが、あくまで形式的には特定の学校に統合することにはしない方法を選ぶことになったのである。

その理由は、千代田区には「伝統ある名門校」が多いからだという。「邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す」との目的を掲げた学制頒布（1872年）に基づいて、文部省が全国の模範として東京府に6校を設立した（1873年）。この6校を含めてこの年に東京府に設立された公立小学校は18校であった。この全国の模範と言われた6校の一つが番町小学校である。千代田区には、この他にも設立年の古い伝統のある学校がいくつかある。

しかし、千代田区の過疎化は、確実に進行していた。勿論、ここで言う過疎化は、この地域が寂れてしまったという意味ではない。立法・司法・行政の三権の中核となる機関が次々に千代田区に立地し、住民が住めなくなってしまったのである。だが、学校の統廃合問題が深刻になるのは1990年前後になってからのことである。バブルでの地上げ問題が起きたことも、重要な役割を演じている（特に神田地区）。

過疎化が進行している事態の中でも、少なくとも1970年代の前半までは、千代田区での小中学校の学生数の減少による統廃合という問題は起きてこなかった。実は、この時点までは、千代田区の住民数に対する小中学校生徒数の割合は、古い住宅地帯としては異常に高かったのである。一般に、住民数に対する小中学校生徒数は、新しい住宅地域が高く、住宅地域としての歴史が経つにつれて低下していく。では、なぜこうした小中学校生徒数があったのであろうか。

それを条件づけた要因の一つは、公立高校の存在である。千代田区には、有名国立大学への進学で名を知られた高校があった。隣接する文京区にも、いわゆる進学校として名の通った公立高校があった。こうした公立高校のあるところでは、その高校の学区内の中学校に籍を置くことが、その高校進学のための条件となる。同じように、その中学校に進むためには、その学区の小学校に籍を置くということになる。こうした、中学校や小学校への生徒の通学は、義務教育の課程では意識的に歪められることがないことが望ましい。しかし、受験競争が激化するなかで、特定の高校の学区内にある小中学校が注目され、それに一定の価値が与えられるようになってしまったのである。〇〇小学校→〇〇中学校→〇〇高校→〇〇大学という、ある種の進学のコースが想定され、それを目指して子どもを持つ親が努力をする。

結果としては、実際の住居とは無関係に越境入学が盛んに行われことになる。越境入学には様々な形態があり、子供の住民票だけを学区内に移すケースもあるが、親子揃って住民票を移しているケースもあり、中には立派に住居を確保しているケースもある。こうして学区の住民を装う場合もあるが、本当に越境している場合も稀ではなかった。しかも、それはこれら過疎化した地域の学校の当事者が充分に承知の上で行われていた。そうした事態は、過疎化の進行と共に、次第にエスカレートされていた。隣接の各県から千代田区や文京区の公立の中学校へ越境して通学する学生は、1960年代からはかなり一般化してい

た。筆者がかつて住んでいた文京区も、1950年代の半ばが人口のピークで、それ以後は人口の減少が続いていた。同区でも、千代田区と同様に多数の越境した生徒をかかえていた。

3. 入試方法の改革をめぐる

こうした行き過ぎた競争状態に大きな転機をもたらしたのが、都立高校の入試方法の改革であった。その結果は、「都立離れ」という表現で示されるように、所謂進学校の地図を全く塗り変えてしまうことになった。当時の入試方法の改革については、その結果の評価は、人によってまるで正反対になっている。公立高校のあるべき姿に戻ったのだと考える人はあの改革を高く評価し、特定の大学への進学実績にウエイトを置く人は、これによって私立高校の地位が高まり、公立高校は凋落してしまったと評価している。

ともかく、結果としては、東京都の公立高校の多くは、かつての「進学校」という評価を返上することになり、代わって、一部の国立大学の付属高校と私立高校とが、「進学校」としての地位を確立する。これらの私立高校は、まさに全国学区の高校であり、その生徒の集まる範囲は北は北海道から南は沖縄までの広さとなっている。1980年代になると、ある私立の「進学校」では、その立地している区内からの進学者は数名で、東京都の出身者もやっと半分にしかならない状態となっている。他は、全国から集まっていることになる。かつての公立高校の「進学校」の姿が、一部の私立高校に置き換えられたかっこうになっている。

かくしてこの改革は、高校生の裾野ともいえる小中学校に大きな影響を与える結果となった。小学校の生徒数の減少が、1980年代になって歯止めがからなくなってしまったのである。もともと越境によって支えられていた生徒数であるから、いまや魅力のなくなってしまった高校へ入学するために越境する人もなくなってしまった。つまり、過疎化した現実がそのまま正常に反映されるようになってきたのである。もちろん、地上げが千代田区を襲ったこともこれを加速するものとなった。

昨年3月、東京都は高校入試を改善し、単独選抜を実施することになった。この入試の改善では、かつての名門高校の復権が取り沙汰された。しかし、結果は一部の高校関係者の期待を大きく裏切るものとなった。千代田区の名門高校は、実質の競争がないような状態であったという。だが、これは当然すぎる結果というべきであろう。既に、この地域では過疎化が進行し、小学校も中学校も生徒数が激減していたからである。この現実を認識してなかったところに、高校関係者の誤算があった。

しかし、私は昨年高校入試の結果は正常なものと受け止めたい。この地域の高校は、今や過疎地に立地しているのであり、ごく平凡な公立高校として維持されるのが正常なのである。それをかつてのような「進学校」に再び復権させようとすれば、歪んだ形で生徒を確保する方向に走らなければならない。その歪みは、中学校→小学校へと波及する懸念もある。公立高校のあり方からみて、名門高校が復権しなかったことをよしとしたい。

(関東学院大学教授)

V

1994年度の歩み

一年をふりかえって

所 長 倉 持 巳佐男



91年の組織機構改革以来4年を経た県教文研は、3部制による活動のいっそうの充実を図りながら「見える教文研」をモットーに、神教組運動の着実な進展に沿って活動を展開してきた。

まず人事面では、93年度末、谷口隆事務局長が退任して学校に復帰され、新しく川崎から榎本重次氏が着任された。谷口前事務局長のご功労に心から感謝の意を表したい。

以下、三部の活動について、俯瞰的、要点的に記してみたい。各部・研究委員会とも部長・座長よりの報告が本所報に登載されているので、詳細についてはそれをお読み頂きたい。また報告からの引用、重複する部分についてはあらかじめお許しを願いたい。

1. 第1研究部（子どもの生活研究委員会）

この委員会は、市川博教授（横浜国大）を座長として、12名の研究員（研究評議員・小中教職員）で構成されている。研究は前年より継続して取組んできた「子どもの生活意識調査」のまとめとその結果の分析、検討、そしてその報告書の作成である。報告書は、95年2月に「生活意識調査報告 子どもたちのふれあい——ひと・自然、もの——」のタイトルで発行された。その目次を挙げてみると「はじめに。第Ⅰ部 調査の目的と方法。第Ⅱ部 調査結果。1 予備調査結果。2 本調査結果。3 自由記述にみる子どもたちの姿。第Ⅲ部 総合的考察。1 自然や動物とのふれあい。2 人間とのふれあい。3 コミュニケーションとしての長電話。4 気になる子どもたちに関する追跡。5 触れ合いの疑似性・人工性。第Ⅳ部 要約。コラム（1）保健室から見える“人とのふれあい”。コラム（2）なぜ大人になりたくないか。〈資料〉 質問用紙及集計表」である。上記の調査結果の検討と並行して、また、検討を終えてからの研究・討議事項は次のようであった。

時代の激動、変革、価値観の多様化、教育問題の多発と深刻化などの中で、まず、自分たちの生活そのものを見直してみる必要を痛感する。それらの反省の上に立って、私たちの視野・視座を検討し直してゆくことが大切ではないか。こうした問題意識を確認して、研究討議はすゝめられた。

その第一は、今日の学校・子どもの現状の問題点について把握・分析する作業である。

① まず5月 報告者 林洋一氏 「新しいコミュニケーション——高度情報化社会の到来——」。今日急速に発展しつつあるパソコンを通してのひと・もの・自然との新しいかわり方の実態・意義・問題点について検討。② 7月 報告者 小山雄二氏 「今学校で、Part 1 ——教育現場からの声——」。小学校の研究・教育活動の現状と直面している問

題点について検討。③ 9月 報告者 鈴木浩氏 「今、学校で、Part 2 ——教育現場からの声——」。自分の非行を認めない生徒、問題の解決方法が見出だせない生徒、親子、罪悪感なしに性非行に走る女生徒の事例などを手がかりとして、中学生の問題行動の変質について検討。④ 11月 報告者 田中正司氏「大学と社会と学校教育の課題をめぐって」。古代から今日までの大学の性格の変遷と今日における特徴と問題点について検討。

第二は、自分自身及び子どもの世界を凝視・問い直しつゝ、自己の感性を高める作業。

① 6月 報告者 高橋和子氏 「からだの教育『卵は立つ』——学習を通して——」。生卵を縦にして立たせる作業を15分間行ない、そこで感じたことを絵に描いて報告しあうことで、人と人とかかわりあう感性を高める意義、問題点について検討。② 本年1月 報告者 菅龍一氏 「子どもの発達段階と親のかかわり方——ダメ親父の子育て記——」。菅氏がご自分の子どもさんと、変身して（演技して）、遊んだ（かかわりあった）体験談から、子どもの世界を理解すること、かかわること、かかわり方について検討。

第三は諸外国の活動を手がかりとする見直しである。

① 12月 報告者 福田悦子氏（91年12月～94年6月、ニューヨーク近郊のヘイスティングス村の公立学校に小学校4年生の男子と6年生の女子を通学させた経験をもつ）「日本の学校、アメリカの学校——子どもの留学経験と帰国子女の悩み——」。② 本年2月 報告者 浅見聡氏 「東西ドイツの統一と教育改革」東西ドイツの統合を事例の中心にして、欧州統合（EU）、国際化——宇宙船・地球号におけるアイデンティティの可能性・在り方などについて検討。③ 3月 報告者 高垣真理氏（93年11月から1年間、スペイン・バルセロナで生活、子どもを私立の現地校に通学させた経験をもつ）「バルセロナの学校生活」。三報告とも、日本の今日の教育をとらえ直す多くの示唆を含んでいた。

この研究委員会では、2年にわたる「子どもの意識調査」の結果とこの1年間の中で検討された8つの報告について整理し、それにもとづいて、今日の子ども・学校の現状、問題点に対して、学校・教師、家庭・親はどう対応し、実践すべきかを追求することが課題である。

2. 第2研究部（教育改革研究委員会）

この研究委員会は富山和夫教授（関東学院大学）を座長として20人の研究員（学者・文化人・学識経験者・神教組7地区教組教文部長）で構成されている。

（1）93年度から研究をすすめてきている「高校改革」について、作業部会による精力的な研究討議がまとめられ、10月に教文研資料シリーズⅢ「高校教育改革の方向と課題」として刊行された。（93年10月に、教文研だより65号で「中間報告」が発表されている）。その目次を記すと次のようである。

第1章 高校教育改革の基本視点——格差是正の実現と個性化への対応——（黒沢惟昭）
第2章 高校改革の動きをどうみるか 第1節 文部省の高校改革政策（広瀬隆雄）第2節 入試「改善」の全国状況と神奈川（本間正吾） 第3章 格差の是正と選択の自由をめぐって 第1節 格差の実態と問題点（中野和巳） 第2節 選択の自由とは 1 学校選択の自由（赤尾勝巳） 2 神奈川の場合（浅井良雄） 第4章 高校教育改革の方向と課題 第1節 改革のための具体的プラン（永田裕之） 第2節 残された課題（山岸隆夫）。

(2) その他94年度に研究・討議されたテーマを列举すると次のようである。

5月 報告者 小中儀隆氏「公立高校入学者選抜制度改善案と神教組の方針」。7月 報告者 黒沢惟昭氏「教育における『個人主義』の背景」——①新しい学力観をめぐって、②教育における「競争」をめぐって——。11月 報告者 内田信之氏「川崎の地域教育会議について」。12月 報告者 赤尾勝巳氏「日教組の隔週5日制への緊急提案——子どもにゆとりと真の学力を——について」。95年3月 報告者 広瀬隆雄氏「『子どもの権利条約』をどう受けとめるか」。内容については、教文研だより73号(95年3月発行)「『子どもの権利条約』をどう受けとめるか」に掲載されているので割愛する。

この委員会では、当面する教育課題が多いこともあって、「高校教育改革」以外、かなり網羅的な討議になっている感がある。テーマを1～2にしぼって、深く研究討議することも検討すべきではなかろうか。

3. 事業部

この部は、91年の組織・機構改革により、三部制の一つとして設置されたもので、県教文研の運営・事業の全般にわたり、企画・実施を所管としている。金原左門氏(研究評議会議長・中央大学教授)を部長に、各委員会座長、研究評議員若干名、所長、副所長、事務局長など11名によって構成されている。94年度に実施した主な事業は、(1)教文研だよりの発行6回。(2)教文研資料シリーズIII・IVの発行。(3)教育シンポジウムの実施(①6月22日(土)「神奈川の公立高等学校入学者選抜制度を考える——希望するすべての子ども・青年に高校教育を保障するために——」於神奈川公会堂。②10月27日(土)「高校改革をどう進めるか——ポスト神奈川方式をめぐって——」於藤沢産業センター。③95年2月25日(土)「不登校をめぐって、Part 4——学校の新しいあり方をさぐる——」於小田原市民会館)。(4)教育シンポジウム記録の刊行。(5)教職のための教育相談セミナーの実施。(6)在日外国人児童・生徒の教育状況調査などである。こゝでは(6)について記述してみる。(他については、教文研だより第68号～第73号、教文研資料シリーズIII「高校教育改革の方向と課題」、同IV「子どもたちのふれあい」、第5回シンポジウム記録、第6回同、第7回同、本所報・事業部報告などを参照されたい。)

4. 在日外国人児童・生徒の教育状況調査

この研究は、91年5月に、宮島喬教授(お茶の水女子大)を委員長として、10名の研究評議員で構成するプロジェクトチームにより始められた。関係者からの実情報告を受けるなど準備段階を経て、93年度、県下11地区(横浜・川崎・藤沢・相模原・大和・厚木・綾瀬・愛川・平塚・小田原・開成)で、小・中外国人児童・生徒の「指導に携っている方々」(指導主事・教諭・指導協力者)を対象に、アンケート調査を実施し、440名の回答を得た。集計・分析・検討を経て、94年10月に「外国人の子どもたちとともに——国際化進む学校の実態」と題する「中間報告」を発刊した(教文研だより第70号)。この報告書について、宮島委員長は「教材不足の実態、学校と保護者のコミュニケーションの難しさ、非教諭の指導協力者たちの果たしている役割の大きさなどを指摘することができた。また、外国人の子どもたちの悩みとして『学習についていけない』『進学が不安』『校則になじめない』『友達ができない』などが大きいこと、子どもたちの『いじめ』や『からかい』もあるこ

と、カリキュラムや入試方法への見直しの必要が、指導者の側で認識されていること、なども報告することができた。おそらく全国でも初の調査として、これから県内はじめ各界で色々と参考にされていくものと自負している。」と述べている。(本所報・調査委員会報告)

アンケート調査を終えてから、9月にインドシナ三国の子どもたちと保護者の学校体験を聞く座談会(相模原市・相模原教育会館)、11月に南米出身の日系人の子どもたちと保護者を招いて同様の座談会(平塚市・平塚市教育会館)、さらに95年2月には、日本語指導者たちの体験や当面している問題を聞く座談会(横浜市・神奈川県教育会館)をそれぞれ開催した。いづれも実践者の生の鋭い問題指摘をふくんだ感銘深い話で、外国人の子どもたちの日本語教育の実情を知る貴重な機会であった。今後、外国人生徒・学生(中・高・大)の「進学について」の座談会を本年5月下旬に予定している。それを終えて、これまでの調査・聞き取りを総括して秋には「本報告書」を発刊する予定である。

5. 教育相談

県教文研が80年秋に創立され、81年7月に「親と教師の教育相談室」が開設された。開設時の教育相談活動は次の四点を基本(特徴)としていた。①「親や教師のためとかぎらずに広く、県民のための教育相談活動を行うこと②どのような教育問題についてもその相談に応ずること③相談は「手紙によって受付けて、手紙によって回答する」こと④相談ケース一つひとつについて、原則として相談委員会で検討すること。しかし開設後数カ月間は平均して月に三件を少々上回る程度の相談件数であった。この相談件数の絶対数が少なすぎることがやがて問題となってきて、いろいろ検討されたが結局、相談件数の少なさはもっぱら「手紙」による受付方式に基因するものであって、母親が相談しようとしても、それを手紙にどう書き表したらよいかと戸惑うと推測された。かくして、82年から「電話」による教育相談が導入され、以来これが主流となって、相談件数も年々増加の一途をたどってきている。

教育相談は県教文研の中で最も日常的、直接的に県民の悩み・訴えを聞き、「対話」する開かれた事業である。94年の相談内容については、菅報告(本所報・教育相談部報告)に詳細述べられているので、本稿では年々増加してきている教育相談の様子を、内山淳相談員の作成した統計により示してみたい。なお94年度の教育相談に関して、特記すべき一つとして、次のことを報告しておきたい。「昨年11月、愛知県西尾市立東部中学校で起きた『いじめ自殺事件』以降、連日の新聞報道の中で、『教育相談』もクローズアップされた。その教育相談機関の一つとして、県教文研が某新聞に紹介された。それ以来、県外を含めて電話相談が殺到して、相談員は食事をとる暇もない位対応に追われた」ことである。

終りに、2年間熱心に教育相談員として活躍された、森七五三子氏が94年末でご退任されたこと報告します。在任中のご功勞に心から厚く感謝を申しあげたい。

○教育相談状況（統計）

A【相談件数】（91～94）

91年 291件	92年 349件	93年 424件	94年 572件
----------	----------	----------	----------

B【相談対応数から見た統計】

			94年度中の総相談対応数 572回		
電話相談対応延べ数	519回	90.7%	面接相談対応延べ数	50回	8.7%
手紙相談対応数	3回(3通)	0.5%			
継続相談の対応数	405回	70.8%	相談対応1回の数	167回	29.2%

C【相談者実人数から見た統計】

		相談者総実人数 252人	
94年度 電話・手紙・面談等 1回だけ	かかった人数・割合	167人	66.3%
94年度で 対応 延べ2回～5回	かかった人数割合	61人	24.2%
” 延べ6回～9回	かかった人数割合	6人	2.4%
” 延べ10回～19回	かかった人数割合	10人	4.0 %
” 延べ20回以上	人数割合	8人	3.2%

D【継続対応数内訳】

		94年度中の総相談対応数 572回	
電話・手紙・面談等	94年度1回だけの人の相談対応数・割合	167	29.2%
継続2回～5回の人		146	25.5%
”	” 6回～9回の人	25	4.4%
”	” 10回～19回の人	78	13.6%
”	” 20回以上の人	156	27.3%

1. 活動日誌

1994年

4月2日 教育相談委員会
 4月15日 教育改革研究委員会
 " 教育改革・作業部会
 4月16日 事業部・調査委員会
 " 事業部会
 4月28日 子どもの生活研究委員会
 5月7日 教育相談委員会
 5月18日 教育改革・作業部会
 5月21日 事業部会
 " 事業部・調査委員会
 5月25日 理事会
 5月26日 子どもの生活研究委員会
 5月27日 教育改革研究委員会
 6月4日 教育相談委員会
 6月17日 教育改革・作業部会
 6月18日 子どもの生活研究委員会
 6月22日 教育問題シンポジウム開催
 (横浜市)
 6月24日 教育改革研究委員会
 " 事業部会
 6月27日 専任所員連絡会議
 7月2日 教育相談委員会
 7月8日 教育改革研究委員会
 7月16日 第49回研究評議会
 7月19日 子どもの生活研究委員会
 7月20日 教育総研主催
 ~22日 研究所交流会参加(新潟県)
 7月28日 教育改革・作業部会
 8月2日 事業部会
 8月31日 教育改革・作業部会
 9月9日 教育改革研究委員会
 " 事業部会
 9月12日 理事会(臨時)
 9月13日 子どもの生活研究委員会
 9月14日 教育改革・作業部会
 9月17日 事業部・調査委員会(座談会①)
 9月19日 教育改革・作業部会(解散)
 10月1日 事業部・調査委員会
 " 教育相談委員会
 " 教育相談セミナー①開催
 10月20日 子どもの生活研究委員会
 10月21日 事業部会

10月28日 教育改革研究委員会
 10月29日 第六回教育シンポジウム開催
 (藤沢市)
 11月5日 教育相談委員会
 " 教育相談セミナー②開催
 11月10日 神教組県教育研究集会参加
 (鎌倉市)
 ~11日
 11月19日 事業部・調査委員会(座談会②)
 11月24日 子どもの生活研究委員会
 11月25日 教育改革研究委員会
 " 事業部会
 12月3日 事業部・調査委員会
 " 教育相談委員会
 " 教育相談セミナー③開催
 " 全国教育相談研究集会参加
 (東京)
 12月7日 専任所員連絡会議
 12月9日 教育改革研究委員会
 12月10日 子どもの生活研究委員会
 12月17日 第50回研究評議会

1995年

1月7日 教育相談委員会
 1月20日 事業部会
 1月26日 子どもの生活研究委員会
 1月27日 日教組全国教育研究集会
 ~30日 (長崎市)
 2月4日 教育相談委員会
 " 教育相談セミナー④開催
 " 事業部・調査委員会(座談会③)
 2月22日 第五回教育を語る集い参加
 2月25日 第七回教育シンポジウム開催
 (小田原市)
 2月28日 子どもの生活研究委員会
 3月3日 教育改革研究委員会
 3月4日 教育相談委員会
 3月8日 専任所員連絡会議
 3月10日 事業部会
 3月18日 第51回研究評議会
 3月25日 事業部・調査委員会
 3月30日 子どもの生活研究委員会

2. 教文研だより・資料等の発行

1994年

- 6月 第68号 ポスト・モダンの相談対応
研究評議員 浅見 聡
- 7月 第69号 いま、「学校」の役割を考える
－教育相談室から見えてくること－
教育相談室専任カウンセラー 内山 淳
- 10月 第70号 外国人の子どもたちとともに
－国際化進む学校の実態－
在日外国人児童・生徒教育状況調査委員会
- 11月 第71号 新学力観をどうとらえるか
－生涯学習論・学校5日制との関連を含めて－
研究評議員 黒沢 惟昭

1995年

- 2月 第72号 いじめに対策はあるのか
－大人の感性と在り方雑考－
教文研相談員 永田 實
- 3月 第73号 「子どもの権利条約」をどう受けとめるか
研究評議員 広瀬 隆雄

- 1994年 6月 所報「1994」
- 1994年 7月 第5回教育シンポジウム記録「不登校をめぐる Part 3」
- 1994年 10月 教文研資料シリーズIII「高校教育改革の方向と課題」
- 1995年 2月 教文研資料シリーズIV「子どもたちのふれあい」
- 1995年 2月 第6回教育シンポジウム記録「高校改革をどう進めるか」

3. フィルム・ライブラリーの貸出状況と所蔵フィルム

1994年度【フィルム・ライブラリー】の貸出状況

種 別	利用回数	視聴者数
小 学 校	17	4307
中 学 校	15	4755
高 社 他	5	104
計	37	9166

神奈川県教育文化研究所所蔵フィルム一覧

◎貸出期間 利用日含め 5 日間

◎費 用 無 料

◎予 約 受 付 045(24)3531

〔16mmフィルム・スライド〕

1. 予言 (カラー41分)	・戦略爆撃調査団による記録フィルムと今なお苦しむ被爆者の現状を交錯させ、核廃絶を訴える。
2. ひろしま (白黒100分)	・広島のある高校の女学生たちが勤労働員の作業中に被爆。原爆の恐ろしさを描いた戦後初の劇映画。
3. 人間をかえせ (カラー20分)	・10フィート運動で入手したフィルムと今なお苦しむ被爆者の訴えをおりませ、核問題の本質を問う。
4. 侵略 (白黒60分)	・日中戦争時に日本軍が中国で何をしたかを描いたドキュメンタリー。一人ひとりに戦争責任を問う。
5. ひろげよう平和憲法 (カラー27分)	・日本国憲法の成立とその背景を明らかにしながら、平和憲法の大切さについて考える。
6. もしこの地球を愛するならば (カラー26分)	・もし、核保有国がそれを使用したら、私たちの地球は一体どうなるのか。今何をすべきかを訴える。
7. 歴史(核狂乱の時代) (カラー116分)	・第二次大戦から今日の核兵器配備の実態をえぐり、被爆者の苦しみ、怒り、そして行動を描く。
8. トビウオのぼうやは病気で (カラー19分・アニメ)	・1954年、太平洋のビキニ環礁でアメリカが水爆実験をしました。海の底の魚たちはどうだったのでしょうか。
9. ふるさとのどうぶつえん (カラー24分)	・大阪天王寺動物園の現代の平和な様子を見ながら、40年ほど昔の戦争で多数の動物が殺された史実をふり返る。
10. ヒロシマのうた (カラー11分・アニメ)	・被爆した少女が8月6日に初めて自分の生い立ちを聞かされる。でも少女は力強く生きていく。
11. おかあちゃんごめんね (カラー25分)	・大空襲の日、体の弱い母は、この子たちだけは生きのびて欲しいと、炎の中に消えていく。
12. 100ばんめのサル (カラー20分・アニメ)	・戦争や核の恐怖のない平和なくらしをアニメと実写フィルムを折まぜながら、世界に訴える。
13. 小田原にも空襲があった (カラースライド53コマ・13分)	・小田原空襲の惨状を写真、絵、当時の体験者の話等で再現し、平和の尊さを訴える。(西湘地区教組製作)
14. 太陽がおちた広島、長崎、第5福龍丸 (カラースライド83コマ・13分)	・広島、長崎、第5福龍丸、三たびに及ぶ悲惨な被爆の実態を明らかにする。(都教組製作)
15. ひろしまの絵 (カラースライド46コマ・15分)	・広島市民が描いた、生々しい原爆の絵。
16. 核戦争 (カラー15分・アニメ)	・核問題の本質を科学的に、論理的に、しかも子どもたちに分かりやすく説明し、平和の尊さを考える。
17. 東京・ヒロシマ子ども派遣団1986 (カラー31分)	・東京の小中学生、父母、教師、140名が被爆地ヒロシマの地へ……。そして、人間の心と命を見つめる。
18. おかあさんの木 (カラー22分・アニメ)	・7人の息子達が次々に戦場へ。お母さんはその度に息子の名前をつけたキリの木を植え、一人帰りを待つのだった。しかし、悲しい知らせが……

19. なっちゃんの手ぶくろ (カラー18分・アニメ)	・戦争の悲惨さ、平和の尊さを心の奥深くに訴える。
20. おこりじぞう (カラー27分・人形アニメ)	・核兵器の恐ろしさと平和の尊さを訴えた人形アニメーション。
21. 象のハナ子 (カラー60分・人形アニメ)	・戦争中、「動物園の猛獣を殺せ」と軍隊から命令が下った。象を何とか助けようとする三吉少年。
22. アパルトヘイトの子どもたち (カラー30分)	・南アのアパルトヘイト政策を人権の立場から世界に訴える。
23. 樺太犬ゴン太・母をさがせ (カラー25分・アニメ)	・戦争で離ればなれになった母と子が愛犬の活躍で感動的な再会をする。
24. 日の丸と君が代 (カラー32分)	・日の丸・君が代の強制化が進む中でその問題点を再び明らかにする。
25. 象のいない動物園 (カラー1時間21分・アニメ)	・太平洋戦争下の上野動物園での実話をもとにつくられたアニメ映画。
26. はばたけ明日への瞳 (カラー51分)	・情緒障害児の少年の心の優しさと、クラスの子どもたちの友情の美しさを描いた児童劇映画。
27. 太郎のかがみ (カラー56分)	・部落差別と障害者に対する差別の問題を子どもたちと一緒に学習していく、人権啓発ドラマ。
28. 友子よ、晴れない霧はない (カラー42分)	・同和地区出身でたくましく生きる義姉をもつ女子中学二年生が、友だちを大切に差別を許さない真すぐな心をもった子に育っていくまでを描く。
29. ひろしまのエノキ (カラー20分・アニメ)	・被爆したエノキを守り続ける子どもたち。平和と命の尊さを描く感動のアニメーション。
30. 一つの花 (カラー23分)	・国語の教科書(小学校四年生用)のロングセラー教材の映像化作品。戦時中のつらい運命に絶えてひっそりと、力強く生きていく人間の姿を共感をこめて描く。
31. 侵略・マレー半島 教えられなかった戦争 (カラー110分)	・日本軍は至るところで大虐殺を行い、残虐行為を繰り返した。それは、どうしても拭い去ることのできない歴史的事実である。

〔ビデオフィルム〕

※No.11～34は「NHK特集名作100選」中の作品ですべてカラー

1. 証言 南京は今も忘れない (白黒15分)	・日本軍による南京大虐殺の史実を豊富な資料で描く。
2. 日の丸と君が代 (カラー32分)	・日の丸・君が代の強制化が進む中でその問題点を再び明らかにする。
3. 沖縄戦・未来への証言 (カラー55分)	・沖縄戦の実写フィルムと現在の沖縄の姿をモンタージュしてその実相を明らかにする。
4. やがて…春 (カラー105分)	・いじめの問題を真正面から捉え、命の尊さ、心のやさしさを考えさせる。
5. 核戦争後の地球(第1部地球炎上) (カラー30分)	・全面核戦争から一週間後の地球の惨状を実写フィルムや特撮で描き、核の恐ろしさを訴える。

6. 核戦争後の地球(第2部地球凍結) (カラー30分)	・核戦争による死の灰が長期的に生態系に影響し、地球環境を破壊していく実態を描く。
7. はだしのゲン (カラー90分)	・ヒロシマでの原爆投下で目の前で父、姉、弟が家の下敷になり死んでしまうが、母とゲンは力強く生きていく。
8. はだしのゲン2 (カラー90分)	・原爆孤児たちと明るく元気に生きるゲン。しかし、母の病気が悪化し、やがて悲しい分かれが…。
9. 夏服の少女たち (カラー30分)	・原爆死した少女が残したものは、ボロボロに燃えつきたあこがれの女学校の夏服だけだった。
10. 小さな証言者たち (カラー20分)	・ナチスの残虐の歴史をポーランドの子どもたちの絵と作文によって再現した記録映画。
11. あなたはこんな水を飲んでいる (60分)	・下水が飲料水に変身する。塩素や活性炭を加え、かろうじて維持される都市水道の実態と将来を探る。
12. 悲劇の巨鳥 ～アホウドリはよみがえるか～ (50分)	・絶滅の危機にさらされている巨鳥アホウドリ、雄大な舞とユーモラスな生態を紹介。
13. 地球汚染 第1部 大気に異変が起きている (60分) 第2部 海はひそやかに警告する (50分)	・地球を激変させる大気異変や深刻な海洋汚染問題が多発。人類が考えなければならない未来への緊急考察。
14. 調査報告 チェルノブイリ原発事故 (50分)	・欧州全体を汚染したチェルノブイリ原子力発電所爆発事故。汚染状況を追跡し、核の恐ろしさを見つめる。
15. 黒い雨 ～広島・長崎原爆の謎～ (45分)	・40年ぶりに発見された壁にくっきりと残る染みと様々な証言から、黒い雨の成分を化学分析。
16. 目撃された大津波 (50分)	・昭和58年5月26日。秋田県沖地震によって津波が日本海沿岸の町を襲った。その瞬間を記録した映像を再現。
17. 土佐・四万十川 (50分)	・アイヌ語で大変美しいという意味の「シマニタ」から名付けられたという四万十。日本最後の清流を追跡。
18. これが鯨だ (50分)	・現在、地球上最大の生物「鯨」、話題の生物「鯨」を様々な角度から考える。
19. 昭和の誕生 (50分)	・昭和天皇の即位で始まった激動の時代。円タク、モボモガ、金融恐慌等の昭和初期を貴重なフィルムでたどる。
20. 東京大空襲 (50分)	・あの惨禍を生み出したのは米軍の日本焦土作戦だった。「東京大空襲の爆撃命令書」とその記録フィルム。
21. 農民兵士の声がきこえる (50分)	・岩手県の農村の納屋から、戦場の兵士が故郷の恩師に送った7000通の軍事郵便が発見された。
22. これがヒロシマだ (50分)	・原爆体験を描いた数百枚の絵を携えて50日間23都市を旅する被爆者。ノーモア広島の声がアメリカへ。
23. カメラマン・サワダの戦争 (50分)	・報道カメラマン沢田教一は最前線は何を求めたのか。5万カットのフィルムから、彼の視点が解き明かされる。
24. 日本中古品 (50分)	・中古衣料、使い古されたタイヤ、自動車エンジン、自動車がアジアの国でどのように売られているのか。
25. 焼き鳥までがタイ国産 (50分)	・アジの開き、焼き鳥など日本の伝統食までが、タイから輸入されている。外食産業の影響を追跡。

26. 想定ドキュメント 輸入食料ゼロの日 (80分)	・食料輸入がとだえたら…1年後には3000万人が餓死するという数値が算出されるまでを想定ドキュメント。
27. 再会 ～35年目の大陸行～ (50分)	・3000人を超える残留孤児がまだ中国に残っている。肉親捜しの手がかりを求める紀行。
28. 移住20年目の乗船名簿 前編(70分) 後編(60分)	・昭和43年、あるぜんちな丸がブラジルに向かった。その名簿をもとに移住者たちの20年を追うドキュメンタリー。
29. 旅立とういま ～こずえさん20歳の青春～ (60分)	・サリドマイド禍で両腕を失った少女が、苦難を乗り越えて社会にはばたいていく青春の14年間に継続取材。
30. そしてトンキーもしんだ (50分)	・太平洋戦争時代、上野動物園の3頭の象ジョン、トンキー、ワンリーたちとの運命と人との交流を描く。
31. ドラマ教員室 (60分)	・生徒に体罰を与えたことによって表面化する教員室での人間ドラマ。教師の姿とは、学校の在り方とは。
32. あかちゃん ～0歳児からのメッセージ～ (45分)	・誕生直後から「学習準備」をしている0歳児。その繊細な心理の発達過程の1年間に、科学的に解明。
33. のぞみ5歳 ～手さぐり子育て日記～ (45分)	・「幸せです」と微笑み、語る全盲妻の子育て記。優しくも、強い絆に結ばれた3人の歩んできた道とは。
34. こどもたちの食卓 ～なぜひとりて食べるの～ (50分)	・こどもたちの心と体を蝕む「孤立化現象」。1000枚の絵が物語る、意外な実態。
35. エイズの防衛をいま ～エイズは予防できる病気です～ (カラー150分)	・1992年3月に開催された財団法人「エイズ予防財団」主催のシンポジウムの記録。※デビングでの活用を目的とする。
36. 返子・強制連行の傷跡 事前調査 '92.5.30 (白黒30分)	・神奈川県朝鮮人強制連行真相調査団による池子、久木、沼間地区の調査の記録フィルム。
37. 橋のない川 (139分)	・住井すゑ原作の小説を映画化。被差別部落民の生活を部落完全解放を求める視点から力強く描いた作品。
38. 住井すゑ「九十歳の人間宣言」 (カラー90分)	・1992.6.19 イン武道館 「橋のない川」第7部出版記念講演会の完全収録。
39. 伝える言葉 ～大阪府立柴島高校～ (50分)	・非差別部落出身者や在日外国人などさまざまなハンディを負った生徒たちが「自分の境遇を語る」活動を通して、荒れた学校を立て直していく。
40. 昭和の記録 ～映像でつづる激動の昭和史～ 全32巻(各巻・約50分)	
1. 幕あける昭和の時代 (大正～昭和3年/1912～28年)	6. 緒戦の勝利 (昭和17年/1942年)
2. 銀座の柳と軍靴の響き (昭和4～7年/1929～32年)	7. 連合軍総反撃 (昭和18年/1943年)
3. 非常時日本 (昭和8～12年/1933～37年)	8. 敗色日々に濃し (昭和19年/1944年)
4. 日中全面戦争 (昭和13～15年/1938～40年)	9. 戦争終結 (昭和20年/1945年・戦中)
5. 太平洋戦争勃発 (昭和16年/1941年)	10. 焦土の中から (昭和20年/1945年・戦後)

11. 占領と民主化への歩み (昭和21・22年／1946・47年)	22. 昭和元禄 (昭和43・44年／1968・69年)
12. 再建の道けわし (昭和23・24年／1948・49年)	23. 繁栄と公害のなかで (昭和45・46年／1970・71年)
13. 講和条約調印 (昭和25・26年／1950・51年)	24. 「列島改造」と石油ショック (昭和47・48年／1972・73年)
14. 独立はしたけれど (昭和27・28年／1952・53年)	25. 高度成長の終焉 (昭和49・50年／1974・75年)
15. 政界再編と神武景気 (昭和29・30年／1954・55年)	26. 混迷の時代へ (昭和51・52年／1976・77年)
16. もはや戦後ではない (昭和31・32年／1956・57年)	27. 景気低迷と省エネルギー (昭和53・54年／1978・79年)
17. 消費革命の時代へ (昭和33・34年／1958・59年)	28. 経済摩擦と防衛問題 (昭和55・56年／1980・81年)
18. 安保闘争と高度成長 (昭和35・36年／1960・61年)	29. 東西緊張と黒字国日本 (昭和57・58年／1982・83年)
19. 先進国への道 (昭和37・38年／1962・63年)	30. 貿易摩擦と情報化社会 (昭和59・60年／1984・85年)
20. 東京オリンピック (昭和39・40年／1964・65年)	31. 円高・国際化の中の日本 (昭和61・62年／1986・87年)
21. 経済大国をめざして (昭和41・42年／1966・67年)	32. 昭和から平成へ (昭和63・64年／1988・89)
41. ヒロシマ ナガサキ ～核戦争のもたらすもの～(46分)	・科学的な視点から、被爆者の証言もまじえ、原爆被爆の総合像を描いた記録映画。
42. 原爆の子 (モノクロ96分)	・広島における原爆の愚かしい惨禍について語り、反戦平和を訴える映画。
43. 黒い雨にうたれて ～はだしのゲン成人編～ (カラーアニメ90分)	・被爆直後の広島に、放射能を含んだ黒い雨が。今なお死の影が生き証人たちの背後に……。
44. 第五福竜丸 (モノクロ115分)	・彼らは太陽が西から昇るのを見た。もう一つの被爆を描く、衝撃の問題作。
45. 火垂るの墓 (カラーアニメ90分)	・神戸大空襲で清太と節子の兄妹は二人きりに。4歳と14歳で生きようと思ったが……。
46. パパママバイバイ (カラーアニメ75分)	・横浜市で起きた米軍機墜落事故をもとにアニメ化。平和、命の大切さを問いかける。
47. 白と黒とわんぱくたち (カラー83分)	・教室で犬を飼ったために、様々な弾圧が。黒やわんぱくたちや「わんちゃん先生」の記録
48. やまびこ学校 (モノクロ105分)	・作文集「やまびこ学校」が原作。綴り方教室を通し、中学二年生の姿を生き生きと描く。
49. NHK中学生激論ドラマ「いじめ」 (カラー45分)	・中学生たちが、命の重さに気づくには、素直に話し合い、理解し合うことが大切と訴える。

4. 1994年度 神奈川県教育文化研究所・各種名簿

〈理事〉

理事長 繁里 昭

氏 名	所 属
繁里 昭	神奈川県教職員組合 執行委員長
金原 左門	中央大学 教授 研究評議会議長
倉持巳佐男	神奈川県教育文化研究所 所長
松井 堅	神奈川県教育公務員弘済会 理事長
東野 陽子	神奈川県議会議員
関 智義	神奈川県教職員組合 執行副委員長
小中 儀隆	神奈川県教職員組合 執行副委員長
川井田憲二	神奈川県教職員組合 書記長
神崎 和夫	神奈川県教職員組合 書記次長
大竹 康夫	神奈川県教職員組合 書記次長
福寿 弘明	横浜市教職員組合 執行委員長
内田 信之	川崎市教職員組合 執行委員長
矢納 直彦	三浦半島地区教職員組合 執行委員長
栗原 定晟	湘南教職員組合 執行委員長
中村 譲	湘北教職員組合 執行委員長
加藤 良輔	中地区教職員組合 執行委員長
山崎 幸與	西湘地区教職員組合 執行委員長

〈顧問〉

江藤 正一	(8/31退任)
露木喜一郎	
三好 新次	
坂東 忠彦	(9/1新任)

〈研究評議員〉

議長 金原 左門

氏 名	所 属
金原 左門	中央大学教授 政治学
平出 彦仁	横浜国立大学教授 心理学
田中 正司	横浜市立大学名誉教授 社会思想史
滝沢 正樹	関東学院大学教授 社会心理学
富山 和夫	関東学院大学教授 経済学
市川 博	横浜国立大学教授 教育学
宮島 喬	お茶の水女子大学教授 社会学
黒沢 惟昭	神奈川大学教授 社会教育学
木谷 要治	横浜国立大学教授 教育学
大槻 勲子	国際婦人教育振興会会長
清水 芳男	全川崎労働組合協議会事務局長
宮島 郁子	雑誌「ひと」元編集委員
菅 龍一	児童文学作家 和光大学講師
林 洋一	白百合女子大教授 心理学
府川源一郎	横浜国立大学助教授 教育学
高橋 和子	横浜国立大学助教授 教育学
広瀬 隆雄	桜美林短期大学専任講師 教育行政学
赤尾 勝己	帝京技術科学大学講師 社会教育学
浅見 聡	東海大学講師 哲学
関野 安夫	前神奈川県議会議員
石川 滋	前神奈川県議会議員
安部 正	神奈川県議会議員
東野 陽子	神奈川県議会議員
三宅 丈夫	神奈川県議会議員
山村 幸雄	神奈川県議会議員
安斎 義昭	神奈川県議会議員
長部 泉	横浜市教職員組合 教文部長
岡部 養一	川崎市教職員組合 教文部長
浅井 良雄	三浦半島地区教職員組合 教文部長
中村 正裕	湘南教職員組合 教文部長
鈴木 茂	湘北教職員組合 教文部長
高木 俊樹	中地区教職員組合 教文部長
稲葉 卓司	西湘地区教職員組合 教文部長

第一研究部「子どもの生活研究委員会」

部長 市川 博

氏 名	所 属
平出 彦仁	横浜国立大学教授 心理学
田中 正司	横浜国立大学名誉教授 社会思想史
滝沢 正樹	関東学院大学教授 社会心理学
市川 博	横浜国立大学教授 教育学
木谷 要治	横浜国立大学教授 教育学
宮島 郁子	雑誌「ひと」元編集委員
菅 龍一	児童文学作家 和光大学講師
林 洋一	白百合女子大教授 心理学
府川源一郎	横浜国立大学助教授 教育学
高橋 和子	横浜国立大学助教授 教育学
浅見 聡	東海大学講師 哲学
山村 幸雄	神奈川県議会議員
安斎 義昭	神奈川県議会議員
浅羽 一江	横須賀市立岩戸中学校
森 一郎	相模原市立清新小学校
小崎 尚彦	小田原市立下中小学校
小山 雄二	横須賀市立大矢部小学校
加藤 敬	横浜市立今宿中学校
福澤 厚	川崎市立田島小学校

第二研究部 「教育改革研究委員会」

部長 富山 和夫

氏 名	所 属
富山 和夫	関東学院大学教授 経済学
宮島 喬	お茶の水女子大学教授 社会学
黒沢 惟昭	神奈川大学教授 社会教育学
大槻 勲子	国際婦人教育振興会会長
清水 芳男	川労協事務局長
広瀬 隆雄	桜美林短期大学専任講師 教育行政学
赤尾 勝己	帝京技術科学大学講師 社会教育学
関野 安夫	前神奈川県議会議員
石川 滋	前神奈川県議会議員
安部 正	神奈川県議会議員
東野 陽子	神奈川県議会議員
三宅 丈夫	神奈川県議会議員
小中 儀隆	神奈川県教組 教文部長
長部 泉	横浜市教組 教文部長
岡部 養一	川崎市教組 教文部長
浅井 良雄	三浦半島地区教組 教文部長
中村 正裕	湘南教組 教文部長
鈴木 茂	湘北教組 教文部長
高木 俊樹	中地区教組 教文部長
稲葉 卓司	西湘地区教組 教文部長

＜教育相談部＞

部長 平出 彦仁

氏 名	所 属
平出 彦仁	横浜国立大学 心理学
滝沢 正樹	関東学院大学 社会心理学
市川 博	横浜国立大学 教育学
菅 龍一	児童文学作家 和光大学講師
林 洋一	白百合女子大学 心理学
広瀬 隆雄	桜美林短期大学 教育行政学
内山 淳	専任カウンセラー
永田 實	専任カウンセラー
浅見 聡	専任カウンセラー
森七五三子	専任カウンセラー
藤倉 正道	鎌倉市立大船中学校
長沼 国徳	川崎市立戸手小学校
西條 悦子	横浜市立松本中学校

＜顧 問＞

中川 園子	横浜市立大病院小児精神神経科
-------	----------------

＜事業部＞

部長 金原 左門

氏 名	所 属
金原 左門	中央大学 政治学
平出 彦仁	横浜国立大学 心理学
市川 博	横浜国立大学 教育学
富山 和夫	関東学院大学 経済学
関野 安夫	前神奈川県議会議員
林 洋一	白百合女子大学 心理学
広瀬 隆雄	桜美林短期大学 教育行政学
浅見 聡	東海大学 哲学
倉持巳佐男	神奈川県教育文化研究所 所長
小中 儀隆	神奈川県教育文化研究所 副所長
榎本 重次	神奈川県教育文化研究所 事務局長

＜専任所員＞

氏 名	所 属
立石 憲男	横浜市教育文化研究所
澤 英一郎	川崎市教育文化研究所
板垣 福雄	三浦半島地区教育文化研究所
日原 通晴	湘南教育文化研究所
吉川邦之助	湘北教育文化研究所
菊地 一郎	中地区教育文化研究所
飯田 輝子	西湘地区教育文化研究所

事務局スタッフ

所 長	倉 持 巳佐男
副 所 長	小 中 儀 隆（神教組副委員長）
研究評議会議長	金 原 左 門（中央大学教授）
研 究 評 議 員	林 洋 一（白百合女子大学教授）
研 究 評 議 員	広 瀬 隆 雄（桜美林短期大学助教授）
研 究 評 議 員	浅 見 聡（東海大学講師）
事 務 局 長	榎 本 重 次

所 報 1995

1995年 6 月 1 日

神奈川県教育文化研究所
TEL .045-241-3531

印刷：(有)神奈川教育企画
TEL .045-253-3435

神奈川県教育文化研究所

所在地 〒220 横浜市西区藤棚町2-197 神奈川県教育会館内

TEL 045(241)3531